

2 0 2 4 年 度

植 物 防 疫 年 報

2 0 2 5 年 1 0 月

福 島 県 病 害 虫 防 除 所

(福島県農業総合センター)

新たに発生が確認された病害虫・雑草

1 ナガエツルノゲイトウ

- (1) 学 名 : *Alternanthera philoxeroides* (Mart.) Griseb.
- (2) 発 生 作 物 : 水稻
- (3) 発生確認時期 : 2024 年 6 月
- (4) 発 生 地 域 : いわき市
- (5) 被害の概要等

ナガエツルノゲイトウは、生態系や農業への悪影響を及ぼすおそれがあり、特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき、「特定外来生物」に指定されている。2024 年 6 月に、福島県いわき市で本種と疑われる雑草の発生が確認され、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構に同定を依頼したところ、8 月 6 日に本県未確認のナガエツルノゲイトウであることが判明した（写真 1、写真 2）。本種の発生状況を調査した結果、定着地域はごく一部の地域に限られており、現在のところ広域的な広がりとは確認されていない。



写真 1 福島県いわき市で発生が確認された
ナガエツルノゲイトウ



写真 2 水田での発生状況

2 宿根カスミソウのトマトハモグリバエ

- (1) 学 名 : *Liriomyza sativae*
- (2) 発 生 作 物 : 宿根カスミソウ
- (3) 発生確認時期 : 2024 年 7 月
- (4) 発 生 地 域 : 浜通り地方
- (5) 被害の概要等

トマトハモグリバエは、本県では 2003 年に夏秋トマトで発生が確認され、以後、夏秋露地キュウリ等の作物で県内全域に発生している（写真 3）。

2024 年 7 月に、福島県浜通り地方の宿根カスミソウで、ハモグリバエ類の加害が認められ、横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、2024 年 9 月 27 日にトマトハモグリバエであることが判明した。これまで、本種による宿根カスミソウへの寄生事例はなく、全国で初めての確認となる（写真 4）。

本種の発生状況を調査した結果、発生が見られる宿根カスミソウのほ場では、幼虫による葉の被害痕が著しく、下位葉～中位葉まで線状潜孔がみられた（写真 5、6）。

宿根カスミソウでの発生は、一部の地域に限られており、現在のところ広域的な拡がりとは確認されていない。



写真3 トマトハモグリバエ成虫



写真4 トマトハモグリバエ幼虫



写真5 葉の著しい被害



写真6 トマトハモグリバエによる葉の被害痕

3 キュウリのCABYV

- (1) 病 原 : Cucurbit aphid-borne yellows virus
- (2) 発 生 作 物 : キュウリ
- (3) 発生確認時期 : 2024 年 9 月
- (4) 発 生 地 域 : 中通り地方
- (5) 被害の概要等

2024 年 9 月に、福島県中通り地方の露地キュウリほ場において、葉に退緑及び黄化症状を示す株が認められた。横浜植物防疫所で、RT-PCR 法による検定及びその増幅産物による塩基配列の解析を行った結果、2024 年 10 月 29 日に CABYV の感染を確認した。

本ウイルスは、国内では、2024 年 2 月に京都府のキュウリで国内発の感染が報告され、同年 9 月に滋賀県でキュウリ及びメロンにおける感染が報告されている。

発病すると、葉の一部が退緑及び黄化し（写真 7）、後に葉全体が黄化する（写真 8）。さらに症状が進むと、株全体の葉が黄化する（写真 9）。また、本ウイルスに感染した株は着果不良によって、収量が大きく低下する。



写真 7 葉の一部の黄化症状



写真 8 葉全体の黄化症状

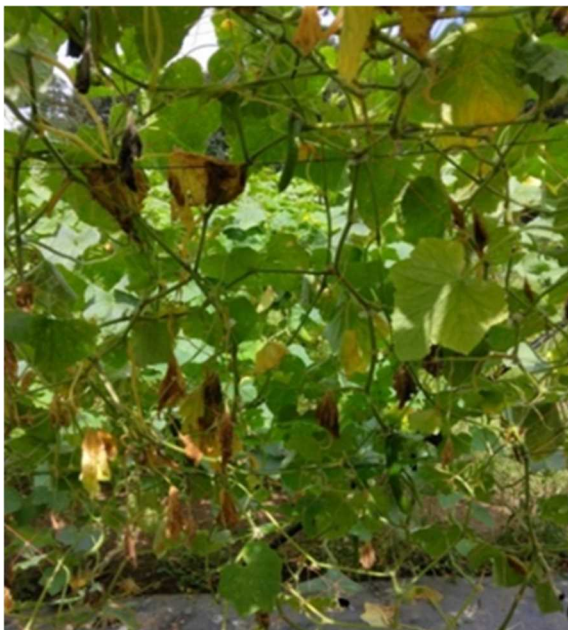


写真 9 株全体での黄化症状

4 サツマイモ基腐病

- (1) 学 名 : *Diaporthe destruens* (Harter) Hirooka, Minoshima & Rossman
- (2) 発 生 作 物 : サツマイモ
- (3) 発生確認時期 : 2024 年 10 月
- (4) 発 生 地 域 : 南会津地方
- (5) 被害の概要等

2024 年 10 月に、福島県南会津地方のサツマイモ栽培ほ場から収穫した塊根において、褐変症状を確認した（写真 10）。当所において、同植物体の茎病斑部（写真 11）から分離培養を行ったところ、サツマイモ基腐病が疑われた。横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、11 月にサツマイモ基腐病であることが判明した。現在のところ本県での本病害の発生は当該のほ場に限定されており、広域的な拡がりは確認されていない。

なお、本病は、2018 年に沖縄県で初めて確認され、沖縄県を含む 35 都道府県で発生が報告されている。



写真 10 塊根の腐敗状況



写真 11 地際部から腐敗するサツマイモの茎

5 サクセスキクイムシ

- (1) 学 名 : *Xyleborinus saxeseni* (Ratzeburg)
- (2) 発 生 作 物 : ナシ
- (3) 発生確認時期 : 2024 年 8 月
- (4) 発 生 地 域 : 中通り地方
- (5) 被害の概要等

2024 年 8 月に、福島県中通り地方のナシ生産者から、ごく小さな穿孔被害のある「幸水」果実が、農林事務所を通して病害虫防除所に持ち込まれ、内部を確認したところキクイムシ成虫と思われる昆虫が確認された。

横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、2024 年 9 月 27 日にサクセスキクイムシであると同定された。本種はこれまでナシ樹幹部への穿孔食害が確認されていたが、ナシ果実での被害は本県では初確認である。

成虫は、体長約 2mm、細長い円筒形で、光沢のある黒褐色をしている（写真 12）。

本種は、年 1～2 回発生する。成虫で樹内越冬した後、翌年 4～5 月頃脱出して衰弱している樹や倒木に深く穿孔し、孔道を作る。孔道の直径は約 0.7mm で食入後に細かい木屑を排出する。

成虫は、ナシ果実へ穿孔して被害果が生じ（写真 13、14）、被害果は、日数の経過とともにその穿孔部分を中心に腐敗する。



写真 12 サクセスキクイムシ成虫

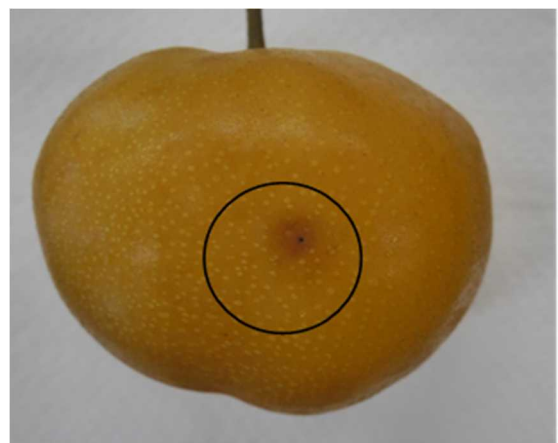


写真 13 果実表面の食入痕

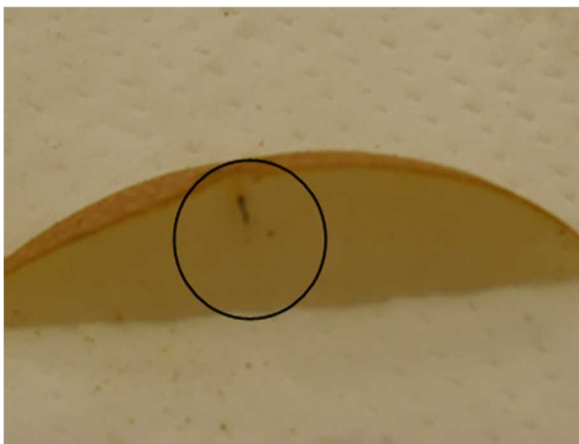


写真 14 果実内に食入した成虫

6 キュウリ退緑黄化病

- (1) 病 原：Cucurbit chlorotic yellows virus (CCYV)
- (2) 発 生 作 物：キュウリ
- (3) 発生確認時期：2024 年 10 月
- (4) 発 生 地 域：中通り地方
- (5) 被害の概要等

2024 年 10 月に福島県中通り地方の施設キュウリほ場において、タバココナジラミの寄生及び葉の退緑斑を確認したところ、キュウリ退緑黄化病の発生が疑われた（写真 15）。横浜植物防疫所に同定を依頼した結果、12 月にキュウリ退緑黄化病であることが判明した。

県内のキュウリほ場にて発生状況調査を実施したところ、複数地点においてタバココナジラミの寄生及び本病害と思われる株の発生が確認された（写真 16）。

国内では、2004 年に熊本県で初めて確認され、これまでに熊本県を含む 27 府県で特殊報が発表されている。

発病初期は、葉に退緑小斑点を生じ、次第に斑点が増加・癒合し、まだらに黄化し、拡大して葉脈間が退緑した黄化葉となる。また、黄化葉は、葉縁部が下側に巻く症状を呈す（写真 17）。黄化症状は中位葉から下位葉に現れやすく、感染しても生長点付近の葉には症状は認められない。



写真 15 キュウリ退緑黄化病に感染した株



写真 16 タバココナジラミ幼虫



写真 17 下側に巻く症状（黄化葉）

目 次

第1 植物防疫事業の推進組織体制	
1 病虫害防除所の設置及び活動状況	1
(1) 設置状況	1
(2) 運営状況	2
2 病虫害防除員の設置及び活動状況	3
(1) 設置状況	3
(2) 活動状況	3
(3) 市町村別病虫害防除員委託者数	4
第2 侵入調査事業	
1 国内検疫	5
(1) 侵入警戒調査	5
(2) 緊急防除等対象病虫害調査	10
(3) 種苗検疫	11
2 輸出検疫	12
(1) ベトナム向け輸出なし検疫	12
第3 農作物有害動植物発生予察事業	
1 事業実施状況	13
(1) 対象病虫害	13
(2) 病虫害発生予察調査ほ場等の設置	15
2 病虫害発生予察情報等の提供	18
(1) 発生予報の発表状況	18
(2) 防除情報の発表状況	18
(3) 注意報・警報・特殊報の発表状況	19
(4) 病虫害防除所ホームページによる病虫害情報、農薬情報等の発表状況	20
(5) 農薬登録変更情報	23
(6) ホームページの利用状況	23
3 気象経過及び生育経過の概要	24
(1) 気象経過の概要（福島地方気象台資料に基づき作成）	24
(2) 農作物の生育経過	26
4 主要病虫害の発生経過及び原因解析	29
(1) 普通作物	29
(2) 果樹	48
(3) 野菜・花き	65
5 発生面積及び防除面積	82
6 病虫害診断同定	85
(1) 依頼元及び依頼作物	85
(2) 診断同定の結果	85
7 鳥獣類による農作物の被害状況	86
(1) 鳥類による被害	86
(2) 獣類による被害	87
(3) 鳥獣類による被害合計	88
第4 病虫害防除指導の実施状況	
1 農薬取締業務及び農薬安全使用指導	89
(1) 農薬中毒事故の発生	89
(2) 農薬危被害防止指導	89
(3) 農薬管理指導士の育成	89
(4) 農薬適正使用アドバイザーの育成	89
(5) 農薬適正・安全使用指導	89
(6) 農薬販売者の届出及び指導	90
(7) 農薬流通量調査	92

(8) ゴルフ場の農薬安全使用指導	92
2 農林水産航空事業	93
(1) 無人ヘリコプターによる空中散布	93
(2) マルチローターによる空中散布（殺虫剤の計画のみ）	94
(3) 指導事項の概要	95
第5 研究成果等	
1 調査研究	96
(1) イネカメムシの発生地域の把握	96
(2) クモヘリカメムシに対する各種薬剤の斑点米抑制効果試験	97
(3) モモにおけるウメシロカイガラムシの発生消長の把握	98
(4) 果樹カメムシ類の多発生について	100
(5) ナシヒメシンクイの発生消長について	103
2 成果の公表	105
(1) 研究会等発表	105
(2) 研究会誌等投稿	105

本文中で使用する「地方」「地域」の範囲は、次のとおりです。

中通り北部	福島市、伊達市、伊達郡、二本松市、本宮市、安達郡
中通り南部	郡山市、田村市、田村郡、須賀川市、岩瀬郡、石川郡、白河市、西白河郡、東白川郡
会 津	会津若松市、喜多方市、耶麻郡、河沼郡、大沼郡、南会津郡
浜 通 り	相馬市、南相馬市、相馬郡、双葉郡、いわき市

第1 植物防疫事業の推進組織体制

1 病虫害防除所の設置及び活動状況

(1) 設置状況

所在地	〒963-0531	福島県郡山市日和田町高倉字下中道 116 番地 (福島県農業総合センター安全農業推進部)
電 話		024-958-1707～1709
F A X		024-958-1727
e-mail		boujyo@pref.fukushima.lg.jp yosatsu@pref.fukushima.lg.jp nougyou.anzen@pref.fukushima.lg.jp
ホームページ		https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/

ア 管轄区域

福島県全域

イ 2023 年耕地面積及び農作物作付（栽培）面積

(2024 年 9 月「福島県 農業・農村の動向等に関する年次報告」より)

耕地面積（農林水産省「耕地面積及び作付面積統計」）

田	94,800 ha
畑	38,900 ha

作付（栽培）面積

主要普通作物（農林水産省「作物統計」より）

稲	58,400 ha
小麦	468 ha
大豆	1,520 ha
そば	3,760 ha

主要野菜（農林水産省「野菜生産出荷統計」より）

きゅうり	660 ha
トマト	336 ha
いちご	101 ha

主要花き（県園芸課調べ）

きく	89 ha
宿根かすみそう	54 ha
りんどう	25 ha
トルコギキョウ	20 ha
鉢物	26 ha

主要果樹（農林水産省「果樹生産出荷統計」より）

もも	1,760 ha
日本なし	814 ha
りんご	1,200 ha
ぶどう	300 ha

主要工芸作物

葉たばこ	110 ha
(福島県たばこ耕作組合調べ)	

ウ 主な設備、備品等の概要

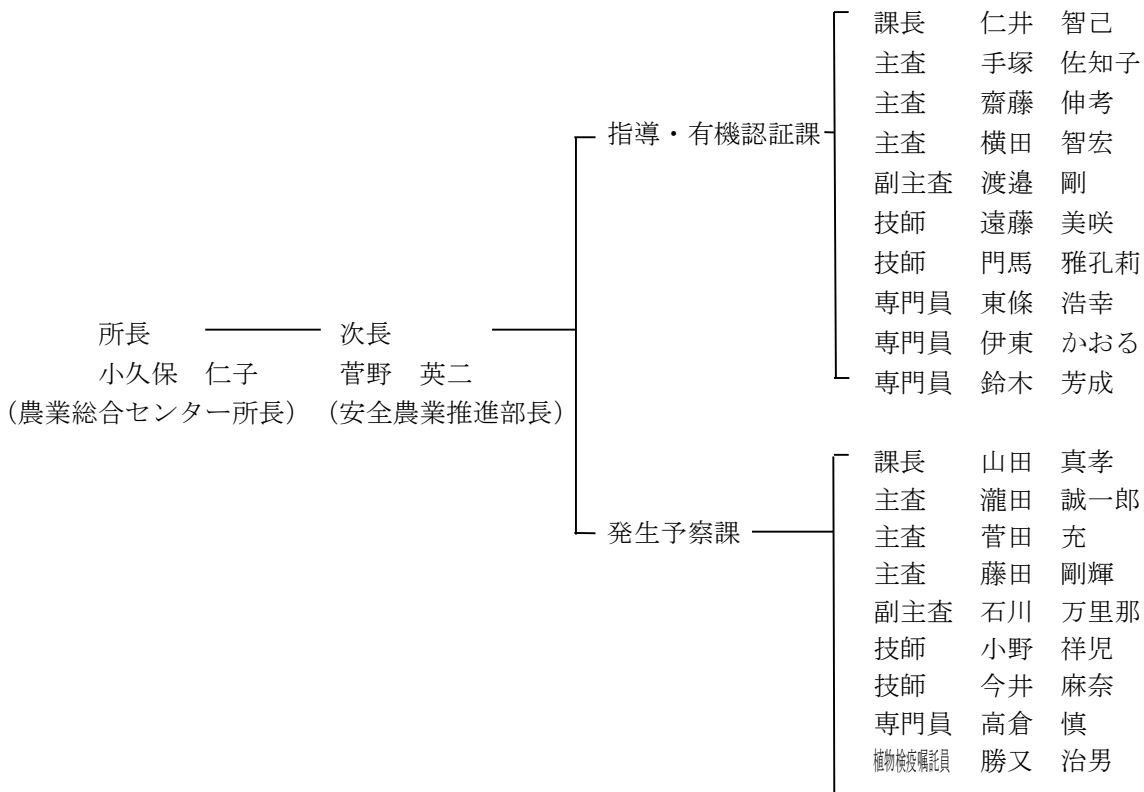
事務室、害虫診断室、病害診断室、農薬分析室

公有自動車 (6)、冷蔵庫 (5)、クリーンベンチ (1)、予察灯 (3)、実体顕微鏡 (1)

生物顕微鏡 (1)、恒温装置 (3)、純水製造装置 (1)、高圧蒸気滅菌器 (1)、人工気象機 (1)

(2) 運営状況

ア 組織体制



イ 病虫害防除所の分掌事務

(ア) 指導・有機認証課の業務に関すること

- a 農薬適正使用の推進及び危被害防止対策に関すること
- b 農薬管理指導士及び農薬適正使用アドバイザーに関すること
- c 農薬販売者の届出に関すること
- d 農薬販売者立入検査に関すること
- e 農薬流通量調査に関すること
- f ゴルフ場の農薬使用に関すること
- g 航空防除に関すること
- h 病虫害防除指針に関すること
- i 野生鳥獣による農作物被害調査に関すること
- j 肥飼料の届出及び検査業務に関すること
- k 有機認証業務に関すること

(イ) 発生予察課の業務に関すること

- a 病虫害発生予察事業に関すること
- b 病虫害発生予察情報及び防除情報、その他病虫害情報(ホームページ等) 作成・提供に関すること
- c 病虫害発生状況・発生面積報告、発生予察現況報告に関すること
- d 病虫害診断同定に関すること
- e 病虫害防除員に関すること
- f 病虫害検疫業務(国内・輸出)に関すること

2 病虫害防除員の設置及び活動状況

(1) 設置状況

植物防疫法（第33条第1項）及び福島県出先機関設置条例（第7条第2項）の規定に基づき、発生予察事業その他防除に関する業務遂行のため、市町村の区域ごとに非常勤の病虫害防除員を置く。

ア 設置期間

2024年4月1日～2025年3月31日

イ 設置員数

表1-1 設置員数（職業別）

職業別	員数（名）	交付金対象人員	県費のみ支給	無支給
農業協同組合職員	41	0	0	41
農家	79	79	0	0
計	120	79	0	41

表1-2 設置員数（地方別）

地方	農業協同組合職員	農家					合計
		A※1	B※2	C※2	D※2	計	
中通り	24	0	45	2	0	47	71
会津	10	1	16	0	2	19	29
浜通り	7	0	12	0	1	13	20
計	41	1	73	2	3	79	120
勤務時間/月	-	32時間以内	12時間以内			-	-

※1 農家Aは、水稻の予察灯等調査機器の保守管理又は特殊調査とトラップ等による対象病虫害の発消長調査を行う。作業の実施期間は4か月間。

※2 農家B～Dは、トラップ等による対象病虫害の発消長調査を行う。B、C、Dの活動期間はそれぞれ、4、3、2か月間。

(2) 活動状況

表1-3 一人当たりの平均活動状況

(月当たり時間数)

	予察灯 保守管理	予察灯調査 及び報告	トラップ等調査 及び報告	ほ場の発生病害虫 達観調査	周辺（担当管内）農業者 への聞き取り調査	計
農家A	8	8	8	6	2	32
農家B～D	-	-	6	4	2	12
農協協同組合職員※	-	-	-	-	(12)	(12)

※農協協同組合職員は無報酬

ア 講習会の開催

(ア) 病虫害防除員研修会

開催日：2025年2月18日（火）13:10～15:10

場所：福島県農業総合センター多目的ホール

出席者：126名（病虫害防除員、農業者、農業共済組合、農業協同組合、市町村、農林事務所等）

【講演】

講師：明治大学農学部 教授 糸山 享 氏

演題：「地球温暖化による害虫発生への影響」

情報提供：「令和6年度福島県で問題となった病虫害について」

情報提供者：病虫害防除所、農業総合センター生産環境部職員

(3) 市町村別病虫害防除員委託者数

市町村名	農協職員 数 (人)	農業協同組合名	農家数 (人)	農家数 内訳 (人)			防除員 合計 (人)
				作物	果樹	野菜・花き	
福島市	3	J Aふくしま未来	10	1	7	2	13
伊達市	3	J Aふくしま未来	6	0	3	3	9
国見町	0	J Aふくしま未来	2	1	1	0	2
二本松市	0	J Aふくしま未来	7	1	0	6	7
本宮市	2	J Aふくしま未来	0	0	0	0	2
大玉村	0	J Aふくしま未来	1	1	0	0	1
郡山市	3	J A福島さくら	3	0	1	2	6
田村市	1	J A福島さくら	3	1	0	2	4
三春町	1	J A福島さくら	1	0	0	1	2
小野町	1	J A福島さくら	0	0	0	0	1
須賀川市	2	J A夢みなみ	3	0	2	1	5
鏡石町	0	J A夢みなみ	1	0	1	0	1
石川町	1	J A夢みなみ	1	1	0	0	2
平田村	1	J A夢みなみ	0	0	0	0	1
白河市	1	J A夢みなみ	0	0	0	0	1
白河市(表郷)	0	J A東西しらかわ	1	1	0	0	1
中島村	1	J A夢みなみ	2	0	0	2	3
矢吹町	1	J A夢みなみ	1	0	0	1	2
西郷村	1	J A夢みなみ	0	0	0	0	1
棚倉町	1	J A東西しらかわ	2	1	0	1	3
矢祭町	1	J A東西しらかわ	1	1	0	0	2
会津若松市	1	J A会津よつば	4	0	1	3	5
磐梯町	0	J A会津よつば	1	0	0	1	1
猪苗代町	1	J A会津よつば	2	1	0	1	3
喜多方市	2	J A会津よつば	3	2	0	1	5
会津坂下町	1	J A会津よつば	2	1	1	0	3
会津美里町	2	J A会津よつば	3	1	1	1	5
南会津町	3	J A会津よつば	3	1	0	2	6
相馬市	0	J Aふくしま未来	5	2	1	2	5
南相馬市	2	J Aふくしま未来	1	0	0	1	3
新地町	0	J Aふくしま未来	1	0	0	1	1
檜葉町	0	J A福島さくら	2	1	0	1	2
いわき市	5	J A福島さくら	7	4	1	2	12
合 計	41		79	22	20	37	120

※農業協同組合職員は基幹事務所の住所地を市町村名とした。

第2 侵入調査事業

1 国内検疫

(1) 侵入警戒調査

ア イネミイラ穂病発生状況調査

(ア) 目的

イネミイラ穂病について、目視により侵入状況を調査することで、早期に発見するとともに発生拡大を防止する。

(イ) 調査方法

水稻の予察ほ場（伊達郡国見町、東白川郡矢祭町、河沼郡会津坂下町、いわき市瀬戸町）において、国内では未発生のイネミイラ穂病の発生の有無を9月に1回調査した。

(ウ) 結果

イネミイラ穂病は、いずれの調査地点においても認められなかった。

イ 火傷病発生状況調査

(ア) 目的

ミバエ類や火傷病等の諸外国より侵入の危険性が高い病害虫について、フェロモントラップや目視により侵入状況を調査することで、早期に発見するとともに発生拡大を防止する。

(イ) 調査方法

果樹（リンゴ、ナシ）の予察ほ場、定点調査ほ場（調査ほ場）において、国内では未発生の火傷病の有無を5月、10月に調査した。なお、2024年（令和6年）に限り、中国産輸入花粉を使用していたリンゴ5ほ場、ナシ5ほ場の計10ほ場を追加で調査した（※表2-1）。

(ウ) 調査結果

火傷病は、いずれの調査地点においても認められなかった。

表2-1 調査ほ場設置状況

調査対象 調査場所	火傷病	<i>Xylella fastigiosa</i>	設置トラップ		
			チチュウカイミバエ	ミカンコミバエ種群 クインスランドミバエ ウリミバエ	コドリंगा
福島市飯坂町平野（予察）	○		○	○	○
福島市飯坂町平野（定点）		○			
福島市飯坂町東湯野		○			
伊達市梁川町		○			
伊達郡国見町					○
郡山市日和田町	○		○	○	○
岩瀬郡鏡石町	○		○	○	○
会津若松市北会津町					○
河沼郡会津坂下町					○
相馬市磯部	○		○	○	○
いわき市小川町西小川	○	○	○	○	○
調査ほ場数	(※) 15	4	5	5	8

ウ チチュウカイミバエ発生状況調査

(ア) 目的

イ (ア) に同じ。

(イ) 調査方法

誘引剤 (トリメドルア剤) をスタイナー型トラップ (設置場所は表 1) に入れ、4~10 月まで月 1 回誘殺数を調査した。

(ウ) 調査結果

チチュウカイミバエは、いずれの調査地点においても誘殺されなかった。

エ コドリング発生状況調査

(ア) 目的

イ (ア) に同じ。

(イ) 調査方法

誘引剤 (コドレルア剤) をジャクソン型トラップ (設置場所は表 1) に入れ、4~10 月まで月 1 回誘殺数を調査した。

(ウ) 調査結果

コドリングは、いずれの調査地点においても誘殺されなかった。

オ ミカンコミバエ種群発生状況調査

(ア) 目的

イ (ア) に同じ。

(イ) 調査方法

誘引剤 (メチルオイゲノール及びキュウルア混合剤) をスタイナー型トラップ (設置場所は、表 1) に入れ、4~10 月まで月 1 回誘殺数を調査した。

(ウ) 調査結果

ミカンコミバエ種群は、いずれの調査地点においても誘殺されなかった。

カ クインスランドミバエ発生状況調査

(ア) 目的

イ (ア) に同じ。

(イ) 調査方法

誘引剤 (メチルオイゲノール及びキュウルア混合剤) をスタイナー型トラップ (設置場所は、表 1) に入れ、4~10 月まで月 1 回誘殺数を調査した。

(ウ) 調査結果

クインスランドミバエは、いずれの調査地点においても誘殺されなかった。

キ ウリミバエ発生状況調査

(ア) 目的

イ (ア) に同じ。

(イ) 調査方法

誘引剤 (メチルオイゲノール及びキュウルア混合剤) をスタイナー型トラップ (設置場所は、表 1) に入れ、4~10 月まで月 1 回誘殺数を調査した。

(ウ) 調査結果

ウリミバエは、いずれの調査地点においても誘殺されなかった。

ク ウメ輪紋ウイルス (*Plum pox virus*, PPV) の発生状況調査

(ア) 目的

東京都のウメにおいて国内初確認された PPV による病害(2009 年 4 月 8 日、東京都病害虫防除所発表)について、本県で生産されている核果類での発生の有無を調査することで、早期発見するとともに発生拡大を防止する。

(イ) 調査方法

調査地点は県内 4 か所とし、苗生産園(母樹園)2 か所(福島市、伊達市)と、本病が国内ではほぼウメでのみの発生であることから、ウメ生産地のある県中農林事務所農業振興普及部及び会津農林事務所会津坂下農業普及所管内にそれぞれ 1 か所を設定した。

苗生産園(母樹園)の調査は、ほ場で目視による病徴確認を行った後、病徴の有無によらず 1 か所当たり 5 樹を選定し、1 樹から成葉 5 枚以上を採取し、横浜植物防疫所に検体を送付し、検定を依頼した。

生産園地の調査は、苗生産園(母樹園)と同様に目視調査及び試料採取後、イムノクロマト法によるウイルス検定を行った。

調査は、苗木生産業者、県中農林事務所農業振興普及部及び会津農林事務所会津坂下農業普及所の協力を得て行った。

(ウ) 調査結果

目視調査では、いずれの調査地点でも疑似症状は認められなかった(表 2-2)。ウイルス検定の結果、すべての検体が陰性であり、本県でウメ輪紋ウイルスの発生は確認されなかった。

表 2-2 ウメ輪紋ウイルスの発生状況調査結果

調査地点	調査ほ場 面積 (a)	植栽 樹数	目視調査 樹数	疑似症状 確認樹数	試料採取 樹数	検定結果 (陽性樹数)
苗生産園(福島市)	50	141	141	0	5	0
苗生産園(伊達市)	100	317	317	0	5	0
ウメ生産園(郡山市)	20	50	50	0	5	0
ウメ生産園(会津美里町)	19	40	40	0	5	0
計	189	548	548	0	20	0

ケ *Xylella fastigiosa* 発生状況調査

(ア) 目的

イ(ア)に同じ。

(イ) 調査方法

果樹(ブドウ、ナシ)の定点調査ほ場(調査ほ場は、表 1)において、国内では未発生の *Xylella fastigiosa* による症状の有無を 7 月に調査した。

(ウ) 調査結果

Xylella fastigiosa による症状は、いずれの調査地点においても認められなかった。

コ トマトキバガ発生状況調査

(ア) 目的

主にトマト・ミニトマトを加害する外来害虫のトマトキバガは、2021 年 10 月に国内で初めて発生が確認された。本県は夏秋トマトの産地となっており、誘殺数等を調査し、発生拡大や被害を未然に防ぐ。

(イ) 調査方法

県内トマトおよびミニトマトほ場 4 地点において、2024 年 5 月(1 ほ場は 6 月～)からフェロモントラップを設置し、5 日おきに調査を行った。

(ウ) 調査結果

フェロモントラップによる誘殺数（疑義虫含む）は、表 2-3 のとおり。7 月頃から、県内各所で誘殺が確認され、9 月頃に誘殺数はピークを迎えた。8 月に、これまで被害が確認されていなかった会津地方の複数地点で、被害を確認した。

表 2-3 トマトキバガフェロモントラップ誘殺数

設置地点	誘殺数(頭)												計
	7月			8月			9月			10月			
	10日	20日	30日	10日	20日	30日	10日	20日	30日	10日	20日	30日	
田村市大越町	0	1	3	8	4	2	17	13	10	26	70	50	204
南会津町南郷	0	0	10	5	4	7	27	32	6	1			92
猪苗代町川桁	6	0	0	4	7	2	15	32	81	97	11	0	255
喜多方市加納	9	12	6	4	1	3	7	5	1	1	0	0	49

※ 2024 年 5 月 1 日～6 月 30 日の間は誘殺が確認されなかった。

サ トマト関連センチュウ類発生状況調査

(ア) 目的

トマトにおいて、侵入警戒有害動植物である *Meloidogyne enterolobii*、バナナネモグリセンチュウ、コロンビアネコブセンチュウ、カンキツネモグリセンチュウの 4 種について、発生拡大を未然に防ぐため、発生状況について調査を実施する。

(イ) 調査方法

定点調査 3 地点（田村市、中島村、南会津町）において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、巡回による目視調査および農家病害虫防除員によるほ場調査を実施した。

(ウ) 調査結果

Meloidogyne enterolobii、バナナネモグリセンチュウ、コロンビアネコブセンチュウ、カンキツネモグリセンチュウの 4 種による被害は、確認されなかった。

シ トマト関連ウィロイド類発生状況調査

(ア) 目的

トマトにおいて、ウィロイド類の侵入警戒有害動植物である CLVd、PCFVd、TCDVd、TASVd、PSTVd の 5 種について、発生拡大を未然に防ぐため、発生状況について調査を実施する。

(イ) 調査方法

定点調査 3 地点（田村市、中島村、南会津町）において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、巡回による目視調査および農家病害虫防除員によるほ場調査を実施した。

(ウ) 調査結果

CLVd、PCFVd、TCDVd、TASVd、PSTVd の 5 種による被害は、確認されなかった。

ス トマト関連ウイルス類発生状況調査

(ア) 目的

トマトにおいて、ウイルス類の侵入警戒有害動植物である PepMV、ToBRFV、ToMMV、ToLCNDV の 4 種について、発生拡大を未然に防ぐため、発生状況について調査を実施する。

(イ) 調査方法

定点調査 3 地点（田村市、中島村、南会津町）において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、巡回による目視調査および農家病害虫防除員によるほ場調査を実施した。

(ウ) 調査結果

PepMV、ToBRFV、ToMMV、ToLCNDV の 4 種による被害は、確認されなかった。

セ スイカ果実汚斑細菌病の発生状況調査

(ア) 目的

国は、本病害を国内にまん延すると有用な植物に重大な損害を与えるおそれがある病害虫（以下「重要病害虫」）に指定しており、本県未発生病害虫の侵入を警戒する必要がある。また、当該病害虫が発生した場合、迅速に初動防除等を開始し、早期に根絶することが重要である。そこで県内における本病発生の有無を調査する。

(イ) 調査方法

県内夏秋露地キュウリほ場 5 か所（会津坂下町、伊達市、二本松市、須賀川市）を選定し、2024 年 6～9 月に月 1 回調査した。1 ほ場あたり任意の 100 果について、発病の有無を確認した。

(ウ) 調査結果

スイカ果実汚斑細菌病の発生は、確認されなかった。

ソ ジャガイモがんしゅ病発生状況調査

(ア) 目的

ジャガイモにおいて、侵入警戒有害動植物であるジャガイモがんしゅ病の発生拡大を未然に防ぐため、発生状況について調査を実施する。

(イ) 調査方法

定点調査 2 地点（いずれも二本松市）において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、農家病害虫防除員による貯蔵調査を実施した。

(ウ) 調査結果

ジャガイモがんしゅ病の発生は、確認されなかった。

タ *Thecaphora solani* 発生状況調査

(ア) 目的

ジャガイモにおいて、侵入警戒有害動植物である *Thecaphora solani*（病害）の発生拡大を未然に防ぐため、発生状況について調査を実施する。

(イ) 調査方法

定点調査 2 地点（いずれも二本松市）において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、農家病害虫防除員による貯蔵調査を実施した。

(ウ) 調査結果

Thecaphora solani（病害）の発生は確認されなかった。

チ コロラドハムシ発生状況調査

(ア) 目的

ジャガイモにおいて、侵入警戒有害動植物であるコロラドハムシの発生拡大を未然に防ぐため、発生状況について調査を実施する。

(イ) 調査方法

定点調査 2 地点（いずれも二本松市）において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、農家病害虫防除員によるほ場調査を実施した。

(ウ) 調査結果

コロラドハムシの発生は、確認されなかった。

ツ ジャガイモシストセンチュウ

(ア) 目的

ジャガイモにおいて、侵入警戒有害動植物であるジャガイモシストセンチュウの発生拡大を未然に防ぐため、発生状況について調査を実施する。

(イ) 調査方法

定点調査 2 地点（いずれも二本松市）において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、農家病虫害防除員によるほ場調査を実施した。

(ウ) 調査結果

ジャガイモシストセンチュウの発生は、確認されなかった。

(2) 緊急防除等対象病虫害調査

ア キウイフルーツかいよう病の Psa3 系統の発生状況調査

(ア) 目的

2014 年 5 月に、国内で初めて発生が確認されたキウイフルーツかいよう病の Psa3 系統について、「キウイフルーツかいよう病の Psa3 系統の防除対策マニュアル」（平成 30 年 5 月 22 日付け 30 消安第 892 号消費・安全局植物防疫課長通知）に基づき、発生調査を行う。本県で生産されているキウイフルーツでの発生状況を調査し、早期発見するとともに発生拡大を防止する。

(イ) 調査方法

キウイフルーツ生産園地のある農林事務所農業振興普及部及び農業普及所のうち 2 部所に対し、各 2 園地程度を選定し目視による病徴確認または生産者への聞き取り調査を依頼した。疑似症状が確認された際は、現地調査を行い、発生程度を確認した後、農業総合センター果樹研究所に検体を持ち込み、病原細菌の同定を依頼した。調査は、会津農林事務所喜多方農業普及所、南会津農林事務所農業振興普及部及び農業総合センター果樹研究所の協力を得て行った。

(ウ) 調査結果

北塩原村、及び南会津町の計 3 園地で調査が行われたが、発生は確認されなかった（表 2- 4）。

表 2- 4 キウイフルーツかいよう病の現地調査結果（果実生産園）

園地 種別	品種	調査 園地数	調査園地 面積（a）	疑似症状 樹数	検定 樹数	判定 （Psa3 陽性）	感染 園地数	感染園地 面積（a）
果実 生産園	月山系（さ るなし）他	3	12.0	0	0	—	—	—

イ クビアカツヤカミキリの発生状況調査

(ア) 目的

2012 年にクビアカツヤカミキリが愛知県のサクラで国内初発生したこと（平成 25 年 6 月 18 日、愛知県発表）を皮切りに、現在まで複数の都府県でサクラ及び核果類果樹（モモ、スモモ、ウメ）において発生が確認されている。近隣の県でも発生を確認していることから、本県においても本種の侵入を警戒するため、調査を実施する。

(イ) 調査方法

調査地点は、県境に近い県内 4 地点（三崎公園（いわき市小名浜）、勿来の関公園（いわき市関田）、台上道路（西郷村台上）、南湖公園（白河市））とし、調査時期はフラスの確認しやすい 4 月上旬及び夏季とする。

1 地点当たりサクラ 100 樹程度について、フラス及び寄生（成虫、幼虫）の有無を確認する。幹元から樹高 120cm 程度を目視で 1 樹当たり 20 秒程度確認する。疑わしいフラスを確認した場合は、夏季の調査時に成虫の有無を再確認する。

(ウ) 調査結果

一部の樹体にフラスが確認されたが、カミキリムシ類によるものではなかった。また、本種をはじめカミキリムシ類の寄生は、確認されなかった。

4 月調査時に疑わしいフラスがみられなかったことから、夏季の調査は実施しなかった。

ウ ジャガイモシロシストセンチュウ発生状況調査

(ア) 目的

ジャガイモにおいて、侵入警戒有害動植物であるジャガイモシロシストセンチュウの発生拡大を未然に防ぐため、発生状況について調査を実施する。

(イ) 調査方法

定点調査 2 地点（いずれも二本松市）において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、農家病害虫防除員によるほ場調査を実施した。

(ウ) 調査結果

ジャガイモシロシストセンチュウの発生は、確認されなかった。

エ テンサイシストセンチュウ発生状況調査

(ア) 目的

ホウレンソウにおいて、侵入警戒有害動植物であるテンサイシストセンチュウの発生拡大を未然に防ぐため、発生状況について調査を実施する。

(イ) 調査方法

定点調査 2 地点（下郷町、相馬市）において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、巡回調査および農家病害虫防除員によるほ場調査を実施した。

(ウ) 調査結果

テンサイシストセンチュウの発生は、確認されなかった。

(3) 種苗検疫

ア キウイフルーツかいよう病の Psa3 系統の苗木等検査

(ア) 目的

キウイフルーツかいよう病の Psa3 系統のまん延防止のため、「キウイフルーツ苗木等検査実施要領（以下、「要領」という。）」（平成 30 年 4 月 25 日付け 30 消安第 228 号消費・安全局長通知）に基づき、清浄なキウイフルーツ苗木等（キウイフルーツ、さるなし、しまさるなし及びみやまたたびの苗木、母樹及び花粉）のみが流通するよう、検査を推進する。

(イ) 調査方法

要領により、国内での販売を目的として栽培されているキウイフルーツ苗木等（以下、「検査対象苗木等」という。）の生産園地は、農林水産省植物防疫所による全園地検査が必須となっている。検査対象苗木等の生産園地の把握や、農林水産省横浜植物防疫所による現地での目視検査の補助を行った。

(ウ) 調査結果

検査対象苗木等の生産者は 2 名、生産園地等は 8 か所（さるなし）で、疑似症状は確認されなかった（表 2- 5）。

表 2- 5 キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統の発生状況調査結果（苗木生産園等）

園地種別	樹種	調査園地数	栽培本数	出荷予定 数量	疑似症状 樹数
苗木生産園	さるなし	3	355	355	0
母樹園	さるなし	5	214	0	0
合計		8	569	355	0

イ 種馬鈴しょ検査

(ア) 目的

種馬鈴しょによる有害動植物のまん延を防止するため、種馬鈴しょの生産ほ場検査及び生産物検査を実施する。

(イ) 検査方法

県内の生産ほ場において、横浜植物防疫所の植物防疫官が検査を実施した。病虫害防除所は、植物防疫官の事務を補助する植物防疫員に任じられており、検査の際に立ち会いと検査の補助を行った。

(ウ) 対応結果

2024年度は、計5回の検査補助を行った(表2-6)。

表2-6 検査に立ち会ったほ場と検査月日

月 日	市町村	検査区分 等
5月30日	南相馬市北長野	春作第2期ほ場検査
6月5日	飯舘村	春作第1期ほ場検査
6月20日	福島市松川、飯舘村	春作第2期ほ場検査
8月22日	飯舘村	春作生産物検査
10月18日	南相馬市北長野	秋作第2期ほ場検査

2 輸出検査

(1) ベトナム向け輸出なし検査

ア 目的

植物防疫法に基づき、本県より輸出されるベトナム向けなしについて、「ベトナム向け輸出なし検査実施要領」に基づき輸出検査を行い、海外への病虫害の侵出を防止する。

イ 業務実績

病虫害防除所職員(4名)は、横浜植物防疫所長より栽培地検査補助員を委嘱され、栽培地検査補助員として、輸出対象のナシ生産園地(いわき市)について補助員検査をいわき農林事務所の栽培地検査補助員と実施した。業務従事日数は、病虫害防除所職員(4名)で累計8日であった。

なお、郡山市については、県中農林事務所の栽培地検査補助員が対応した。

表2-7 検査対象なし園

地域	品種	園地数	栽植本数
郡山	二十世紀	33	209
いわき	豊水	8	60
	新高	6	69

第3 農作物有害動植物発生予察事業

1 事業実施状況

(1) 対象病害虫

作物名	有 害 動 植 物		侵 入 調 査 事 業
	指 定 病 害 虫	県 単 病 害 虫	侵 入 警 戒 病 害 虫
水 稻	いもち病、稲こうじ病、ごま 葉枯病、縞葉枯病、白葉枯 病、苗立枯病、ばか苗病、も み枯細菌病、紋枯病、 イネドロオイムシ、イネミ ズゾウムシ、コブノメイガ、 セジロウンカ、ツマグロヨ コバイ、トビイロウンカ、ニ カメイガ、斑点米カメムシ 類、ヒメトビウンカ、フタオ ビコヤガ、【スクミリンゴガ イ】	苗立枯細菌病、黄化萎縮病、 コバネイナゴ、イチモンジセセ リ(イネツトムシ)	イネミイラ穂病菌等その他国内未 発生のイネの病害虫
ム ギ	赤かび病、うどんこ病、さび 病類	雪腐病類、黒穂病類	
ダイズ	紫斑病、アブラムシ類、吸実 性カメムシ類、フタスジヒ メハムシ、マメシンクイガ	立枯性病害、べと病、 ウコンノメイガ、ツメクサガ、 サヤムシガ類、シロイチモジマ ダラメイガ、ダイズサヤタマバ エ	
3 作物	28 種・類	13 種・類	1 種・類
リンゴ	斑点落葉病、黒星病、 ハダニ類、シンクイムシ類、 ハマキムシ類	うどんこ病、腐らん病、輪紋病、 褐斑病、炭疽病、すす点病、す す斑病、 キンモンホソガ、アブラムシ類、 ギンモンハモグリガ、ヒメボク トウ	火傷病（リンゴ属、ナシ属） <u>チチュウカイミバエ、コドリシガ</u> <u>（リンゴ属、ナシ属）</u> <u>ミカンコミバエ種群、</u> <u>クインスランドミバエ、</u> <u>ウリミバエ</u>
ナ シ	黒星病、赤星病、 ハダニ類、シンクイムシ類、 ハマキムシ類、アブラムシ 類、カイガラムシ類、	輪紋病、 ヒメボクトウ、ニセナシサビダ ニ	
モ モ	せん孔細菌病、 ハダニ類、シンクイムシ類	灰星病、ホモプシス腐敗病、 ハマキムシ類、コスカシバ、モ モハモグリガ、カイガラムシ類、 アブラムシ類	ウメ輪紋ウイルス（PPV）（ウメ、 モモ）
カ キ	炭疽病、アザミウマ類、カイ ガラムシ類、ハマキムシ類、 カキノヘタムシガ	円星落葉病	
ブドウ	晩腐病、灰色かび病、べと 病、アザミウマ類	黒とう病	<i>Xylella fastidiosa</i> （ブドウ、ナ シ、モモ、ウメ）
バラ科植物	【クビアカツヤカミキリ】		
6 作物	25 種・類	23 種・類	8 種・類

作物名	有 害 動 植 物		侵 入 調 査 事 業
	指 定 病 害 虫	県 単 病 害 虫	侵 入 警 戒 病 害 虫
トマト	疫病、うどんこ病、すすかび病、灰色かび病、葉かび病、黄化葉巻病、アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類	青枯病、かいよう病、萎凋病、半身萎凋病、ウイルス病、ハモグリバエ類	トマトキバガ、 <i>Meloidogyne enterolobii</i> 、CLVd、PCFVd、TCDVd、TASVd、PepMV、ToBRFV、ToMMV、ToLCNDV、バナナネモグリセンチュウ、コロンビアネコブセンチュウ、PSTVd、カンキツネモグリセンチュウ
キュウリ	べと病、うどんこ病、褐斑病、炭疽病、灰色かび病、斑点細菌病 アブラムシ類、アザミウマ類(ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)、コナジラミ類、ハダニ類	モザイク病、黒星病、つる枯病、ワタヘリクロノメイガ(ウリノメイガ)	スイカ果実汚斑細菌病
イチゴ	灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、アザミウマ類、アブラムシ類、コナジラミ類、ハダニ類	萎黄病、萎凋病	
アスパラガス	アザミウマ類	茎枯病、斑点病、褐斑病、ハダニ類	
ダイコン	アブラムシ類	モザイク病、菌核病	
ナス	うどんこ病、すすかび病、灰色かび病、アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類	半身萎凋病、ホコリダニ類	
ナス科植物	【ナスミバエ】		
ネギ	黒斑病、さび病、べと病、アザミウマ類、アブラムシ類、ネギコガ、ネギハモグリバエ	葉枯病、黒腐菌核病	
ピーマン	うどんこ病、アブラムシ類	モザイク病、炭疽病、疫病、斑点病	
カンショ	基腐病、ナカジロシタバ	つる割病、紫紋羽病	
バレイショ	疫病、アブラムシ類 【ジャガイモシストセンチュウ】	テントウムシダマシ	ジャガイモがんしゅ病菌、 <i>Thecaphora solani</i> 、コロラドハムシ、ジャガイモシストセンチュウ、ジャガイモシロシストセンチュウ
ハウレンソウ	アブラムシ類	べと病、株腐病、萎凋病、ハウレンソウケナガコナダニ、ハクサイダニ	テンサイシストセンチュウ

作物名	有 害 動 植 物		侵 入 調 査 事 業
	指 定 病 害 虫	県 単 病 害 虫	侵 入 警 戒 病 害 虫
キ ク	白さび病、 アザミウマ類、アブラムシ 類、ハダニ類	べと病、ナモグリバエ	
リンドウ (県単)		葉枯病、褐斑病、花腐菌核病、 黒斑病、 アザミウマ類、ハダニ類、リン ドウホソハマキ	
14 作物	54 種・類	43 種・類	21 種・類
作物共通	ハスモンヨトウ、オオタバ コガ、ヨトウガ、果樹カメム シ類、コナガ、シロイチモジ ヨトウ		
23 作物	113 種・類	79 種・類	30 種・類

※指定病害虫：植物防疫法第 22 条に基づき、農林水産大臣が指定する病害虫

※県単病害虫：指定病害虫以外で、県が独自に選定した病害虫

※侵入警戒病害虫：植物防疫法侵入調査事業で指定された病害虫

※下線の病害虫は、フェロモントラップ調査のみ実施する。

※【 】は、発生予察調査の対象外であるが、本県における侵入及びまん延を警戒する病害虫

(2) 病害虫発生予察調査ほ場等の設置

ア 普通作物

(ア) 予察ほ場

表 3- 1 予察ほ場数（普通作物）

地 方	水 稻	予察灯※	備 考
会 津	1	1	会津地域研究所
浜通り	1	－	浜地域研究所
計	2	1	

※予察灯の光源は 60W 白熱灯

(イ) 定点調査地点

表 3- 2 発生状況調査地点（普通作物）

作物名	地 方	調査地点
水 稻	中通り	福島市大波、二本松市東新殿、田村市都路町、矢祭町中石井 国見町新泉田、大玉村大山、棚倉町玉野、石川町塩沢
	会 津	喜多方市塩川町、会津坂下町八日沢、南会津町関本、 猪苗代町壺楊、会津美里町勝原
	浜通り	相馬市今田、いわき市瀬戸町、檜葉町上繁岡 南相馬市浮田、いわき市平下片寄、いわき市平下大越
ダイズ	中通り	白河市表郷
	会 津	喜多方市慶徳町上科
	浜通り	いわき市三和町上永井

表 3- 3 フェロモントラップ等調査地点数（普通作物）

地 方	アスジ カスミカメ	アカヒゲホソ ミドリカスミカメ	クモヘリカメムシ	ホソヘリカメムシ	マメシクイガ	計
中通り	1	1	8	1	1	12
会 津	5	—	—	1	—	6
浜通り	—	—	6	2	—	8
計	6	1	14	4	1	26

※イネツトムシは青色粘着トラップによる調査

（ウ）巡回調査地点

表 3- 4 巡回調査地点数（普通作物）

地 方	水稻	ム ギ	ダイズ	計
中通り	16(121)	3(12)	3(12)	22(145)
会 津	10 (73)	3(12)	3(12)	16 (97)
浜通り	9 (66)	3(12)	3(12)	15 (90)
計	35(260)	9(36)	9(36)	53(332)

※（）内は調査ほ場数

イ 果樹

（ア）予察ほ場

表 3- 5 予察ほ場数（果樹）

地 方	リンゴ	モ モ	ナ シ	
中通り	1	1	1	果樹研究所

（イ）定点調査地点数

表 3- 6 発生状況調査地点（果樹）

作物名	地 方	調査地点
リンゴ	中通り	福島市飯坂町平野、福島市飯坂町湯野、伊達市箱崎、須賀川市浜尾、鏡石町蒲之沢町
	会 津	会津若松市北会津町、会津美里町勝原、会津坂下町東松
モ モ	中通り	福島市上鳥渡、国見町高城、伊達市箱崎、福島市飯坂町湯野
ナ シ	中通り	福島市大笹生、郡山市熱海町安子島、須賀川市越久
	浜通り	いわき市小川町西小川、相馬市磯部
ブドウ	中通り	福島市飯坂町平野、福島市飯坂町東湯野、伊達市梁川町大関

表 3- 7 フェロモントラップ等調査地点数（果樹）

地 方	キンモンホリガ	スモヒメシクイ	モノゴマダラノ メイガ	モモハモクリガ	コスカシバ	ナシヒメシクイ	モモンクイガ
中通り	2	1	1	1	1	2	—
会 津	—	1	—	—	—	—	1
浜通り	—	—	—	—	—	—	—
計	2	2	1	1	1	2	1

地 方	リンゴコカモンハマキ	チャバネアカカメシ	クサギカメシ※	ヒメボクトウ	計
中通り	1	5	1	1	16
会 津	—	1	1	—	4
浜通り	—	2	—	—	2
計	1	8	2	1	22

※クサギカメムシはムシロによる調査

(ウ) 巡回調査地点

表 3- 8 巡回調査地点数 (果樹)

地 方	リンゴ	ナ シ	モ モ	ブドウ	カ キ	計
中通り	14(22)	10(20)	13(23)	3(3)	—	40 (68)
会 津	11(17)	—	—		4(7)	15 (24)
浜通り	—	5(10)	—		—	5 (10)
計	25(39)	15(30)	13(23)	3(3)	4(7)	60(102)

※ () 内は調査ほ場数

ウ 野菜・花き

(ア) 定点調査地点

表 3- 9 発生状況調査地点 (野菜・花き)

作物名	地 方	調査地点
イチゴ	中通り	伊達市保原町京門、棚倉町堤
	会 津	会津若松市北会津町十二所
	浜通り	相馬市南飯渕、いわき市平菅波
夏秋キュウリ	中通り	二本松市新田、須賀川市大栗、中島村松崎、郡山市田村町守山
	会 津	会津若松市神指
トマト	中通り	中島村二子塚、田村市大越町栗出
	会 津	喜多方市熱塩加納町加納、猪苗代町川桁、南会津町界
ネ ギ	中通り	矢吹町三城目
	浜通り	いわき市平下神谷
ナ ス	中通り	二本松市西勝田、二本松市木幡
ダイコン	中通り	郡山市湖南町赤津
	会 津	会津若松市北会津町蟹川
ピーマン	中通り	三春町富沢、二本松市吉倉
バレイショ	中通り	二本松市板目沢、二本松市伊佐沼町
ハウレンソウ	会 津	磐梯町更科法正尻、下郷町音金沖ノ原
	浜通り	相馬市南飯渕
カンショ	中通り	田村市船引町堀越
	浜通り	檜葉町大谷
アスパラガス	中通り	福島市飯坂町十網下、伊達市保原町西ノ内
	会 津	南会津町長野
キ ク	中通り	伊達市保原町富沢、福島市小田
	会 津	会津美里町穂馬
	浜通り	新地町杉目

表 3- 10 フェロモントラップ調査地点数 (野菜・花き)

地 方	ハスモンヨトウ	オオタバコガ*	アメリカシロヒトリ	コナガ*	シロモンジヨトウ	ヨトウガ*	計
中通り	4	2	1	1	1	1	10
会 津	1	3	—	—	—	1	5
浜通り	2	1	—	—	1	1	5
計	7	6	1	1	2	3	20

(イ) 巡回調査地点

表 3- 11 巡回調査地点数（野菜・花き）

地 方	夏秋キュウリ	トマト	イチゴ	アスパラガス	ナス	ネギ
中通り	9 (9)	6 (6)	15(15)	—	4 (4)	—
会 津	2 (2)	5 (5)	—	5 (5)	—	—
浜通り	—	—	5 (5)	—	—	4 (4)
計	11(11)	11(11)	20(20)	5 (5)	4 (4)	4 (4)

地 方	ピーマン	ハウレンソウ	キク	リンドウ	計
中通り	4 (4)	—	6 (6)	3 (3)	47(47)
会 津	—	2 (2)	3 (3)	3 (3)	18(18)
浜通り	—	—	2 (2)	—	11(11)
計	4 (4)	2 (2)	11(11)	6 (6)	76(76)

※ () 内は調査ほ場数

2 病虫害発生予察情報等の提供

(1) 発生予報の発表状況

発表月日	対象作物
4月24日	水稻、麦類、リンゴ、モモ、ナシ、イチゴ
5月29日	水稻、麦類、リンゴ、モモ、ナシ、果樹共通、トマト、キク、リンドウ
6月26日	水稻、リンゴ、モモ、ナシ、果樹共通、トマト、キュウリ、キク、リンドウ、野菜・花き共通
7月17日	水稻（いもち病等）
7月30日	リンゴ、モモ、ナシ、果樹共通、トマト、キュウリ、キク、リンドウ、野菜・花き共通
8月7日	水稻（斑点米カメムシ類等）
8月28日	大豆、リンゴ、モモ、ナシ、果樹共通、トマト、キュウリ、キク、リンドウ、野菜・花き共通
9月13日	リンゴ、モモ、ナシ
9月27日	トマト、野菜・花き共通
10月11日	イチゴ、野菜・花き共通
11月13日	イチゴ、野菜・花き共通
12月11日	イチゴ、野菜・花き共通
1月15日	イチゴ
2月12日	イチゴ
3月11日	リンゴ、モモ、ナシ
3月13日	水稻、麦類、イチゴ

※発生予報：調査結果等に基づき病虫害の発生予報を定期的に発表する。

(2) 防除情報の発表状況

発表月日	対象作物及び内容
4月15日	麦類：赤かび病
4月24日	モモ：せん孔細菌病
5月9日	モモ：灰星病（花腐れ）、果樹共通：カメムシ類
6月6日	果樹共通：カメムシ類
6月20日	ナシ：黒星病
6月26日	リンゴ：褐斑病、果樹共通：カメムシ類
7月30日	モモ、ナシ：ナシヒメシンクイ
8月28日	トマト：黄化葉巻病(TYLCV) トマトキバガ
8月28日	野菜：花き共通：オオタバコガ

発表月日	対象作物及び内容
8月29日	モモ、ナシ：ナシヒメシンクイ
10月11日	野菜類：シロイチモジヨトウ
3月31日	モモ：モモハモグリガ

※防除情報：注意報を発表するほどではないが、調査対象病害虫の発生が多い場合、防除措置等の対応が必要な場合に発表する。

(3) 注意報・警報・特殊報の発表状況

種 類	発表月日	対象作物及び内容
注意報	6月26日	野菜・花き類：オオタバコガ
	7月10日	水稻：斑点米カメムシ類
	7月30日	果樹類：果樹カメムシ類
	9月19日	野菜類・花き類：ハスモンヨトウ
警 報	-	-
特殊報	8月8日	ナガエツルノゲイトウ（雑草）
	10月24日	宿根カスミソウ：トマトハモグリバエ
	11月13日	キュウリ：CABYV
	12月4日	サツマイモ：基腐病
	12月24日	ナシ：サクセスキクイムシ
	12月24日	キュウリ：退緑黄化病

※注 意 報：警報を発表するほどではないが、重要な病害虫の多発生が予測され、かつ早急に防除措置を講じる必要が認められる場合に発表する。

※警 報：重要な病害虫の大発生が予測され、かつ早急に防除措置を講ずる必要が認められる場合に発表する。

※特 殊 報：新奇な病害虫を発見した場合、又は、重要な病害虫の生態及び発生活長に特異な現象が認められた場合に発表する。

(4) 病虫害防除所ホームページによる病虫害情報、農薬情報等の発表状況

(期間：2024年4月1日～2025年3月31日)

ア 病虫害発生状況

作物名	品目名	内 容
普通作物	水 稲	育苗期～5月、6月、7月、8月、9月、玄米被害調査結果、通年
	麦 類	6月
	ダイズ	8月、9月、莢及び子実被害調査結果、通年
果 樹	果樹共通	4月中旬、9月、10月、10月下旬、令和7年3月
	リンゴ	5月下旬、6月中旬、7月4～5半旬、8月
	モモ	5月下旬、6月、7月、8月
	ナシ	5月、6月中旬、7月4～5半旬、8月
野菜・花き	キュウリ	6月中下旬、7月中下旬、8月中下旬
	トマト	5月中下旬、6月中下旬、7月中下旬、8月中下旬、9月中下旬
	イチゴ	4月上旬、5月上旬、10月上旬、11月上旬、12月上旬、1月上旬、2月上旬、3月上旬
	キク	5月中下旬、6月中下旬、7月中下旬、8月中下旬
	リンドウ	5月中下旬、6月中下旬、7月中下旬、8月中下旬

イ 病虫害防除対策、病虫害防除情報等

作物名	発 表 日	内 容
普通作物	4月15日	病虫害防除対策（水稻、4月）
	4月15日	病虫害防除情報（麦類、赤かび病）
	5月31日	病虫害防除対策（水稻、5・6月）
	6月25日	病虫害防除対策（水稻、7月）
	6月26日	病虫害防除対策（ダイズ、7月）
	7月10日	病虫害防除対策（水稻、斑点米カメムシ類）
	8月7日	病虫害防除対策（水稻、8月）
	8月7日	病虫害防除情報（ダイズ、8・9月）
	6月～8月	BLASTAM（イネいもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況） （随時更新）
果 樹	4月24日	病虫害防除情報（モモ、せん孔細菌病）
	5月9日	病虫害防除情報（モモ、灰星病（花腐れ））
	5月9日	病虫害防除情報（果樹共通、果樹カメムシ類）
	6月6日	病虫害防除情報（果樹共通、果樹カメムシ類）
	6月13日	病虫害防除対策（果樹カメムシ、今年なぜ問題？発生生態と発生状況を正しく知ろう！！）
	6月20日	病虫害防除情報（ナシ、黒星病）
	6月26日	病虫害防除情報（リンゴ、褐斑病）
	7月30日	病虫害防除情報（モモ、ナシヒメシンクイ）
	7月30日	病虫害防除情報（ナシ、ナシヒメシンクイ）
	8月29日	病虫害防除情報（モモ、ナシヒメシンクイ）
	12月13日	病虫害防除対策（モモ、カイガラムシ類）
	3月31日	病虫害防除情報（モモ、モモハモグリガ）

作物名	発表日	内 容
野菜・花き	8月28日	病害虫防除情報（野菜・花き共通、オオタバコガ）
	8月28日	対策情報（トマト、黄化葉巻病（TYLCV））
	8月28日	病害虫防除情報（トマト、トマトキバガ）
	8月28日	病害虫防除情報（野菜類、黄化葉巻病）
	10月11日	病害虫防除情報（野菜類、シロイチモジヨトウ）

ウ フェロモントラップ等データ、予察灯データ

(ア) フェロモントラップ等データ

- a 普通作物
アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソヘリカメムシ、マメシンクイガ
- b 果樹
モモハモグリガ、シンクイムシ類、リンゴコカクモンハマキ、キンモンホソガ、コスカシバ、ヒメボクトウ、果樹カメムシ類
- c 野菜・花き類
ヨトウガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、アメリカシロヒトリ、トマトキバガ

(イ) 予察灯データ

アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、ツマグロヨコバイ、セジロウンカ、ヒメトビウンカ、フタオビコヤガ、イネミズゾウムシ、クサギカメムシ、チャバネアオカメムシ

エ 病害虫ライブラリ

(ア) 普通作物の病害虫

- a 水稻の病害虫
いもち病、紋枯病、稲こうじ病、ごま葉枯病、ばか苗病、イネミズゾウムシ、イネヒメハモグリバエ（イネミギワバエ）、イネドロオイムシ（イネクビホソハムシ）、ニカメイチュウ（ニカメイガ）、イチモンジセセリ（イネツトムシ）、フタオビコヤガ（イネアオムシ）、イナゴ類、イネヨトウ（ダイメイチュウ）、斑点米カメムシ類
- b 麦の病害
赤かび病、さび病類、雪腐病
- c ダイズの病害虫
紫斑病、べと病、ウコンノメイガ、フタスジヒメハムシ、マメハンミョウ、マメシンクイガ、吸実性カメムシ類

(イ) 果樹の病害虫

- a モモの病害
せん孔細菌病、灰星病
- b ナシの病害
黒星病
- c リンゴの病害
輪紋病、炭疽病、褐斑病
- d 果樹共通の害虫
カメムシ類、シンクイムシ類、ハダニ類、ヒメボクトウ、アブラムシ類、ニセナシサビダニ

(ウ) 野菜・花き類の病害虫

- a イチゴの病害虫
萎黄病、炭疽病、疫病、うどんこ病、灰色かび病、アブラムシ類、コナジラミ類、ハダニ類、ホコリダニ類、アザミウマ類、チョウ目害虫
- b トルコギキョウの病害虫
ウイルス病、青枯病、立枯病、茎腐病、青かび根腐病、灰色かび病、炭疽病、斑点病、チョウ目害虫、アブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類
- c 野菜・花き類共通の害虫
アザミウマ類、ハダニ類、ダニ類（ハダニ類を除く）、チョウ目害虫、ハモグリバエ類、アブラムシ類、コナジラミ類

(5) 農薬登録変更情報

令和6年版(2024年版)農作物病虫害防除指針に関する部分の変更について、変更及び失効内容を掲載した。

(6) ホームページの利用状況(アクセス件数:2024年1月1日~2024年12月31日)

発 表 内 容	計
トップページ	7,490
発生予察・病虫害防除に関すること	12,845
定期予報	1,113
注意報・警報	1,461
特殊報	1,350
BLASTAM	786
発生状況	1,994
防除対策	3,109
各種病虫害に対する注意喚起(※)	1,278
侵入調査事業	116
侵入警戒病虫害に関する通報義務について	13
総合的病虫害・雑草管理(I P M)実践指標について	65
病虫害防除員研修会公開セミナー	153
各種トラップ等調査結果(※)	930
病虫害ライブラリ(※)	477
農薬適正使用・鳥獣害に関すること	3,987
農薬の安全・適正使用について	345
農薬登録変更情報	370
農薬販売届について	993
農薬販売店への立入検査について	83
農薬販売数量の調査について	25
無人航空機による防除について	1,327
ゴルフ場での農薬使用実績報告等について	131
野生鳥獣による農作物の被害について	713

注1) 網掛け部は各項目ごとのアクセス件数の合計を示す

注2) ※は該当するページのアクセス件数の合計を示す

3 気象経過及び生育経過の概要

(1) 気象経過の概要（福島地方気象台資料に基づき作成）

1月

平均気温は、概ねかなり高かった。降水量は、中通りと浜通りでは多いからかなり多く、会津では平年並から少なかった。日照時間は、中通りと会津はかなり多いから多く、浜通りは平年並から多かった。降雪量は、かなり少ないから少なかった。

2月

平均気温は、かなり高かった。降水量は、中通りは多いから平年並、浜通りは平年並から多く、会津は少ないからかなり少なかった。日照時間は、平年並から多かった。降雪量は、かなり少なかった。

3月

平均気温は、平年並から高かった。降水量は、かなり多いから多かった。日照時間は、中通りと会津は少ないから平年並、浜通りは多いから平年並であった。降雪量は、平年並から多かった。

4月

平均気温は、かなり高かった。降水量は、少ないから平年並であった。日照時間は、中通りと浜通りでは平年並から少なく、会津では多いから平年並であった。

5月

平均気温は、中通りではおおむね高く、浜通りではかなり高く、会津は高いから平年並であった。降水量は、中通りは多いから平年並で、浜通りと会津は平年並から多かった。日照時間は、多いから平年並であった。

6月

平均気温は、かなり高いから高かった。降水量は、かなり少ないから少なかった。日照時間は、かなり多いから多かった。なお、東北南部の梅雨入りは、6月23日ごろ（平年より11日遅い、昨年より14日遅い）であった。

7月

平均気温は、中通りと会津ではかなり高いから高く、浜通りではかなり高かった。降水量は、中通りと浜通りでは少ないから平年並、会津では平年並から多かった。日照時間は、中通りと浜通りでは少ないから平年並、会津では少なかった。

8月

平均気温は、かなり高かった。降水量は、中通りでは多いから平年並、浜通りでは平年並から多く、会津は少ないから平年並であった。日照時間は、中通りと浜通りでは平年並から少なく、会津では少ないから平年並であった。東北南部の梅雨明けは、8月1日ごろ（平年より8日遅い、昨年より10日遅い）であった。

9月

平均気温は、かなり高かった。降水量は、中通りは平年並から少なく、浜通りは少ないから平年並み、会津では多いから平年並であった。日照時間は、中通りと浜通りでは少ないから平年並、会津ではおおむね平年並であった。

10月

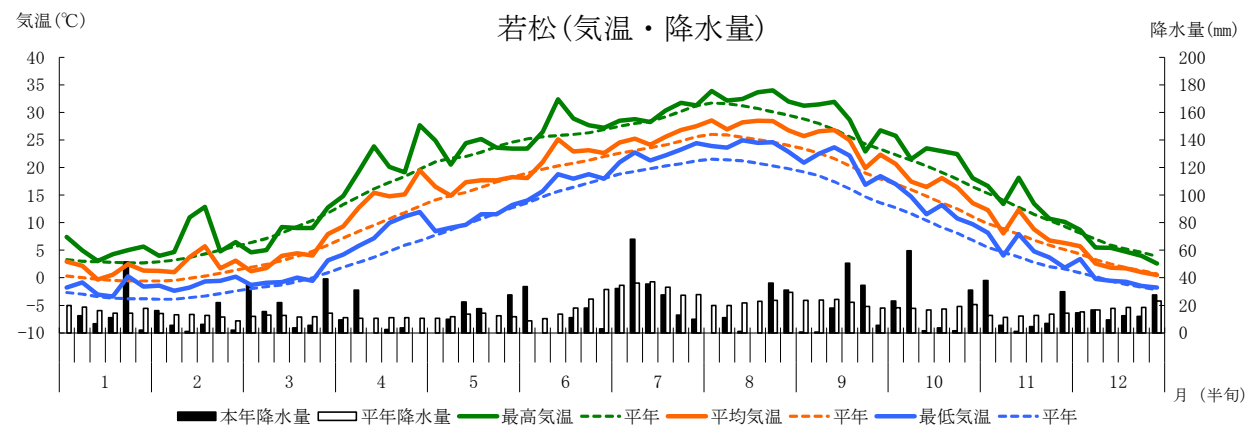
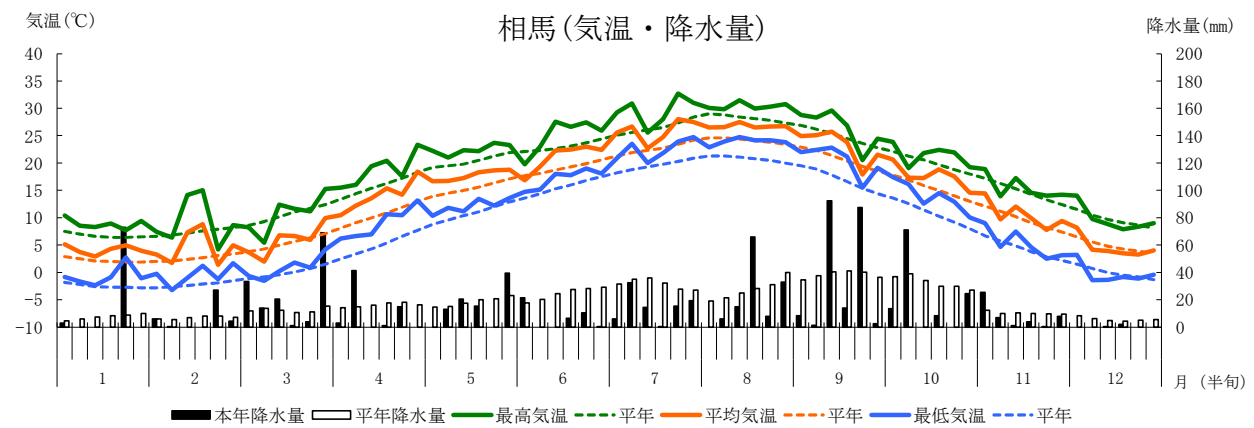
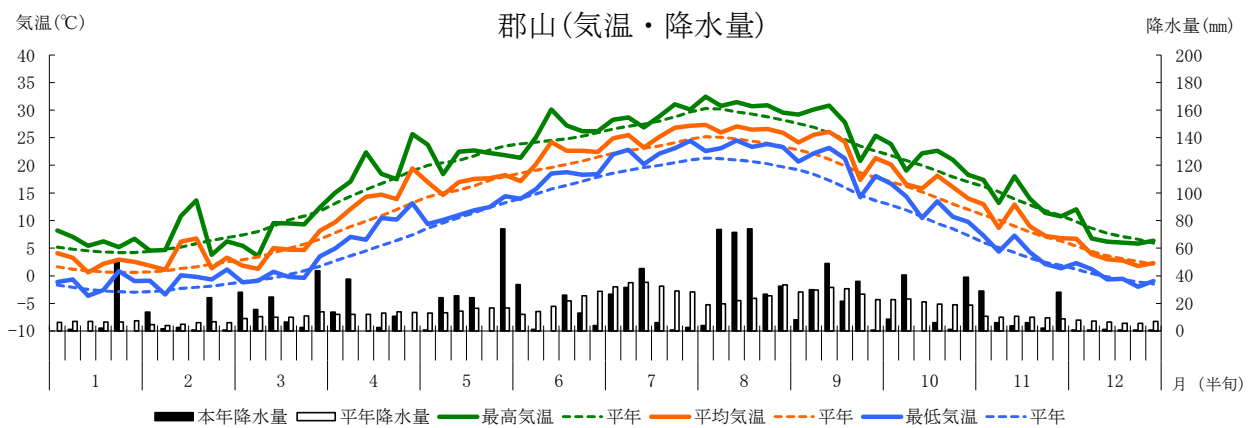
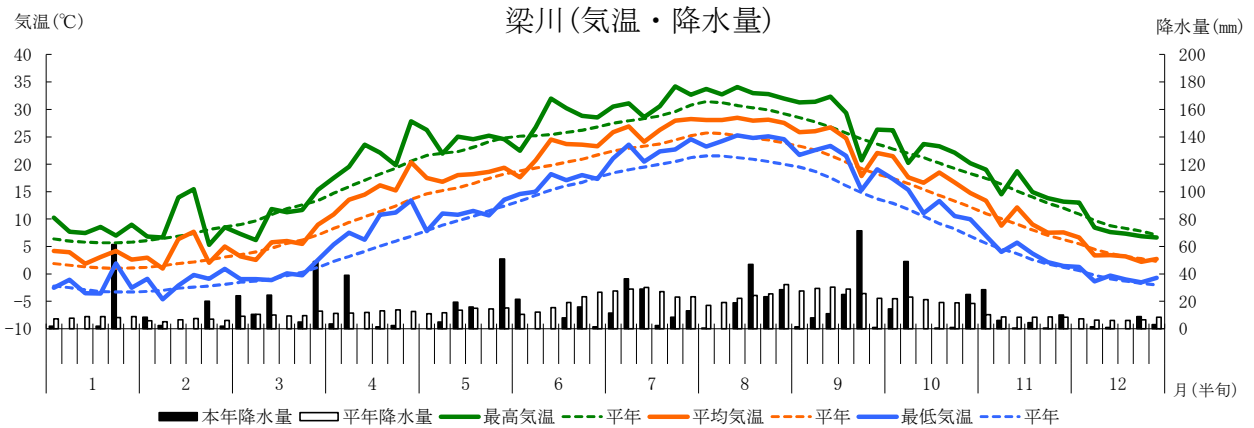
平均気温は、かなり高かった。降水量は、平年並であった。日照時間は、中通りと浜通りでは少なく、会津はおおむね少なかった。

11月

平均気温は、高いからかなり高かった。降水量は、中通りと浜通りでは多いから平年並、会津では平年並から多かった。日照時間は、かなり多いから多かった。降雪量は、平年並から少なかった。

12月

平均気温は、中通りと会津では平年並から低く、浜通りでは平年並であった。降水量は、中通りと浜通りではかなり少なく、会津では多いから平年並であった。日照時間は、中通りではかなり多いから多く、浜通りではおおむね多く、会津ではかなり少ないから少なかった。降雪量は、平年並から多かった。



(2) 農作物の生育経過

※以下に記述するア～ウの生育経過は、農業総合センターの作柄解析試験の結果であり、「郡山」は農業総合センター本部、「会津坂下」は会津地域研究所、「相馬」は浜地域研究所のことを示している。なお、記述している作物の品種は、水稻がすべて「コシヒカリ」、麦類が郡山と相馬は「きぬあずま」、会津坂下は「ゆきちから」、ダイズが郡山と相馬は「タチナガハ」、会津坂下は「あやこがね」であり、ダイズは標播での生育を記している。

ア 水稻

6月11日の生育調査では、草丈は、郡山が平年並、会津坂下と相馬が平年よりやや短かった。茎数は、郡山が平年よりやや少なく、会津坂下が少なく、相馬が多かった。葉色は、郡山と会津坂下が平年より淡く、相馬がやや濃かった。

出穂期は、郡山が平年より6日早い8月5日、会津坂下が2日早い8月3日、相馬が6日早い8月3日だった。成熟期は、郡山が平年より11日早い9月12日、会津坂下が7日早い9月10日、相馬が10日早い9月14日だった。

12月10日東北農政局発表の令和7年の水稻の作況指数は、県全体で102（中通り103、会津102、浜通り104）となった。農林水産省が公表した12月31日時点での本県産うるち玄米の農産物検査結果（速報値）は、1等が88.1%、2等が10.8%、3等が0.7%、規格外が0.3%だった。

イ ムギ類（2023年産）

越冬前調査では、草丈は、全域で平年より長かった。茎数は、郡山と相馬が平年より多く、会津坂下が平年並だった。幼穂形成始期は、郡山が平年より12日遅い1月31日、会津坂下が30日早い2月13日、相馬が30日早い2月22日だった。節間伸長開始期は、郡山が平年より7日遅い3月12日、会津坂下が10日早い3月22日、相馬が22日早い2月13日だった。

出穂期は、郡山が平年より1日早い4月22日、会津坂下が9日早い4月28日、相馬が7日早い4月15日だった。5月1日の生育調査では、草丈は、全域で平年より長かった。茎数は、郡山が平年よりやや少なく、会津坂下が少なく、相馬が多かった。成熟期は、郡山が2日早い6月11日、会津坂下が9日早い6月8日、相馬が3日早い6月6日だった。精子実重は、郡山で平年並、相馬でやや高く、会津坂下で低かった。郡山、相馬は穂数が多かったが千粒重が軽く、会津坂下は穂数が少なかった。

農林水産省が公表した10月31日時点での本県産普通小麦の農産物検査結果（速報値）は、1等が29.0%、2等が65.7%、規格外が5.3%だった。

ウ ダイズ

開花期は、郡山が平年より3日遅い7月30日、会津坂下が1日早い7月23日、相馬が6日早い7月27日だった。成熟期は、郡山が10月25日で平年並、相馬が10月30日で平年より7日早かった。会津坂下が開花以降の干ばつのため登熟が進まず11月8日と平年より23日遅かった。8月5日の生育調査では、主茎長は、郡山が平年より短く、会津坂下と相馬が長かった。主茎節数は、郡山が平年並、会津坂下がやや多く、相馬が多かった。粗子実重は、郡山が平年並、相馬が平年比143%と増収した。会津坂下は、一莢内粒数が平年比52%と少なく粗子実重は平年比61%だった。

※以下に記述するエ～キの生育経過及び果実品質は、農業総合センター果樹研究所（福島市飯坂町平野）のデータ。

エ リンゴ

「ふじ」の発芽は3月28日で平年より1日遅く、満開は4月22日で平年より8日早かった。収穫開始は11月14日で平年並、収穫盛期は11月17日で平年並であった。平均果実重は357gで平年

(358g) 並、糖度は 15.2 度で平年 (15.5 度) 並であった。「つがる」の収穫開始は 8 月 23 日で平年より 4 日早く、収穫盛期は 8 月 28 日で平年より 3 日早かった。平均果実重は 297g で平年 (285g) よりやや大きく、糖度は 13.8 度で平年 (12.4 度) より高かった。

オ モモ

「あかつき」の発芽は 3 月 25 日で平年より 1 日遅く、満開は 4 月 11 日で平年より 8 日早かった。収穫開始は 7 月 19 日で平年より 12 日早く、収穫盛期は 7 月 22 日で平年より 13 日早かった。平均果実重は 343g で平年 (269g) より大きく、糖度は 13.2 度で平年 (13.0 度) 並であった。「ゆうぞら」の収穫開始は 8 月 16 日で平年より 13 日早く、収穫盛期は 8 月 17 日で平年より 16 日早かった。平均果実重は 358g で平年 (339g) より大きく、糖度は 13.9 度で平年 (13.0 度) よりやや高かった。

カ ナシ

「幸水」の発芽は 3 月 31 日で平年より 1 日早く、満開は 4 月 17 日で平年より 8 日早かった。収穫開始は 8 月 13 日で平年より 11 日早く、収穫盛期は 8 月 18 日で平年より 11 日早かった。平均果実重は 403g で平年 (382g) よりやや大きく、糖度は 13.0 度で平年 (12.5 度) 並であった。「豊水」の収穫開始は 9 月 2 日で平年より 10 日早く、収穫盛期は 9 月 6 日で平年より 11 日早かった。平均果実重は 601g で平年 (423g) より大きく、糖度は 13.5 度で平年 (12.9 度) 並であった。

キ ブドウ

「巨峰」の発芽は 4 月 13 日で平年より 4 日早く、満開は 6 月 1 日で平年より 7 日早かった。収穫開始は 8 月 22 日で平年より 15 日早く、収穫盛期は 8 月 29 日で平年より 11 日早かった。糖度は 17.7 度で平年 (16.5 度) よりやや高く、酒石酸含量は 0.48g/100ml で平年 (0.52g/100ml) より低かった。

ク 夏秋トマト

雨よけ施設栽培の定植は、県南地方では 4 月上旬頃から、南会津地方では 5 月下旬から 6 月上旬にかけて行われ、いずれも平年並であった。3~4 段果房の開花時は、高温によりしおれや葉焼けが発生しているほ場も見られたが、その後の低温により生育は平年並となった。また、7 月頃から高温による影響で生育が前進化した。収穫は、県南地方の 4 月定植の作型で平年並の 6 月中旬から始まった。南会津地方の 5 月下旬定植では、平年並の 7 月上旬から収穫が開始された。7、8 月は、高温の影響により落花が多く確認された。8 月までの高温の影響により、9 月の収量が低下した。南会津地方における摘芯作業は、9 月中旬頃から実施された。

ケ 夏秋キュウリ

露地栽培の定植は、平年並の 5 月下旬から行われた。定植直後は、強風による芯折れや低温による節間の詰まりがみられ、葉色の淡いほ場が散見された。6 月には高温乾燥による芯焼けがみられたが、平年並の 6 月下旬から収穫が開始された。高温の影響から、生育が早まり、側枝の発生は良好であった。7 月は、日照不足により流れ果の発生が生じた。8 月は、高温等の影響により草勢が低下し、生長点が弱く、管理作業の追いつかないほ場では繁茂状態であった。また、曲がり果等の果形の乱れが多く発生した。

コ イチゴ (2023 年定植)

普通育苗の花芽分化は、高温の影響で平年よりやや遅れ、定植は 9 月中旬から始まり、概ね 9 月下旬に終了した。頂花房の開花は花芽分化遅延の影響により 10 月下旬から開始となり、平年より 1 週間遅い 12 月上旬から頂花房収穫が始まった。花芽分化の遅れから、生育はやや遅れたが、その後の好天に恵まれたことから、3 月頃の生育は平年並に回復した。

サ 夏秋ナス

トンネル栽培は、4月下旬から定植が行われた。高温による生育の早まりから、出荷は昨年よりやや早い6月上旬から始まった。6月も気温が高く、収穫が前進化したため、6月の出荷量は多かった。露地栽培は、5月下旬頃に定植が行われ、定植頃の強風の影響で活着不良や初期生育の遅れがみられたが、その後の高温により生育は順調に回復した。7月は、日照不足の影響で草勢低下し、着果負担から落花が目立った。8月は、高温多雨により株の徒長や曲がり果、つやなし果等の奇形果が確認された。9月以降は、主枝切り戻し後の側枝の収穫において、果形が良好であった。枝の過繁茂や9月下旬の気温低下を受け、10月は草勢低下、裂果やがく褐変症状が多発し、10月中下旬で収穫終了となった。

シ 夏秋ピーマン

トンネル栽培は、平年並の4月下旬から5月上旬にかけて定植が行われた。露地栽培は5月下旬から定植が開始された。安達地域の露地栽培ほ場では、5月下旬から6月上旬に強風と低温があり、活着が遅れ、初期生育不良となった。収穫および出荷は平年並の6月中下旬から開始された。高温で経過したことから、草丈や側枝の発生は前進化し、整枝の遅れたほ場においては尻腐果が多く発生した。8月は、高温の影響により平年より生育が前進化し、整枝や追肥の遅れにより、一部のほ場で草勢低下がみられた。また、尻腐果や曲がり果の発生も多く確認された。9月は、7～8月の高温による影響で着果数が増加したことに伴い、草勢低下がみられた。

ス アスパラガス

会津地方における半促成栽培（春どり）では、2月下旬から被覆開始となり収穫開始時期および出荷は平年並の3月下旬頃から開始された。露地栽培については、平年よりやや早い4月中旬から収穫が開始された。

南会津地方の半促成栽培（夏どり）では、6月中旬頃から夏芽の収穫・出荷が開始されたが、7月中旬以降、高温や乾燥により奇形芽の発生や萌芽が緩慢になった。9月以降、高温が続き、高温や乾燥による萌芽が鈍かった。平年並の9月下旬に収穫終了となった。

セ 秋冬ネギ

相双地方の秋冬ネギにおいては、概ね4月から5月にかけて定植が行われた。夏季は、夜温も含め、高温であり、9月に入り、伸長及び肥大が抑制傾向であった。9月中旬から下旬にかけて、秋雨前線の影響から降水量が多かったため、土寄せ作業が遅れ、収穫開始は平年より2週間程度遅れた。また、いわき地方においては、9月下旬まで最高気温が30℃を超えるほ場が多く、生産者が管理作業を控えており、10月上旬から本格的に管理が再開され、出荷揃いが12月中旬となった。

ソ キク

コギクの8月咲き品種の定植は、平年並の4月下旬頃に行われ、摘芯作業も順調に実施された。9月咲き品種の定植は、平年並の5月中下旬に行われた。8月及び9月咲きの生育は、草丈がやや低く推移し、8月咲きは6月下旬頃から発蕾が確認された。8月咲き及び9月咲き品種は、概ね平年並の草丈となり開花時期がやや前進化したものの、出荷量も概ね平年並であった。

タ リンドウ

3月の低温の影響から、萌芽は平年並から2週間程度遅れた。その後は高温及び適度な降雨により、草丈はやや高くなり、節数は平年並であった。一部降雨の少ない地域では、草丈の短いほ場がみられた。早い地域では、6月上旬に早生系の品種が上位側芽発生期となった。しかし、6月の少雨の影響から、7月は平年より草丈が低く、葉数が平年並からやや少なかった。高温の影響から、開花時期はやや早く、7月下旬から出荷が開始された。9月の彼岸向け品種も、生育はやや前進傾向であった。

4 主要病害虫の発生経過及び原因解析

(1) 普通作物

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲	育苗期の病害（苗立枯病）	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：少	育苗期調査では、ピシウム菌、フザリウム菌、トリコデルマ菌による苗立枯病が確認された。発生箱率は、平年よりやや低かった（図 3- 1）。	有効な育苗箱施薬による適切な防除が実施されたと考えられる。	播種時の薬剤散布が慣行化している。
	育苗期の病害（ばか苗病）	平年：並 前年：並	平年：多 前年：多	育苗期調査での発生箱率は、平年より高かった（図 3- 1）。 業務用米など、米改良協会配布以外の種子で発生が多く確認された。	配布量から算定した予想種子更新率は 93. 2%と平年並に高かったが、自家採種や他県産種子を使用した施設、温湯消毒を実施した施設での発病が目立った。	消毒済種子への更新が多いが、未消毒種子でも化学農薬や生物農薬、温湯消毒による防除が実施されている。 2021 年度に、プロクロラズ剤の防除効果が低下した事例が確認された。
	育苗期の病害（もみ枯細菌病・苗立枯細菌病）	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：少	育苗期調査での発生箱率は、平年よりやや低かった（図 3- 1）。	米改良協会では、本病に対して効果の高い薬剤が使用されている。 配布量から算定した予想種子更新率は、93. 2%と平年並に高かった。	本病に対して効果の高い薬剤で種子消毒が行われている。
	いもち病（葉いもち）	平年：並 前年：並	平年：少 前年：やや少	置苗での発病は、確認されなかった（表 3- 12）。 本田での初発確認は、中通りで 8 月上旬、会津、浜通りで 7 月下旬であった（表 3- 13）。 発生程度は低く推移し、発生ほ場での発生程度は、すべて「微」であった（図 3- 2、図 3- 3）。	6 月の置苗残存ほ場割合は、年々低下傾向である。 6 月下旬から 7 月中旬にかけて、感染好適条件が周期的に出現したが、その後高温で経過したことで感染が抑制されたと考えられる（表 3- 14）。 育苗箱施薬が多くのは場で行われており、発病が抑制されたと考えられる。	育苗箱施用剤による防除が慣行化し、本田での防除は少なくなっている。
	いもち病（穂いもち）	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：やや多	初発確認は、全域で平年並の 8 月中下旬であった（表 3- 15）。 発生ほ場割合は、中通り、浜通りで平年より低かったが、会津で発病程度の高いほ場が確認された（図 3- 4、図 3- 5）。	中通り、浜通りでは、高温少雨傾向で経過したため、感染の拡大や穂への進展が抑制されたと考えられる。 会津の山間部では、7 月中旬以降も感染好適条件が出現しており、発病の要因となったと考えられる（表 3- 14）。	散布剤や水面施用剤による防除が実施されており、無人航空機による防除が増加している一方で、育苗箱施薬のみのは場も増加している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲	縞葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	発生は、確認されなかった。	麦類の作付面積が少ないため、本病を媒介するヒメトビウンカの越冬量が少なくと推察される。	本病を媒介するヒメトビウンカを対象とした防除は少なく、他の害虫との同時防除が行われている。
	白葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	発生は、確認されなかった。	本年度は、台風等による浸冠水はなかった。	本病を対象とした防除は行われていない。
	紋枯病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：多	初発確認は、中通り、会津で7月下旬、浜通りで8月上旬であった（表3-16）。 発生は場割合、発生程度ともに平年並に推移した（図3-6、図3-7）。	高温で経過したことから常発地での病斑の進展が早く、穂枯れ等の原因となったと考えられる。 窒素投入量の多い飼料用米や業務用米で発生が多かったと考えられる。	育苗箱施用剤や水面施用剤による防除が実施されたが、常発ほ場以外での防除は少ない。
	黄化萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	発生は、確認されなかった。	今年度は、台風等による浸冠水はなかった。	本病を対象とした防除は行われていない。 防除薬剤が製造中止となっており、有効な登録薬剤がない。
	稲こうじ病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：並	9月上旬の発生ほ場割合は、平年より低く、発生程度「少」以上のほ場は確認されなかった（図3-8）。	穂ばらみ期の降水量は、中通り、浜通りで少なく、会津では平年並であった。	常発地域以外での防除は少ない。
	ごま葉枯病	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	発生ほ場割合は、平年並からやや低く推移し、発生程度は低く、穂枯れの発生は確認されなかった（図3-9）。	砂質土壌地帯などの常発地域を中心に発生が確認された。	いもち病との同時防除が実施された。
	イネミズゾウムシ	平年：早 前年：やや早	平年：多 前年：並	成虫の本田侵入時期、防除適期は、平年と比べて早かった（表3-17）。 発生ほ場割合は、平年よりやや高く、浜通りでは発生程度の高いほ場も散見された（図3-10）。	育苗箱施用剤の普及により発生は少ないが、漸増傾向である。	育苗箱施用剤による防除が慣行化し、本田での防除は少なくなっている。
	イネヒメハモグリバエ（イネミギワバエ）	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	発生ほ場割合は、全域で平年より低く、発生程度の高いほ場は、確認されなかった。	近年、発生が漸減傾向である。	育苗箱施用剤による防除が慣行化し、本田での防除は少なくなっている。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稻	イネドロオイムシ（イネクビホソハムシ）	平年：早 前年：早	平年：少 前年：少	成虫の本田侵入時期、防除適期は、平年と比べて早かった（表 3- 18）。 発生ほ場割合は、全域で平年より低かった（図 3- 11）。	中通りの一部多発地域では、チアメトキサム剤に対する感受性低下が確認されているが、薬剤の置き換えが進んでいる。	育苗箱施用剤による防除が中心だが、発生程度の高いほ場では本田防除も実施された。
	ニカメイガ（ニカメイチュウ）（Ⅰ）	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	幼虫による被害は、平年並にほとんど確認されなかった。	育苗箱施薬が普及している。 被害を受けにくい品種が作付されている。	育苗箱施用剤による防除が中心である。
	ニカメイガ（ニカメイチュウ）（Ⅱ）	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	幼虫被害の発生ほ場割合は平年並で、発生程度の高いほ場は確認されなかった。	第 1 世代成虫の発生が平年並であったことから、発生量も平年並であったと考えられる。	本虫を対象とした防除は、ほとんど実施されていない。
	フタオビコヤガ（イネアオムシ）	平年：並 前年：並	平年：少 前年：並	会津の予察灯では、成虫の誘殺数は平年より少なく、誘殺ピークの数も平年より少なかった（図 3- 12）。 幼虫の発生ほ場割合、すくい取り調査による幼虫、成虫の発生地点割合は、平年より低く、発生程度も低かった。	高温少雨傾向で経過したため、発生が抑制されたと考えられる。	育苗箱施用剤の使用及び斑点米カメムシ類との本田同時防除が中心であり、本虫を対象とした防除はほとんど実施されていない。
	イチモンジセセリ（イネツトムシ）	平年：並 前年：並	平年：並 前年：多	幼虫の発生ほ場割合、発生程度は、全域で平年より低かった（図 3- 13）。	窒素投入量の多い飼料用米や業務用米で発生が多かったと考えられる。	常発地や発生が目立ったほ場では、薬剤による防除が実施された。
	コブノメイガ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	中通りでは、発生が見られなかった。 会津、浜通りの一部では、発生程度が高いほ場が見られたが、発生ほ場割合は平年並に低かった。	飛来量が平年より少なかったと推察される。	本虫を対象とした防除は、ほとんど実施されていない。
	イナゴ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	本県における主要種は、コバネイナゴである。 すくい取り調査による 8 月上旬の発生地点割合は、中通り、会津で平年並からやや高く、浜通りで平年より低かった（図 3- 14）。8 月下旬の発生地点割合は、全域で平年より低かった（図 3- 15）。	暖冬であったことで、ふ化が斉一化したと考えられる。	育苗箱施用剤の使用及び斑点米カメムシ類との本田同時防除が中心であり、本虫を対象とした防除はほとんど実施されていない。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稻	セジロウンカ	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：多	会津の予察灯には、8 月上旬から誘殺され、誘殺数は平年より少なかった（図 3- 16）。 本田におけるすくい取りでは、全域で 7 月下旬から発生が確認され、発生は場割合、発生程度は平年より高かった（図 3- 17）。 本虫による被害は、ほとんど確認されていない。	飛来量が多かったと考えられる。	育苗箱施用剤の使用及び斑点米カメムシ類との本田同時防除が中心であり、本虫を対象とした防除はほとんど実施されていない。
	ヒメトビウンカ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	会津の予察灯には、6 月中旬から誘殺が確認された（図 3- 18）。 本田におけるすくい取りでは、発生地点割合は平年より高かったものの、本虫により媒介される縞葉枯病の発生は確認されなかった（図 3- 19）。	麦類の作付面積が少ないため、越冬量が少ないと推察される。	育苗箱施用剤の使用及び斑点米カメムシ類との本田同時防除が中心であり、本虫を対象とした防除はほとんど実施されていない。
	トビイロウンカ	平年：一 前年：一	平年：並 前年：並	平年同様、発生は確認されなかった。	本県への飛来がなかったと推察される。	本虫を対象とした防除は実施されていない。
	ツマグロヨコバイ	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	会津の予察灯には、主に 8 月上旬から誘殺された（図 3- 20）。 本田における 7 月下旬のすくい取りでは、発生地点割合は平年よりやや多かった（図 3- 21）。 本県では、本虫による被害はスス病による汚れであり、吸汁害や黄萎病、萎縮病の発生はほとんど確認されていない。	暖冬であったため、越冬量が平年より多かったと考えられる。	育苗箱施用剤の使用及び斑点米カメムシ類との本田同時防除が中心であり、本虫を対象とした防除はほとんど実施されていない。
	斑点米カメムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	7 月の畦畔での発生は平年よりやや多かったが、本田での発生は平年並であった（図 3- 22～図 3- 34）。 本県における主要種は、アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシである（図 3- 35）。 イネカメムシが、中通りの矢祭町、浜通りの大熊町において確認された。 坪刈り調査による斑点米混入率は、平年並であった（図 3- 36）。	4 月から気温が高く推移したため、水田畦畔がカスミカメムシ類の増殖に適した環境となり、畦畔での発生量は多かったと推察される。	本虫に登録のある育苗箱施用剤が使用されている。 定植後、継続的に畦畔の除草を実施する生産者が増加している。 出穂後 1～2 回の薬剤防除が実施されており、無人航空機での実施面積が増加傾向にある。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稻	斑点米 カメムシ類			クモヘリカメムシのすくい取り調査では、中通り北部、中通り南部、浜通りで捕獲された（図 3- 37）。 また、フェロモントラップ調査では、中通り北部及び南部、浜通りで捕獲された（図 3- 38）。		
ムギ類 (2024 年産)	雪腐病類	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：やや少	発生は、ほとんど見られなかった。 (図 3- 39)	会津では、長期根雪が見られなかった。	本病を対象とした防除は、ほとんど実施されていない。
	赤かび病	平年：やや早 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	中通りや浜通りで発生が見られたが、発生程度は低かった（図 3- 40）。	冬期間が温暖だったため生育が進み出穂も平年より早かった。開花期に降雨が少なかったため感染好適条件は少なかった。	浜通りや中通り地方で、無人航空機や防除機による防除が実施された。
	うどんこ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	発生は、確認されなかった。	例年発生が少ない。	赤かび病との同時防除が実施された。
	さび病類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	発生は、確認されなかった。	例年発生が少ない。	赤かび病との同時防除が実施された。
ダイズ	立枯性病害	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	会津の一部では、黒根腐病の発生程度が高いほ場が見られた。他の立枯性病害の発生は、確認できなかった。	水田からの転換ほ場でも黒根腐病の発生を確認しており、菌密度の高まっていると考えられる。	種子消毒剤を塗布が多く、の産地で行われている。常発地では、排水対策に努めている。
	紫斑病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	子実調査の被害粒率は、中通りで平年よりやや高く、会津で高く、浜通りで低かった（図 3- 41）。	会津では、9 月以降の多雨で莢の登熟が進まず、成熟期が遅れたため紫斑粒が増えたと考えられる。	種子消毒剤を塗布が多く、の産地で行われている。常発地では、無人航空機での防除が実施された。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
ダイズ	べと病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	感受性品種を作付けしたほ場で発生程度の高いほ場が見られた。子実調査では、被害粒率が高いほ場が見られた（図 3- 42、図 3- 43）。	感受性品種（里のほほえみ）の作付が増加しており、発病が拡大した。	感受性品種を作付けしたほ場の一部で、無人航空機の防除が実施された。
	ウコンノメイガ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	全域で葉巻被害が見られた。会津では、被害程度の高いほ場が確認された（図 3- 44）。	7 月中旬から 8 月下旬が高温少雨であったことから、活動が活発であったと考えられる。	常発地では、防除が実施されたが、防除しないほ場が多い。
	アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：少 前年：並	9 月の巡回調査では浜通りで発生程度の高いほ場が見られたが、全域では発生程度が低かった。	7 月中旬から 9 月中旬に高温であったことから増殖が抑制されたと考えられる。	本虫を対象とした防除は、ほとんど行われていない。
	吸実性カメムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：少	払落し調査では、全域で発生の多いほ場が確認された。 主要種は、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシであった（図 3- 45）。 子実調査の被害粒率は、中通り、浜通りで平年並、会津でやや高かった（図 3- 46）。	7 月中旬から 9 月中旬に高温であったことから、増殖が促進されたと考えられる。	紫斑病との混合剤による防除が無人航空機で実施された。
	フタスジヒメハムシ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	払落し調査、子実被害調査ともに、会津で発生の多いほ場が見られたが、中通り、浜通りでは発生程度の低いほ場が多かった（図 3- 47、図 3- 48）。	7 月中旬から 9 月中旬に高温であったことから、増殖が促進されたと考えられる。	吸実性カメムシ類との同時防除が実施された。
	マメシンクイガ	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：並	子実調査では、連作ほ場では被害が多く見られたが、輪作初年目のほ場ではあまり見られなかった（図 3- 49）。	ほ場毎の発生量に大きな差があり、連作年数が増加するにつれて発生量も増加している。	輪作が可能なほ場では、3 年を目安に水稻との輪作が実施されている。
	シロイチモジマダラメイガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：やや多	子実調査の被害粒率は、全域で平年並に低かった。	本虫が大きな問題となることはない。	吸実性カメムシ類やマメシンクイガとの同時防除が実施されている。
	サヤムシガ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	子実調査の被害粒率は、全域で平年並に低かった。	本虫が大きな問題となることはない。	吸実性カメムシ類やマメシンクイガとの同時防除が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
ダイズ	ダイズサヤ タマバエ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	子実調査の被害粒率は、全域で平年並に低かった。	本虫が大きな問題となることはない。	吸実性カメムシ類やマメシクイガとの同時防除が実施されている。
	食葉性 チョウ目 幼虫	平年：並 前年：並	平年：多 前年：多	払落し調査では、浜通りで発生が多かった（図 3- 50）。 主要種は、ツメクサガ、ハスモンヨトウ、オオタバコガであった。	全国で暖冬傾向であったことから、越冬地での越冬量が多かったと考えられる。	発生の多い地域では、無人航空機での防除が実施された。

ア 水稻

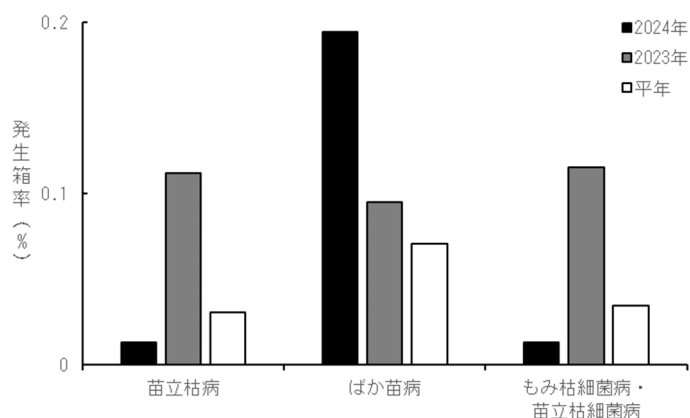


図 3- 1 育苗期病害の発生状況

表 3- 12 補植用置苗における葉いもちの初発確認日

年次	中通り	会津	浜通り
2014	—	6月20日	—
2015	6月22日	6月8日	—
2016	—	—	—
2017	—	6月21日	—
2018	—	6月11日	—
2019	—	—	—
2020	—	—	6月12日
2021	—	6月17日	6月15日
2022	—	—	—
2023	—	—	—
2024	—	—	—
平年	6月22日	6月15日	6月13日

注) —：6月下旬で発生が未確認

表 3- 13 本田における葉いもちの初発確認日

年次	中通り	会津	浜通り
2014	7月3日	7月8日	7月4日
2015	7月1日	7月7日	8月4日
2016	7月5日	7月27日	7月4日
2017	7月12日	7月26日	7月20日
2018	8月2日	7月11日	7月6日
2019	8月6日	7月30日	7月9日
2020	7月6日	7月22日	7月29日
2021	7月1日	8月6日	7月2日
2022	7月20日	7月7日	7月21日
2023	7月21日	—	7月4日
2024	8月5日	7月29日	7月25日
平年	7月13日	7月19日	7月13日

注) —：8月上旬で発生が未確認



図 3- 2 葉いもちの発生状況（7月下旬）

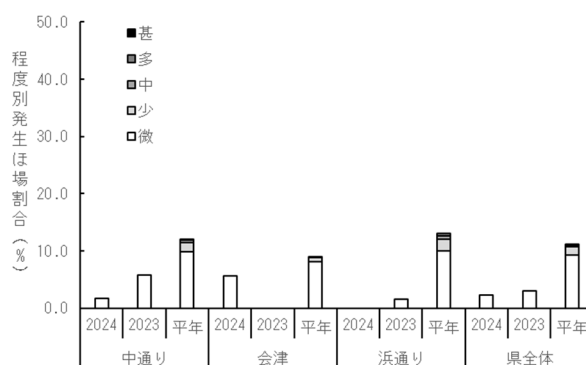


図 3- 3 葉いもちの発生状況（8月上旬）

表 3- 14 BLASTAM による葉いち感染好適条件の出現状況表

アメダス 地点	月日	中通り										会津							浜通り								
		梁川	福島	二本松	船引	郡山	湯本	小野	石川	白河	東白川	喜多方	西会津	猪苗代	若松	金山	只見	南郷	田島	相馬	飯館	浪江	川内	広野	山田	小名浜	
6月	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	2	—	△	—	—	—	△	△	△	△	△	△	—	—	—	△	—	—	—	—	△	—	○	△	△	○	
	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	4	△	—	—	—	—	△	△	△	△	△	△	—	—	—	△	—	—	—	—	△	—	—	○	—	—	
	5	※	—	—	△	—	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	△	—	—	—	—	—	—	—	
	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	10	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	△	—	—	—	—	—	
	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	17	—	—	●	●	—	●	△	●	△	●	—	●	△	—	●	●	△	—	●	△	—	—	—	—	—	—
	18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	※	—	—	—	—	—	—
	21	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	22	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	△	—	—	●	
	23	●	—	—	—	●	—	—	—	—	—	●	●	●	●	○	○	—	—	●	—	—	—	—	—	—	—
	24	●	—	—	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	●	△	—	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	28	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	29	—	—	—	●	●	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月	1	△	—	—	—	—	○	●	●	—	—	●	●	●	●	—	●	●	○	△	—	—	—	●	●	—	
	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	4	※	—	—	●	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	11	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	13	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	15	●	●	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	18	●	—	●	●	●	●	●	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	●	—	●	●	—	●	●	●	
	19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	21	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	26	○	○	—	○	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	28	—	—	—	—	△	—	△	—	△	△	—	—	—	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	29	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—	—	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	△	
	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
31	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
8月	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	6	—	—	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	
	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	8	—																									

表 3- 15 穂いもちの初発確認日

年次	中通り	会津	浜通り
2014	8月21日	8月20日	9月4日
2015	8月18日	8月19日	8月21日
2016	8月19日	8月24日	8月22日
2017	8月22日	8月24日	9月4日
2018	8月21日	8月22日	9月4日
2019	8月21日	9月13日	9月10日
2020	8月18日	8月17日	8月18日
2021	8月23日	8月30日	8月24日
2022	8月24日	8月19日	8月24日
2023	8月22日	8月24日	8月21日
2024	8月19日	8月22日	8月27日
平年	8月20日	8月24日	8月27日

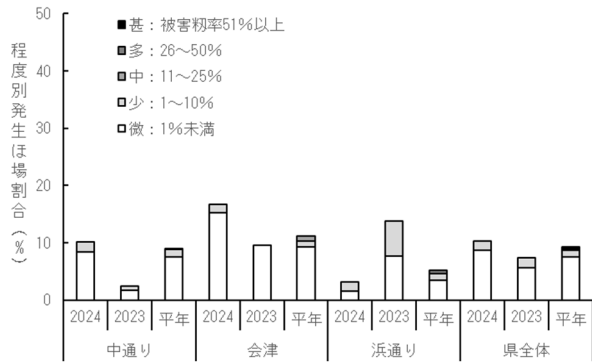


図 3- 4 穂いもちの発生状況 (8 月下旬)

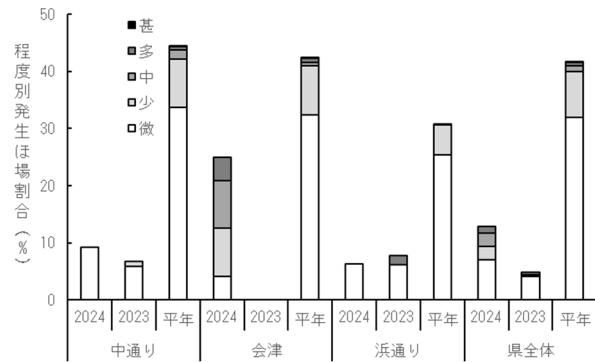


図 3- 5 穂いもちの発生状況 (9 月上旬)

表 3- 16 紋枯病の初発確認日

年次	中通り	会津	浜通り
2014	7月16日	8月5日	8月1日
2015	7月15日	7月15日	7月14日
2016	7月20日	7月27日	7月25日
2017	7月21日	7月26日	7月20日
2018	7月20日	7月25日	7月23日
2019	7月26日	7月25日	8月5日
2020	7月21日	7月22日	7月29日
2021	7月20日	8月6日	8月4日
2022	7月26日	7月26日	7月25日
2023	7月21日	7月27日	7月24日
2024	7月20日	7月30日	8月5日
平年	7月20日	7月26日	7月26日

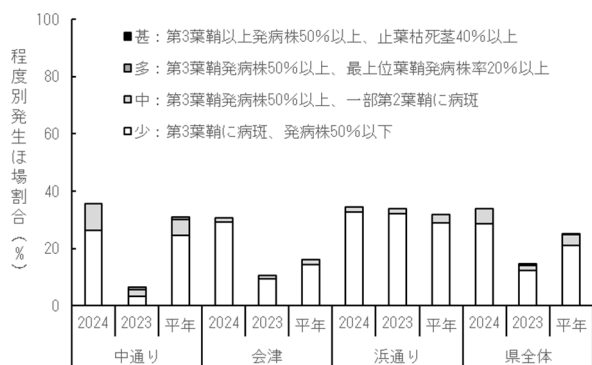


図3-6 紋枯病の発生状況（8月下旬）

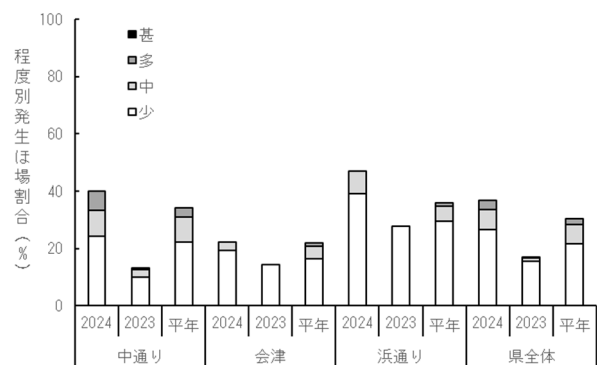


図3-7 紋枯病の発生状況（9月上旬）

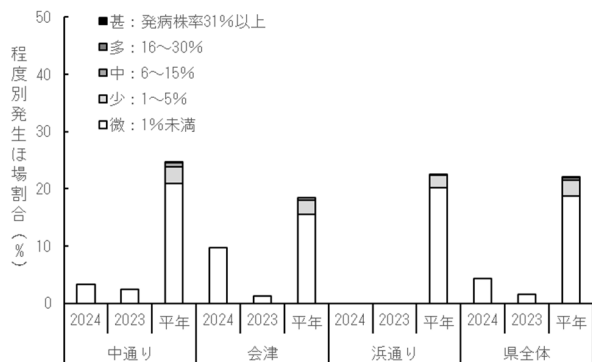


図3-8 稲こうじ病の発生状況（9月上旬）

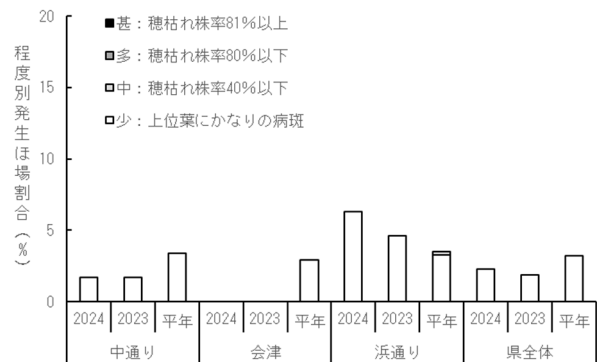


図3-9 ごま葉枯病の発生状況（9月上旬）

表3-17 イネミズゾウムシの成虫侵入盛期、防除適期シミュレーション結果

アメダス地点		侵入盛期(月/日)			防除適期(月/日)		
		本年	平年	平年差(日)	本年	平年	平年差(日)
中通り	梁川	4/27	5/6	-9	5/5	5/16	-11
	福島	4/27	5/4	-7	5/4	5/13	-9
	二本松	4/29	5/8	-9	5/7	5/19	-12
	郡山	5/4	5/12	-8	5/13	5/22	-9
	白河	5/4	5/14	-10	5/17	5/25	-8
	東白川	5/1	5/11	-10	5/12	5/22	-10
会津	猪苗代	5/15	5/26	-11	5/29	6/5	-7
	若松	4/29	5/11	-12	5/7	5/21	-14
	喜多方	4/30	5/14	-14	5/12	5/24	-12
	西会津	5/3	5/17	-14	5/14	5/27	-13
	田島	5/12	5/23	-11	5/26	6/3	-8
浜通り	相馬	5/4	5/14	-10	5/12	5/24	-12
	浪江	5/4	5/10	-6	5/12	5/21	-9
	飯舘	5/11	5/22	-11	5/24	6/1	-8
	広野	5/1	5/14	-13	5/11	5/25	-14
	小名浜	4/30	5/15	-15	5/11	5/25	-14

注) パラメータは、3月1日起算、毎正時気温、发育零点13.8℃とし、有効積算温度から侵入盛期:72.8日度、防除適期:110日度とした。
 注) 平年は平成26～令和5年のシミュレーションの平均。

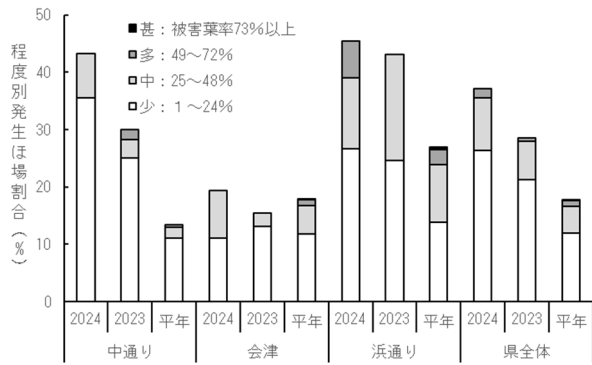


図 3- 10 イネミズゾウムシの発生状況
(6 月下旬)

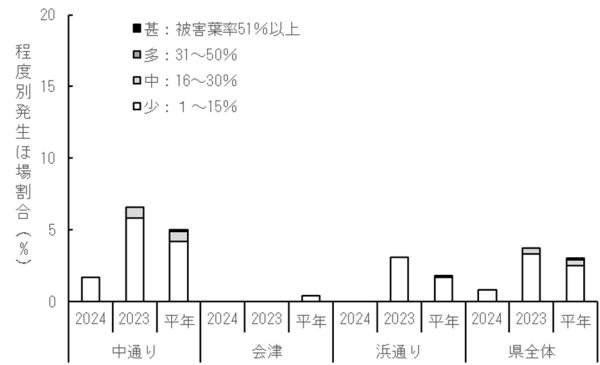


図 3- 11 イネドロオイムシの発生状況
(6 月下旬)

表 3- 18 イネドロオイムシの成虫侵入盛期、幼虫の防除適期シミュレーション結果

アメダス地点		侵入盛期(月/日)			幼虫の防除適期(月/日)		
		本年	平年	平年差(日)	本年	平年	平年差(日)
中通り	梁川	4/30	5/12	-12	5/11	5/24	-13
	福島	4/29	5/9	-10	5/11	5/21	-10
	二本松	5/3	5/13	-10	5/15	5/25	-10
	郡山	5/5	5/16	-11	5/19	5/28	-9
	白河	5/6	5/18	-12	5/22	5/29	-7
	東白川	5/5	5/16	-11	5/19	5/28	-9
会津	猪苗代	5/16	5/27	-11	6/2	6/8	-6
	若松	5/3	5/15	-12	5/16	5/26	-10
	喜多方	5/5	5/18	-13	5/19	5/29	-10
	西会津	5/5	5/20	-15	5/22	6/1	-10
	田島	5/16	5/25	-9	6/1	6/9	-8
浜通り	相馬	5/5	5/17	-12	5/18	5/29	-11
	浪江	5/5	5/15	-10	5/18	5/27	-9
	飯舘	5/15	5/24	-9	5/29	6/7	-9
	広野	5/4	5/16	-12	5/17	5/29	-12
	小名浜	5/2	5/15	-13	5/16	5/28	-12

注) パラメーターは 4 月 1 日起算、発育零度 11.0℃、有効積算温度が侵入盛期 140 日度、
幼虫の防除適期 (ふ化盛期): 220 日度とした。
注) 2013 年~2022 年のシミュレーションの平均。

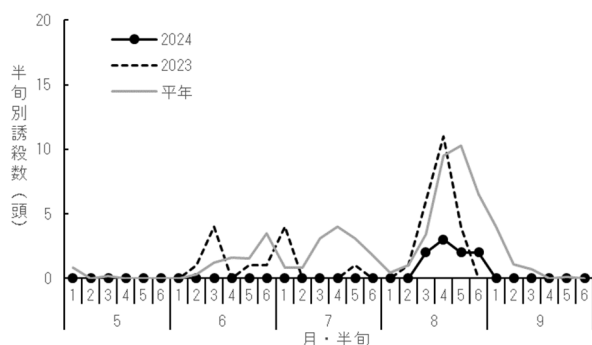


図 3- 12 予察灯によるフタオビコヤガの
誘殺状況 (会津坂下町)

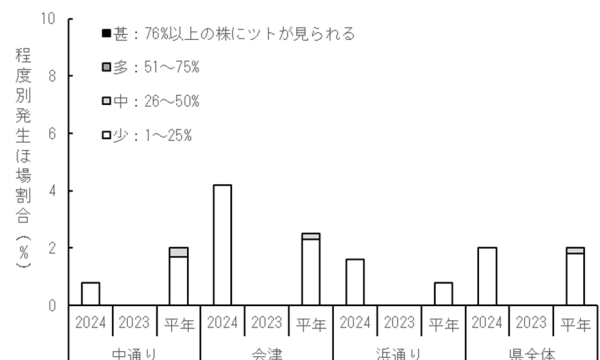


図 3- 13 水田内におけるイチモンジセリ
(イネツトムシ)の発生状況(8 月下旬)

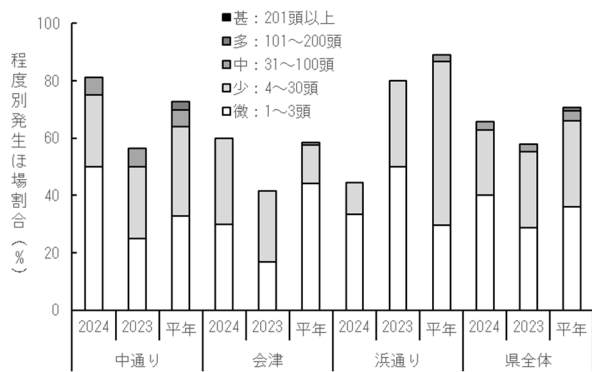


図 3- 14 イナゴの発生状況（8月上旬）

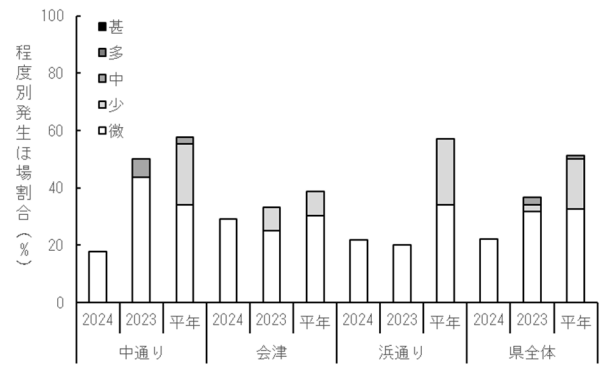


図 3- 15 イナゴの発生状況（8月下旬）

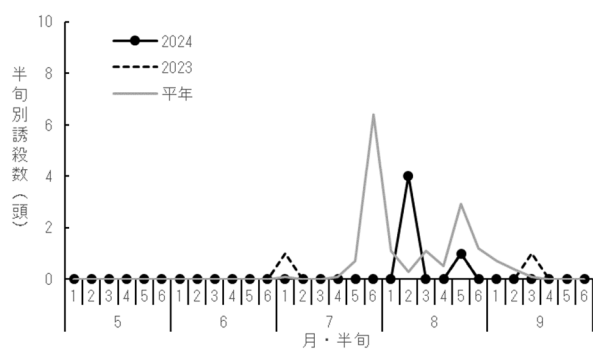


図 3- 16 予察灯によるセジロウンカの誘殺状況（会津坂下町）

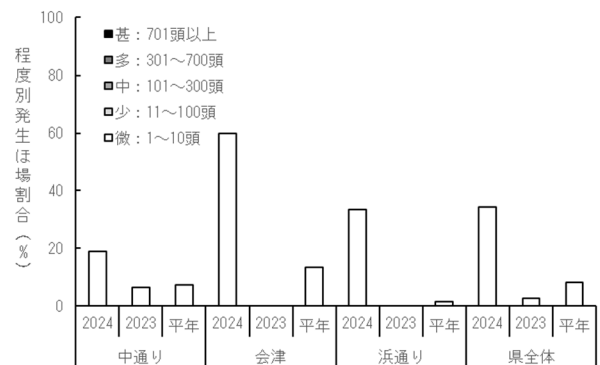


図 3- 17 水田内におけるセジロウンカの発生状況（7月下旬・すくい取り）

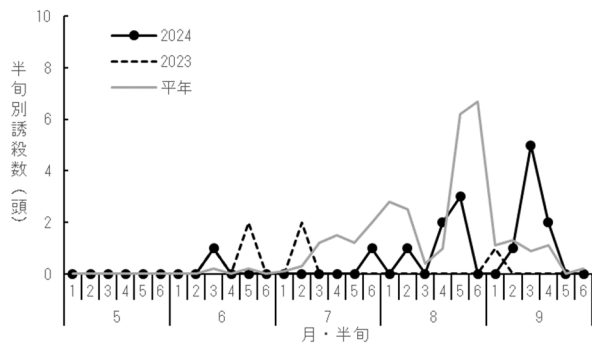


図 3- 18 予察灯によるヒメトビウンカの誘殺状況（会津坂下町）

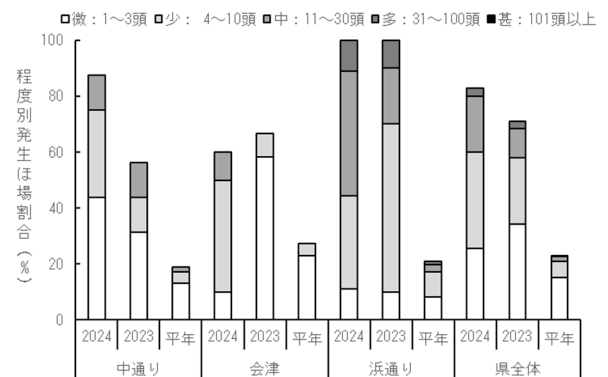


図 3- 19 水田内におけるヒメトビウンカの発生状況（7月下旬・すくい取り）

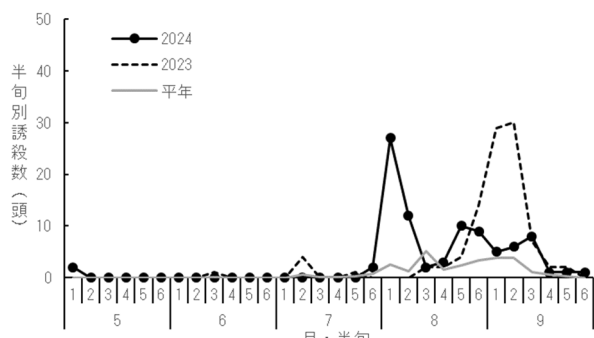


図 3- 20 予察灯によるツマグロヨコバイの誘殺状況（会津坂下町）

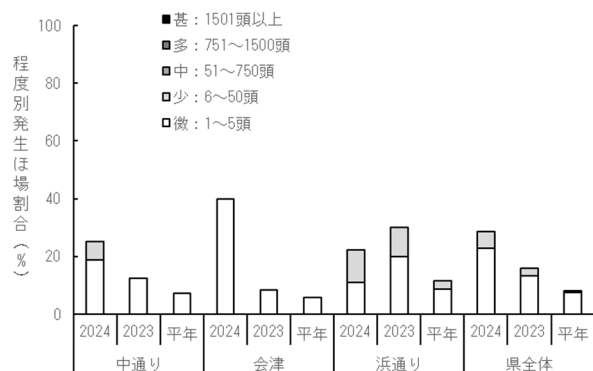


図 3- 21 水田内におけるツマグロヨコバイの発生状況（7 月下旬・すくい取り）

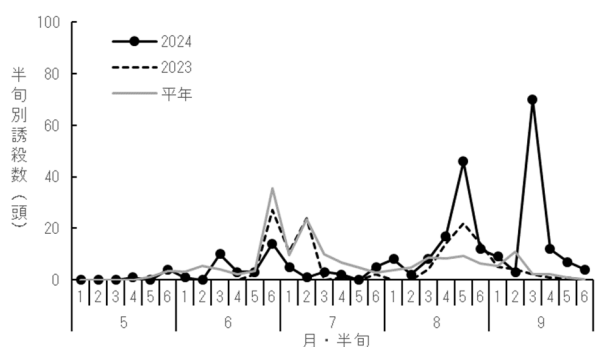


図 3- 22 予察灯によるアカスジカスミカメの誘殺状況（会津坂下町）

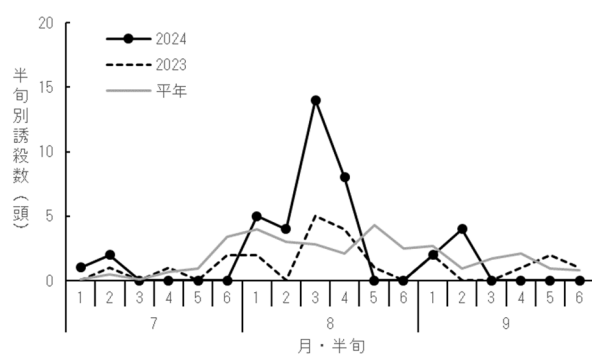


図 3- 23 フェロモントラップによるアカスジカスミカメの誘殺状況（郡山市）

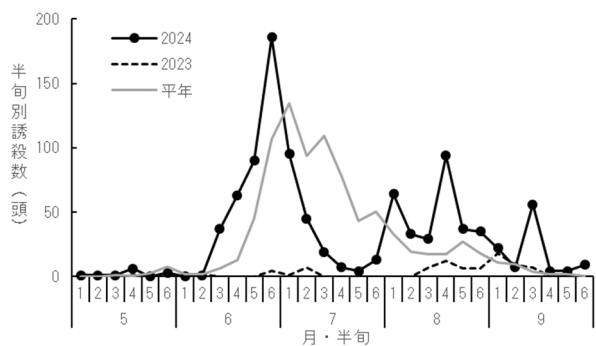


図 3- 24 予察灯によるアカヒゲホソミドリカスミカメの誘殺状況（会津坂下町）

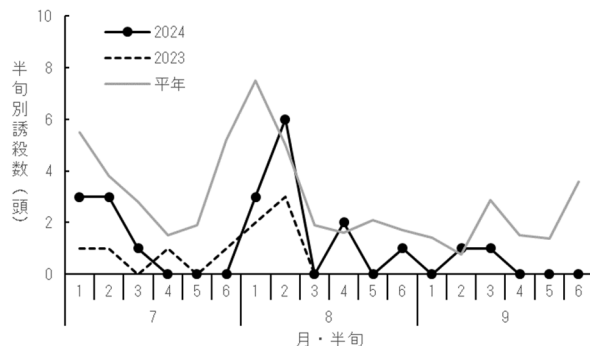


図 3- 25 フェロモントラップによるアカヒゲホソミドリカスミカメの誘殺状況（郡山市）

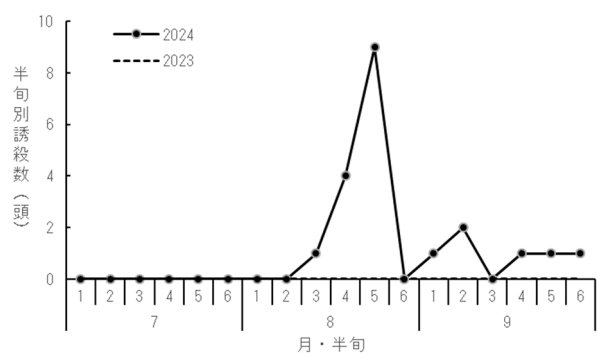


図 3- 26 フェロモントラップによるクモヘリカメムシの誘殺状況 (国見町)

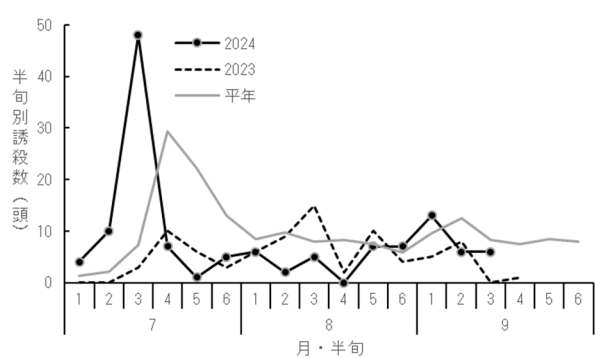


図 3- 27 フェロモントラップによるクモヘリカメムシの誘殺状況 (矢祭町)

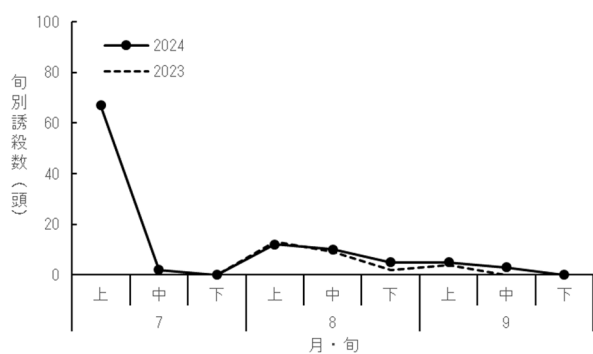


図 3- 28 フェロモントラップによるクモヘリカメムシの誘殺状況 (田村市)

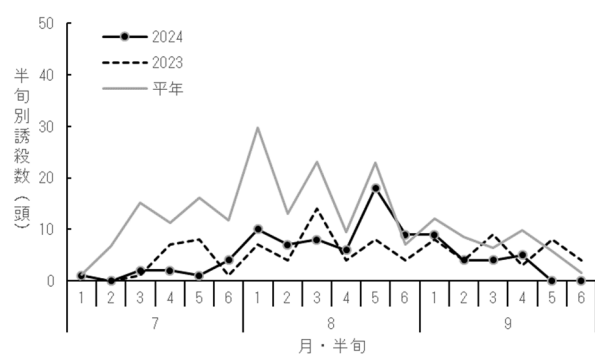


図 3- 29 フェロモントラップによるクモヘリカメムシの誘殺状況 (相馬市)

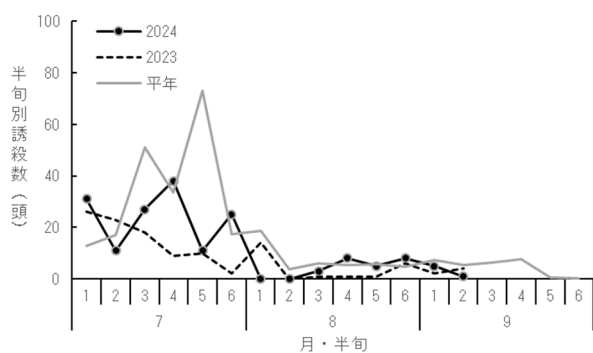


図 3- 30 フェロモントラップによるクモヘリカメムシの誘殺状況 (いわき市)

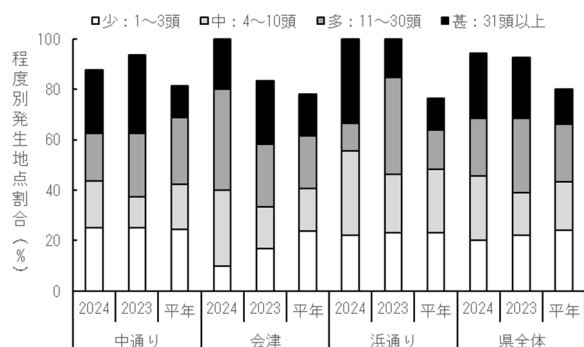


図 3- 31 水田畦畔雑草における斑点米
カメムシ類の発生状況
(7月上旬・すくい取り)

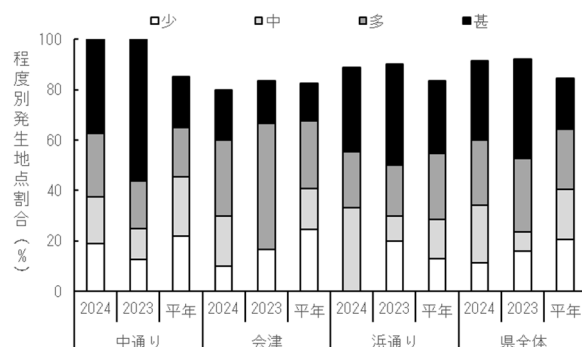


図 3- 32 水田畦畔雑草における斑点米
カメムシ類の発生状況
(7月下旬・すくい取り)

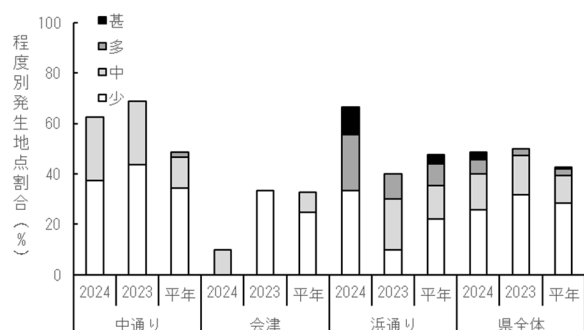


図 3- 33 水田内における斑点米カメムシ類の
発生状況 (8月下旬・すくい取り)

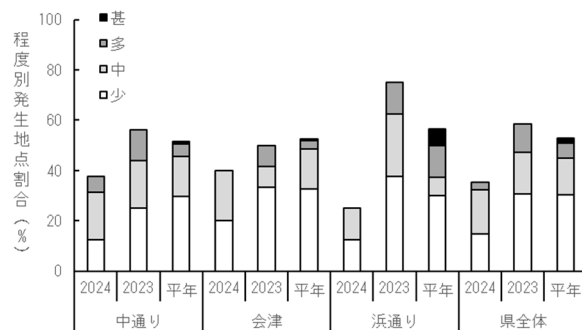


図 3- 34 水田内における斑点米カメムシ類の
発生状況 (9月上旬・すくい取り)

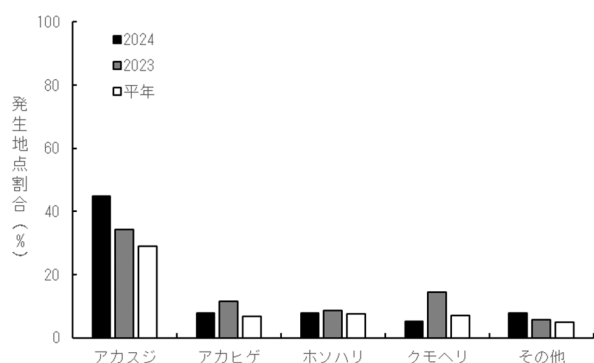


図 3- 35 水田内における斑点米カメムシ類の種別
発生状況 (8月下旬・すくい取り)

注) アカスジ：アカスジカスミカメ

アカヒゲ：アカヒホソミドリカスミカメ

ホソハリ：ホソハリカメムシ

クモヘリ：クモヘリカメムシ の略

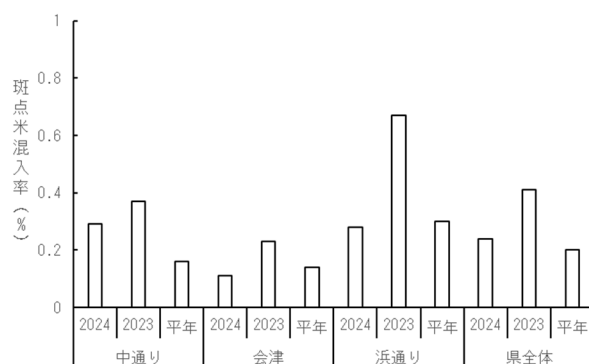


図 3- 36 斑点米調査による斑点米混入率



図 3- 37 すくい取り調査におけるクモヘリ
カメムシの捕獲状況（2024 年）
○：すくい取りにより捕獲個体のあった地点
×：すくい取りにより捕獲個体のなかった地点



図 3- 38 フェロモントラップ調査における
クモヘリカメムシの誘殺状況(2024 年)
△：誘殺された個体のあった地点
▲：誘殺された個体のなかった地点

イ ムギ類

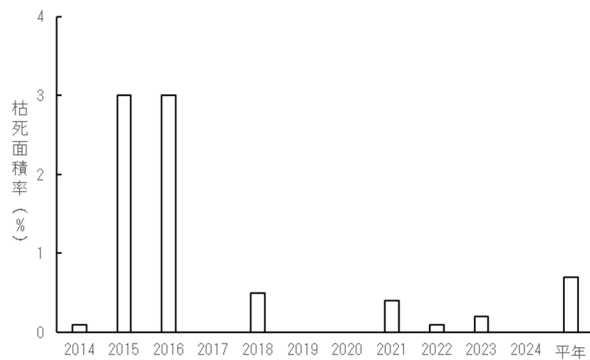


図 3- 39 雪腐病による枯死面積率の推移
(3～4 月)

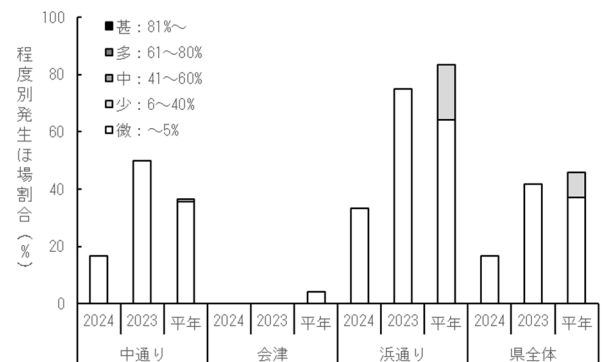


図 3- 40 赤かび病の発生状況（6 月）

ウ ダイズ

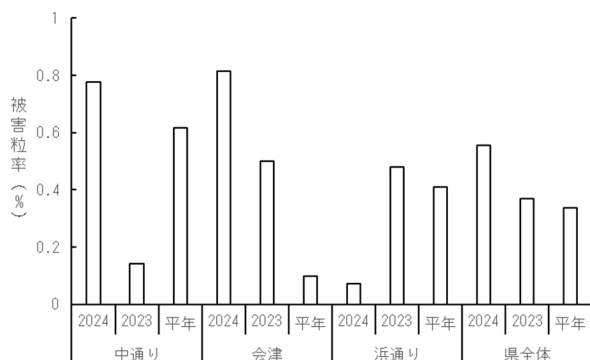


図 3- 41 紫斑病による子実被害の発生状況

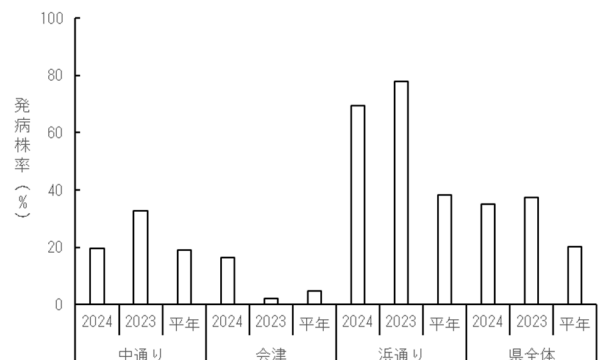


図 3- 42 べと病の発生状況（8 月）

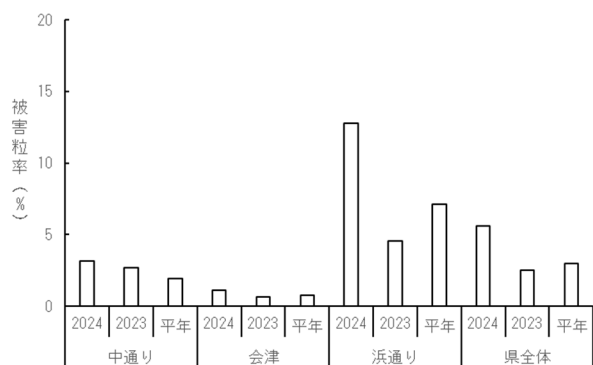


図 3- 43 ベと病による子実被害の発生状況

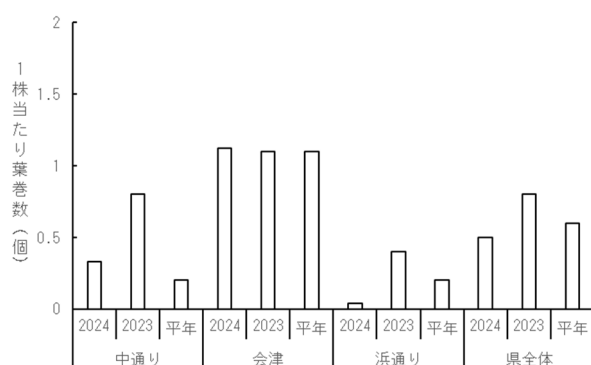


図 3- 44 ウコンノメイガ幼虫による葉巻の発生状況 (8 月)

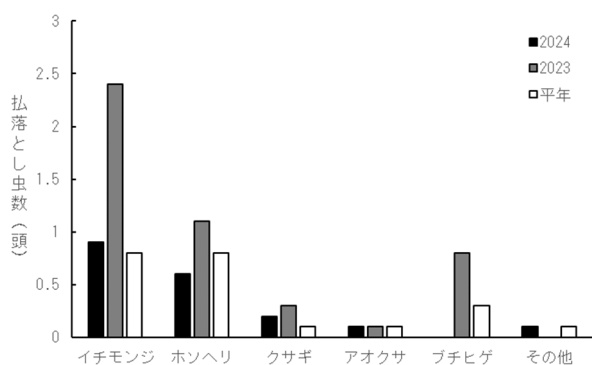


図 3- 45 吸実性カメムシ類の種別発生状況 (9 月)

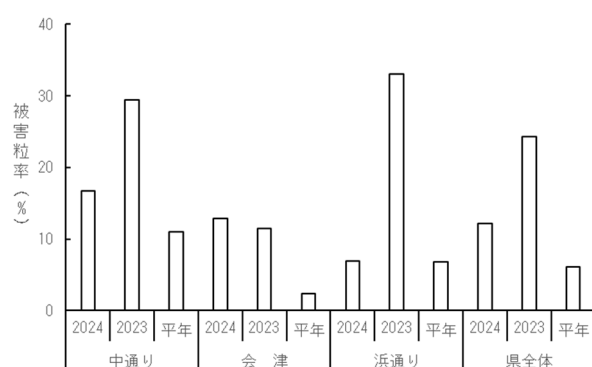


図 3- 46 吸実性カメムシ類による子実被害の発生状況

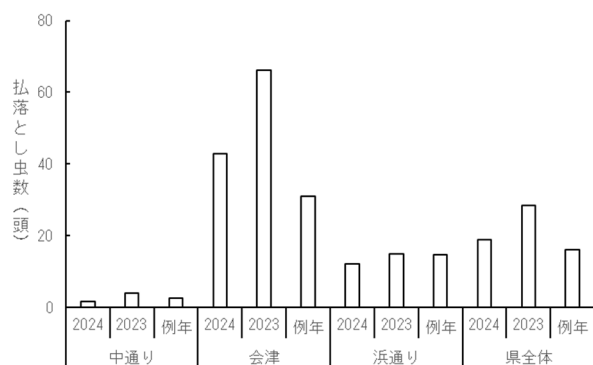


図 3- 47 フタスジヒメハムシの払落とし頭数 (9 月)

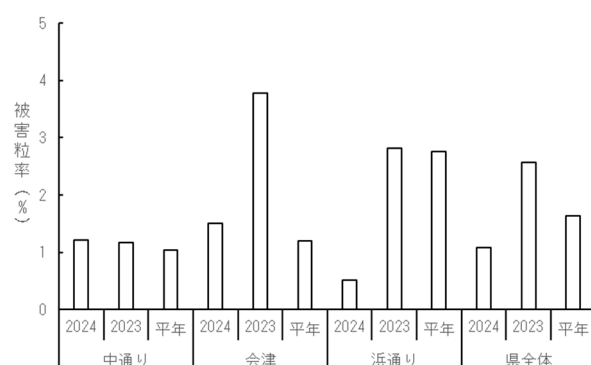


図 3- 48 フタスジヒメハムシによる子実被害の発生状況

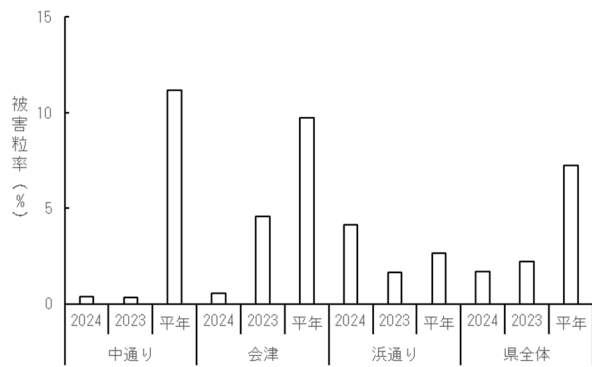


図 3- 49 マメシンクイガによる子実被害の発生状況

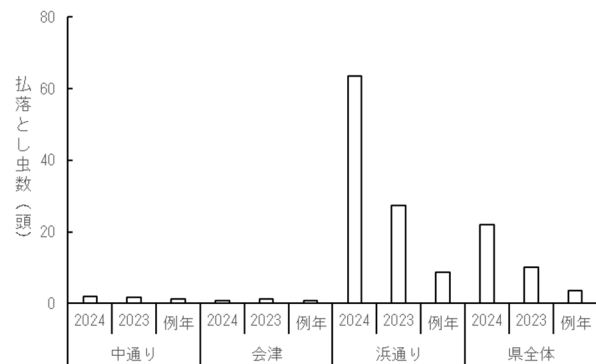


図 3- 50 食葉性チョウ目害虫の払落とし頭数(8月)

(2) 果樹

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
リンゴ	斑点落葉病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	新梢葉での発生は、5 月下旬から確認された。発生ほ場割合は、ほぼ平年並に推移した（図 3- 51）。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	黒星病	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	中通りでは、新梢葉、果実ともに発生は確認されなかった。会津では 7 月下旬に新梢葉での発生が確認され、発生ほ場割合は平年並であった。果実での発生は、6 月のみ確認された（図 3- 52、図 3-53）。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	うどんこ病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	発生は確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針の採用薬剤による防除が行われた。
	腐らん病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：やや少	5 月下旬～6 月上旬の発生ほ場割合は、平年並であった（図 3- 54）。	薬剤による防除は行われていると考えられるが、発生ほ場では発病部位が放置されているケースが見受けられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われたが、一部のほ場では耕種的防除が不十分であった。
	輪紋病	平年：並 前年：並	平年：多 前年：多	9 月から 11 月にかけて発生ほ場割合は、平年より高く推移し、県中・県南では発生程度が高い傾向であった。（図 3- 55）。	生育の早まりにより果実への感染も早まり、秋期の高温により発病が助長された可能性がある。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われたが、適期防除とならなかった可能性がある。
	褐斑病	平年：やや早 前年：やや早	平年：やや多 前年：並	5～6 月に果そう葉での発生が確認された（図 3- 57）。 新梢葉での発生は、6 月から確認され、発生ほ場割合は、おおむね平年並で経過した。10 月には中発生のほ場が多く確認された（図 3- 56）。	果樹研究所では、4 月 10 日頃から子のう胞子の飛散が確認され、5 月には降雨後に多数の胞子飛散が確認され、果そうでの発生となったと考えられた。その後は、乾燥のため平年並で経過した。 8 月中旬、9 月中旬の降水量が平年より多かったため、10 月の発生が増加した。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われたが、5 月の降雨で発生が増加した。 病害虫防除情報（6 月 26 日）を発表し、二次感染期の適切な防除などを呼び掛けた。
	炭疽病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	果実での発生は 9 月から確認されたが、発生ほ場割合は平年並に推移した（図 3- 58）。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針の採用薬剤による防除が行われた。
	すす点病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	中通りでは 9 月上旬から発生が確認され、発生ほ場割合は、平年並で推移した（図 3- 59）。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
リンゴ	すす斑病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：多	県中・県南と会津では、11月の発生ほ場割合が高かった。	9月中下旬や10月上旬に降雨があり、防除が行えなかった場合があったと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われたが、追加で防除を行う必要があった可能性がある。
	ハダニ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	新梢葉の寄生が確認されたのは、6月からで、8月の発生ほ場割合は平年よりやや高くなったものの、9月には平年より低くなった（図3-60）。 中通りでは、ナミハダニ、会津ではリンゴハダニが優占する傾向があった。	夏季が高温となり、ハダニ類の増殖に好適であったため、一時的に発生ほ場割合が増加した。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	シンクイムシ類	平年：やや早 前年：やや早	平年：並 前年：並	ナシヒメシンクイのフェロモントラップへの誘殺は、4月3半旬から確認された（図3-61）。越冬世代、第1世代の誘殺数は平年よりも多く、それ以降は昨年と同程度であった。果実での被害は、9、10月に確認された（図3-62）。 モモシンクイガのフェロモントラップへの誘殺は、7月6半旬から確認された（図3-63）。果実での被害は8月に確認された（図3-64）。 スモモヒメシンクイのフェロモントラップへの誘殺は、4月6半旬から確認された（図3-65、図3-66）。果実での被害は10月に確認された（図3-67）。	ナシヒメシンクイについて、5月下旬のモモの芯折れや果実被害が発生したのは、越冬世代の誘殺盛期がコンフューザー設置前の4月17日（果樹研究所調べ）であり、本種に効果が高い殺虫剤の散布が導入期間終了（福島市：4/30）以降となったことが考えられた。 その後も発生密度が高い状態が続き、7月調査におけるモモの芯折れは、過去に事例がないほどの発生状況となった。 8月に入っても芯折れの発生は多かった。また、高温傾向のため、9月には第4世代の発生もあったと考えられた。 その他のシンクイムシはおおむね適期防除が行われていると考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われたが、一部のほ場では適期防除が実施できなかった。 ナシヒメシンクイについては、7月30日及び8月29日に防除対策を発表し、果実の防除を促した。
	ハマキムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	リンゴコカクモンハマキのフェロモントラップへの誘殺は、6月1半旬から確認された（図3-68）。 花そう、新梢、果実における被害発生は確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
リンゴ	キンモンホソガ	平年：やや早 前年：やや早	平年：並 前年：少	フェロモントラップへの誘殺は、4 月 1 半旬から確認され、誘殺数は平年より多かった（図 3- 69、図 3- 70）。 新梢葉での発生ほ場割合は、8～9 月に平年よりやや高かったものの（図 3- 71）、被害程度は低かった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	アブラムシ類	平年：やや早 前年：やや早	平年：やや少 前年：並	新梢寄生の発生ほ場割合は、5、6 月とも平年より低かった（図 3- 72）。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	ギンモンハモグリガ	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：多	新梢での被害は、確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	ヒメボクトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	フェロモントラップへの誘殺は、平年並に推移した（図 3- 73）。発生ほ場割合は、平年より低かった（図 3- 74）。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
モモ	せん孔細菌病	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	春型枝病斑の初発確認は、4 月 2 日（参考調査「ゆうぞら」）であった。巡回調査では、発生が確認されなかった（図 3-75）。 新梢葉での発生は、6 月下旬から確認され、発生ほ場割合は期間を通してほぼ平年よりやや低く推移した（図 3- 76）。 果実での発生は、7 月上旬に確認され、発生ほ場割合は平年よりやや低かった（図 3- 77）。	次年の生産のための秋期防除も含め、適期防除が実施されたと考えられる。 また、本病は卓効を示す薬剤はなく、物理的防除や耕種の防除を組み合わせた総合的防除対策が必要であるが、生産者は本病に対する意識が高く、総合的防除対策に積極的に取り組むケースが多いと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。また、春型枝病斑や罹病部位の除去や防風ネットの設置といった総合的な防除対策が行われた。 病害虫防除情報（4 月 24 日）を発表し、各種防除対策を行うよう注意喚起した。
	灰星病	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	5 月上旬の「あかつき」での花腐れの発生ほ場割合は平年より高かったが、果実の発病は確認されなかった（図 3- 78）。	花腐れの多発要因として、本病に対する感受性が高い開花期間中の 4 月 8～9 日に累計 51.5mm の降水があり、降雨時間の累計は 15h と長く、降水時平均気温が 15.0℃と比較的高かったため、本病の感染に好適な条件であったと考えられた。	5 月 9 日に防除情報を発出し、本病による枝枯れのせん除の徹底などについて注意喚起を行った。5 月下旬に花腐れの追加調査を実施した結果、福島地域・伊達地域ともに発生は確認されず、せん除が徹底されていた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
モ モ	ホモブシス 腐敗病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	果実での発生は、確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	ハダニ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	新梢葉の寄生は7月から確認され7～8月は発生ほ場割合が高かった（図3-79）。	夏季の高温がハダニ類の増殖に好適であったことに加え、増殖した時期がモモの収穫期間と重なったこともあり、一部では適期防除ができなかったと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	シンクイムシ類	平年：やや早 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	ナシヒメシンクイ・モモシンクイガのフェロモントラップ誘殺状況については、リンゴのシンクイムシ類を参照（図3-61、図3-62）。モモノゴマダラノメイガのフェロモントラップへの誘殺は、5月4半旬から確認され、例年より誘殺数が多かった（図3-80）。 シンクイムシ類による果実被害は確認されなかったが、晩生種でナシヒメシンクイによる被害が発生したとの情報があった。 ナシヒメシンクイによる新梢の被害は、7月から確認され、発生ほ場割合は、平年より高く推移した（図3-81）。5月から新梢・果実での被害が確認された。	適期防除の実施、複合交信かく乱剤の導入により発生が抑えられていると考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	ハマキムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	フェロモントラップ誘殺状況については、リンゴのハマキムシ類を参照（図3-68）。 新梢及び果実被害は、確認されなかった。	適期防除の実施、複合交信攪乱剤の導入により発生が抑えられていると考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	コスカシバ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	フェロモントラップへの誘殺は、確認されなかった。 主幹における羽化殻数は、平年よりやや少なかった（図3-82）。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
モ モ	モモハモグリガ	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	前年からの越冬量は、平年より少なかった（図 3- 83）。 フェロモントラップにおける誘殺は 4 月 6 半旬から確認されたが、5 月からは複合交信かく乱剤の設置もあり、ほぼ見られなくなり、9 月下旬頃に発生ピークがみられた（図 3- 84）。 新梢葉の被害は 5 月下旬から確認され、発生ほ場割合は平年よりやや高く推移した（図 3- 85）。	収穫までは適期防除が実施されたと考えられる。	各地方版防除暦に基づき、県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	カイガラムシ類	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：やや多	側枝寄生発生ほ場割合は平年よりやや多く推移し（図 3- 86）、果実被害も確認された。	ウメシロカイガラムシについては、各世代の発生時期が前進し、年間の発生回数が 3 回となったことが大きな要因と考えられる（調査研究参照）。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	新梢の寄生は、確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
ナ シ	黒星病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	5 月の果そう基部での発生ほ場割合は、平年より低かった（図 3- 87）。一方で、果実の果面での発生が複数確認された。 新梢葉での発生は 6 月下旬に確認され、平年よりやや多かった。7 月以降の発生ほ場割合は、平年並～少なく推移した（図 3- 89）。 果実での発生は 6 月下旬に確認され、平年よりやや多かった。7 月以降の発生ほ場割合は、平年並～少なく推移した（図 3- 88）。	果そう基部病斑の発生が少ない理由は、秋期防除の徹底が考えられた。 果面での発生が多い要因としては、4 月 8～9 日の降雨時に子のう胞子の飛散が確認されたこと、当該時期が花卉露出始期頃で花托の露出があったため、当該時期の感染の可能性が考えられた。 5 月のまとまった降雨により、本病の感染危険度が平年より高かったことから、6 月の発生が平年より多かったと考えられた。6 月以降、防除は適期に実施され、大きな被害にはならなかったと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。 病害虫防除情報（6 月 18 日）を発表し、発病部位の除去、的確な薬剤防除の実施を呼びかけた。 いわき地方や県南地方では、5 月頃の多発生を受けて、特別散布などの対策が実施され、収穫時の発生は平年並程度であった。
	輪紋病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	発生は、確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	赤星病	平年：並 前年：－	平年：並 前年：－	発生は、確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
ナ シ	ハダニ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	新梢葉の寄生ほ場割合は、県北では 7 月下旬に確認され、8 月下旬は平年より多く、その後は少なく推移した。県中・県南では 8 月下旬に確認され、平年並に推移した。浜通りでは 7 月下旬から確認され、7 月は平年より多く、8 月以降は平年並に推移した（図 3- 90）。 優占種は、中通りではナミハダニ、浜通りではクワオオハダニであった（図 3- 91、図 3- 92）。	夏季が高温となり、ハダニ類の増殖に好適であったが、適期防除が実施され、平年並の発生となったと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	シンクイムシ類	平年：やや早 前年：並	平年：やや多 前年：並	モモシンクイガのフェロモントラップ誘殺状況については、リンゴのシンクイムシ類を参照（図 3- 63、図 3- 64）。ナシヒメシンクイによる果実被害は 8 月下旬から確認され、平年よりやや多かった（図 3- 93）。 モモシンクイガによる果実被害は、確認されなかった。	ナシヒメシンクイについては、県北地方では、モモの新梢の芯折れが平年より多かった点が発生要因として挙げられた。また、フェロモントラップによる誘殺状況から、越冬世代の誘殺盛期が平年より早く、9 月に第 4 世代成虫の発生が確認されたことから、晩生種では第 5 世代幼虫による被害であったと考えられる。	病虫害防除情報（7 月、8 月）を発表し、的確な薬剤防除の実施を呼びかけた。 病虫害防除情報に基づき、県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	ハマキムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	フェロモントラップ誘殺状況については、リンゴのハマキムシ類を参照（図 3- 68）。 巡回調査において新梢被害及び果実被害は、確認されなかった。	適期防除の実施、複合交信攪乱剤の導入により発生が抑えられていると考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	6 月下旬から新梢寄生が確認された。発生ほ場割合は、平年より低く推移した（図 3- 94）。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	カイガラムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	ナシマルカイガラムシによる果実被害は確認されず、発生ほ場割合は平年並であった（図 3- 95）。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
ナ シ	ヒメボクトウ	平年：一 前年：並	平年：やや少 前年：並	被害樹は、確認されなかった。	適期防除が実施され、発生ほ場では耕種の防除も実施されていると考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
	ニセナシ サビダニ	例年：並 前年：並	例年：やや少 前年：やや少	新梢の被害は、6月下旬から確認された。発生ほ場割合は、例年よりやや少なかった（図3-96）。	2018年度から県防除指針に防除対策が記載されており、適切に防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
カキ	炭疽病	例年：－ 前年：－	例年：並 前年：並	例年同様、発生は確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	円星落葉病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	新梢葉での発生ほ場割合は、平年並であった（図3-97）。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	アザミウマ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	チャノキイロアザミウマによる果実被害発生ほ場割合は、平年並であった（図3-98）。カキクダアザミウマによる果実被害は、確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	カイガラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	果実被害は、確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	ハマキムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	果実被害は、確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	カキノヘタムシガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	平年同様、果実被害は確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
ブドウ	晩腐病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	収穫直前の調査で、発生が確認されたほ場があった。	適期防除及び袋掛けや巻きひげ除去など耕種的対策も行われていると考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	花・果房被害は確認されなかったが、一部貯蔵果実において本病による障害が確認された。	適期防除が実施されたと考えられるが、防除剤や散布タイミングの再検討が必要と考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	べと病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	新梢葉及び花・果房被害は、確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
	黒とう病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	新梢葉及び花・果房被害は、確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
	チャノキイロアザミウマ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	花・果房被害は、確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われた。
果樹共通	果樹カメムシ類	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	フェロモントラップへの誘殺は4月5半旬から確認され、すべての地点で誘殺数は平年より多く推移した（図3-99～図3-106）。 9～10月に誘殺数が増加した福島市飯坂町、国見町、鏡石町の誘殺種の主体は、ツヤアオカメムシであった。 リンゴの果実被害は、7月下旬に確認され、その後発生ほ場割合は、平年より高く推移した（図3-107）。 ナシの果実被害は、6月下旬から確認され、8～9月の発生ほ場割合は、平年より多かった（図3-108）。 モモは、平年値が「0」であったが、5、7月に果実被害が確認された（図3-109）	昨年のスギ花粉の飛散は多かったため、球果量が多くなり、カメムシ類が増殖し本年の越冬世代が多くなったと考えられる。また、本年は春から気温が高く経過し、カメムシ類の活動開始が早まったため、調査開始当初から誘殺が多かった地点があったと考えられる。 本年はスギ花粉の飛散量が例年より少なく、球果も少なくなったため、餌不足から新世代成虫が果樹園に飛来したと考えられる。 カメムシ類に対して防除の強化が図られていたが、本年は気温が高く経過し、夜温も高かったことから、地域やほ場によっては防除を行っても断続的に飛来があり、被害が発生したケースもあったと考えられる。	県防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われたが、追加散布やカメムシに効果のある剤への変更など対策が取られた。 初期から果樹園への飛来があったことから、5月9日及び6月4日に防除情報を発表し、越冬世代の防除を喚起した。また7月30日には注意報を発表し、新世代の防除を喚起した。

ア リンゴ

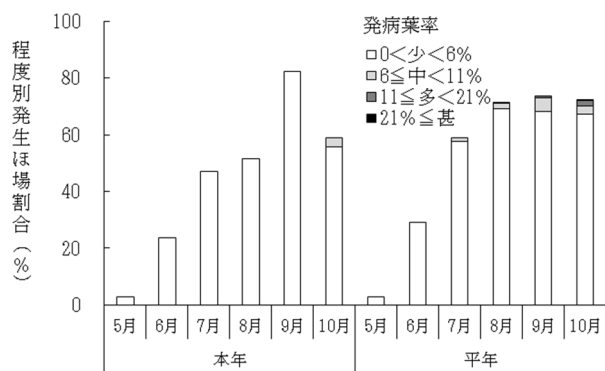


図 3- 51 斑点落葉病の新梢葉での発生状況（県全体）

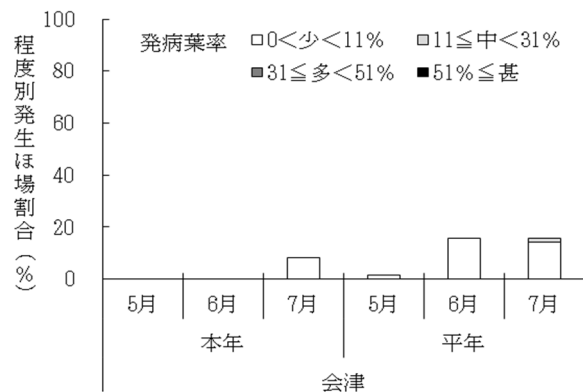


図 3- 52 黒星病の新梢葉での発生状況（会津）

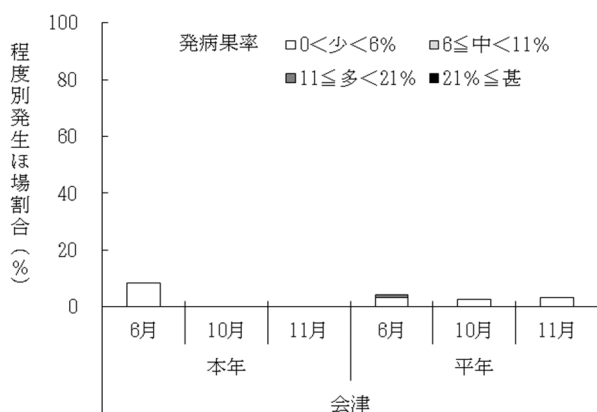


図 3- 53 黒星病の果実での発生状況（会津）

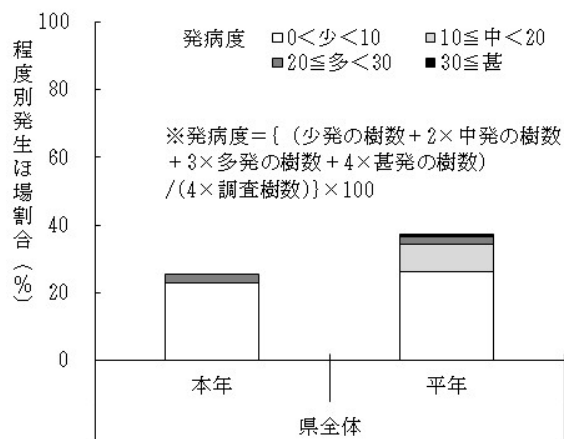


図 3- 54 腐らん病の発生状況（県全体）

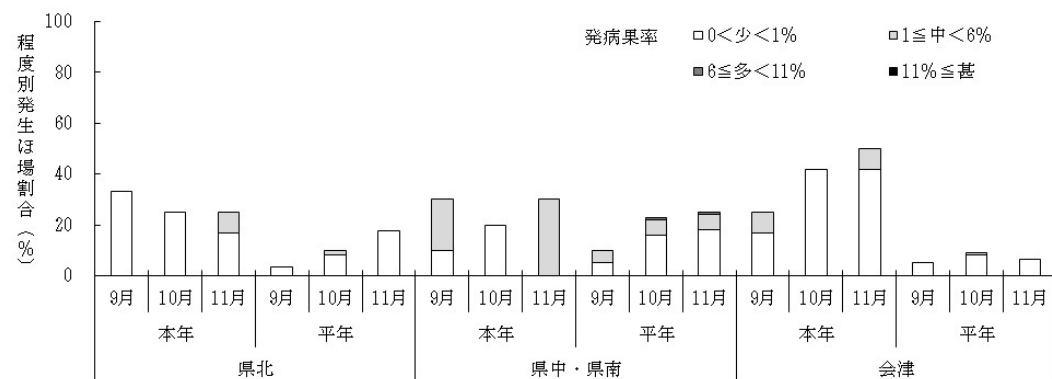


図 3- 55 輪紋病の果実での発生状況（県北・県中・県南・会津）

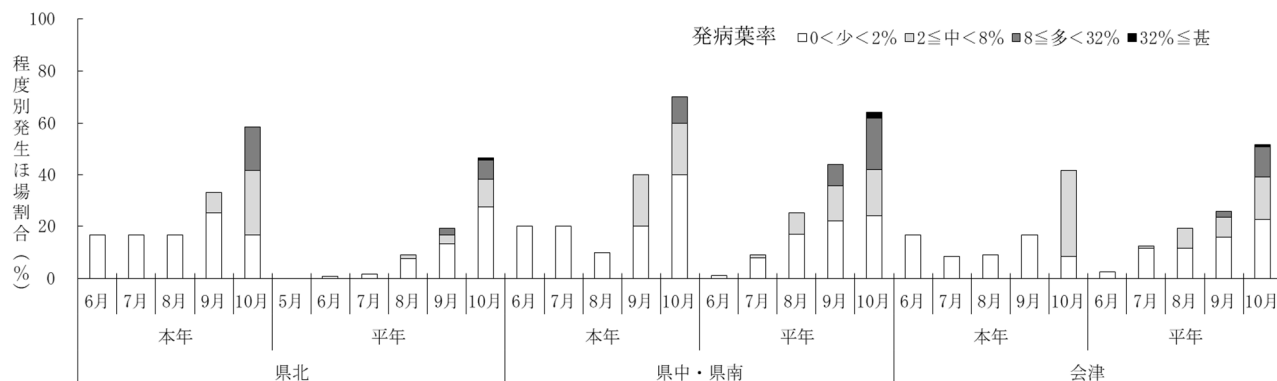


図 3- 56 褐斑病の新梢葉での発生状況（県北・県中・県南・会津）

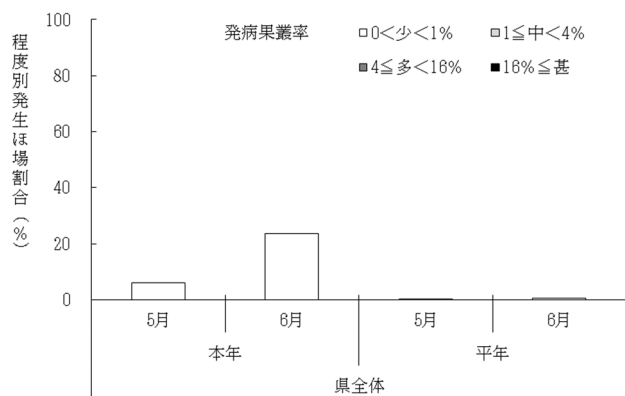


図 3- 57 褐斑病の果そう葉での発生状況(県全体)

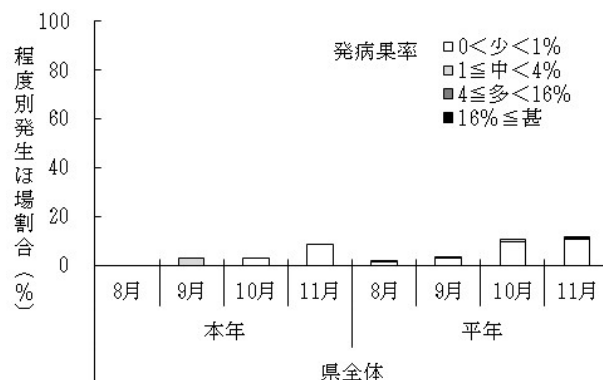


図 3- 58 炭疽病の果実での発生状況(県全体)

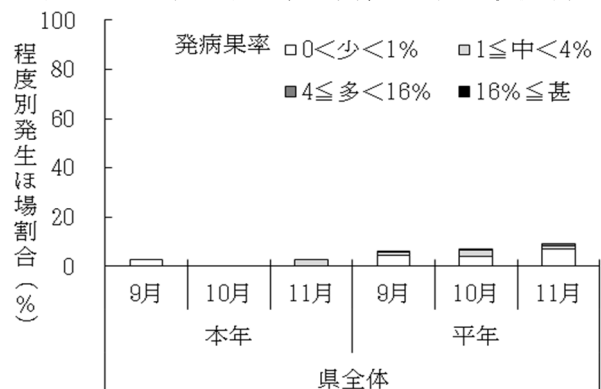


図 3- 59 すず点病の果実での発生状況(県全体)

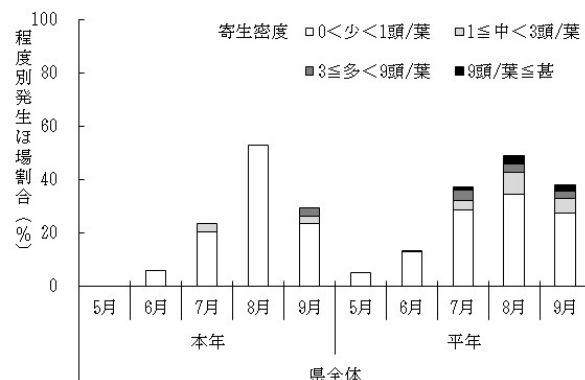


図 3- 60 ハダニ類の新梢葉の寄生状況(県全体)

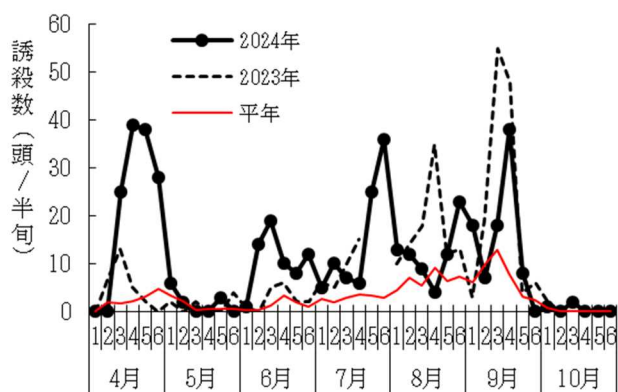


図 3- 61 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺状況(鏡石町)

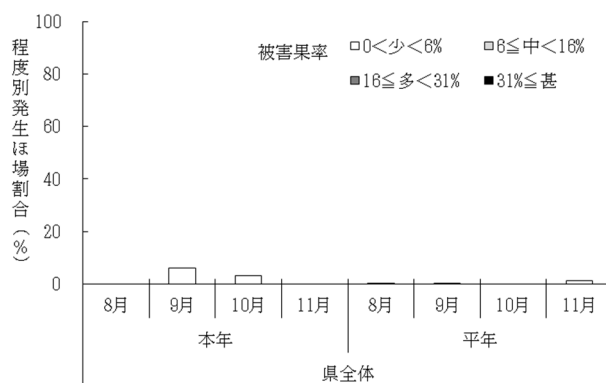


図 3- 62 ナシヒメシンクイによる果実の被害状況(県全体)

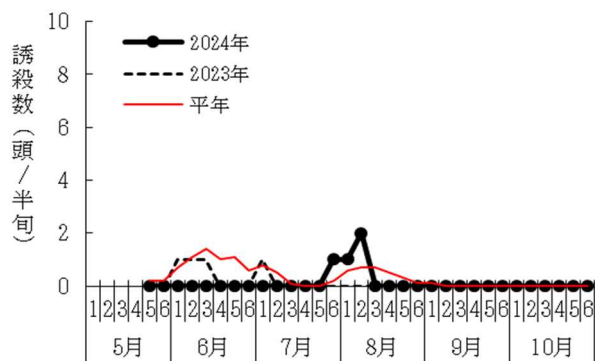


図 3- 63 フェロモントラップによるモモシンクイガの誘殺状況(会津若松市)

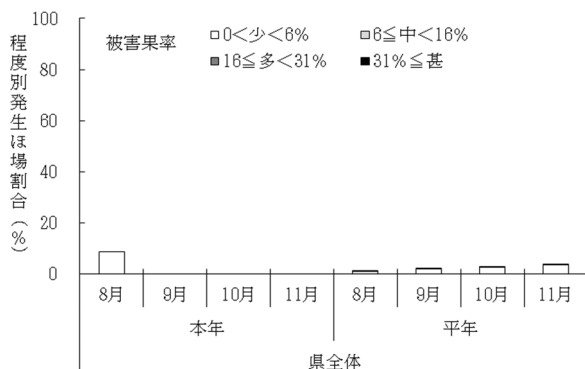


図 3- 64 モモシンクイガによる果実の被害状況(県全体)

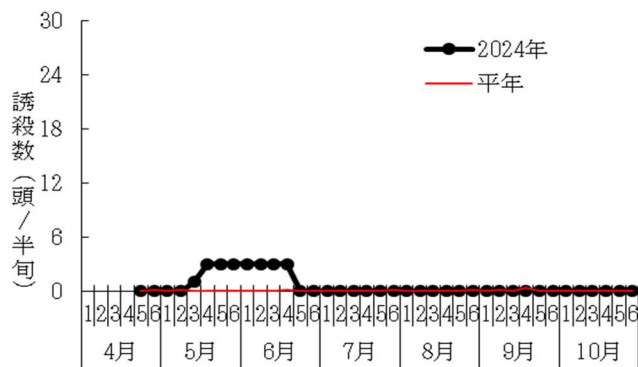


図 3-65 フェロモントラップによるスモモヒメシンクイの誘殺状況（伊達市）

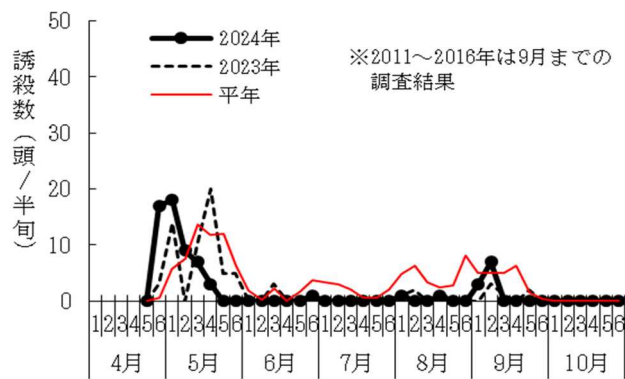


図 3-66 フェロモントラップによるスモモヒメシンクイの誘殺状況（会津美里町）

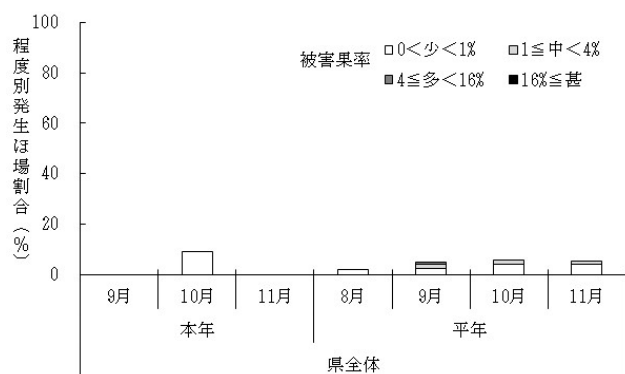


図 3-67 スモモヒメシンクイによる果実の被害状況（県全体）

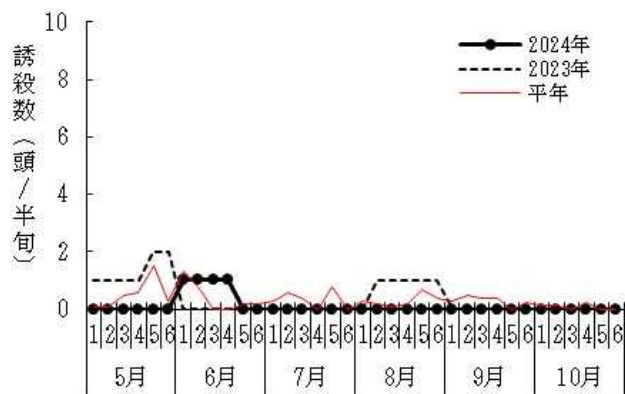


図 3-68 フェロモントラップによるリンゴコカクモンハマキの誘殺状況（須賀川市）

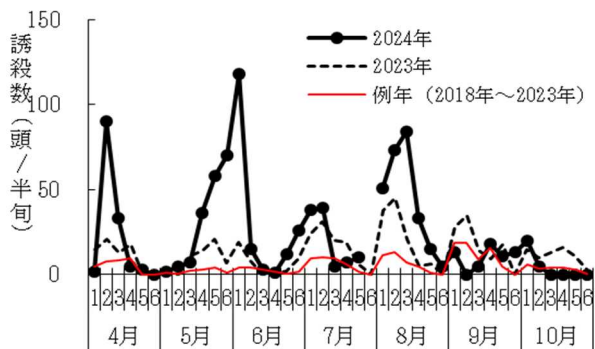


図 3-69 フェロモントラップによるキンモンホソガの誘殺状況（福島市）

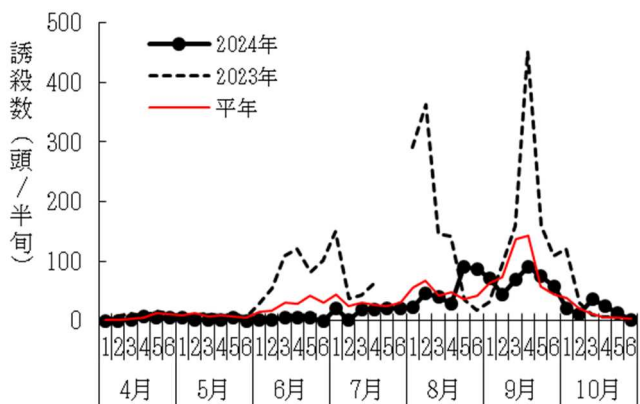


図 3-70 フェロモントラップによるキンモンホソガの誘殺状況（鏡石町）

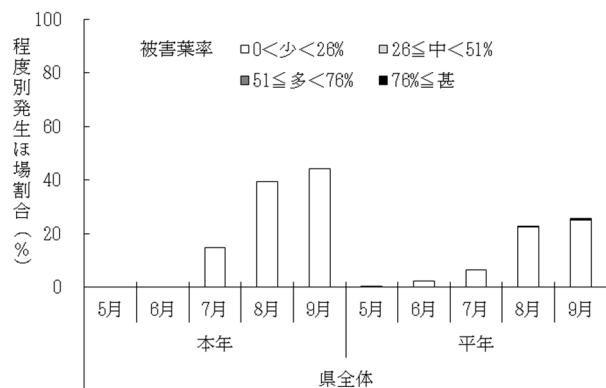


図 3-71 キンモンホソガによる新梢葉の被害状況（県全体）

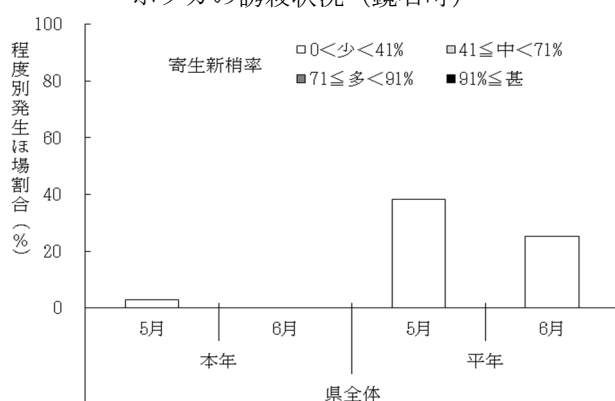


図 3-72 アブラムシ類による新梢の被害状況（県全体）

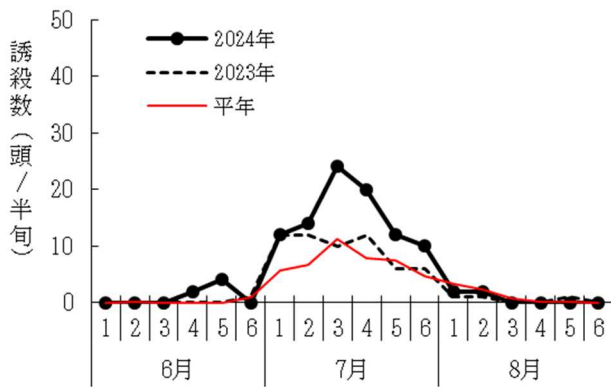


図 3- 73 フェロモントラップによるヒメボクトウの誘殺状況 (須賀川市)

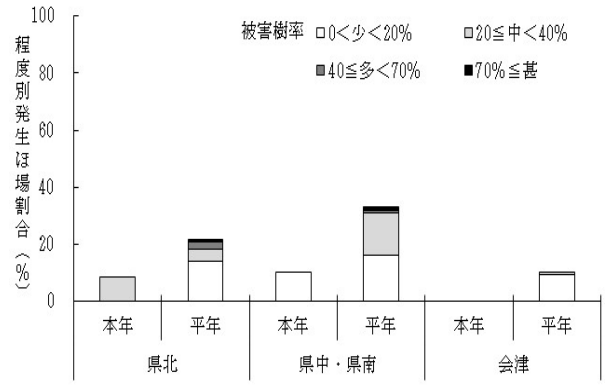


図 3- 74 ヒメボクトウによる樹体の被害状況 (県北・県中・県南・会津)

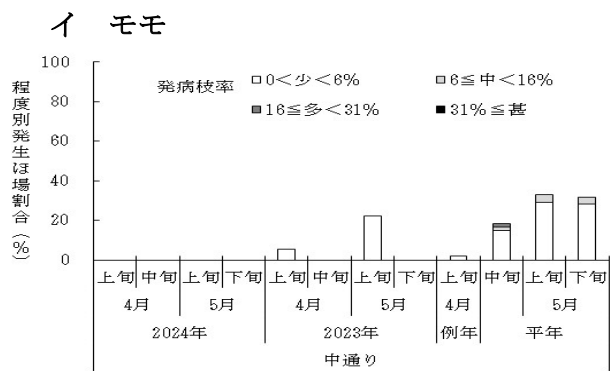


図 3- 75 セン孔細菌病の春型枝病斑の発生状況 (中通り)

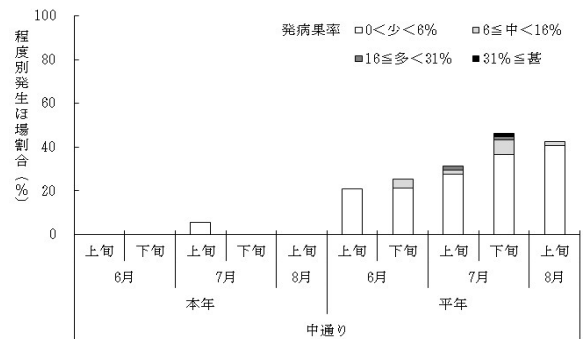


図 3- 77 セン孔細菌病の果実での発生状況 (中通り)

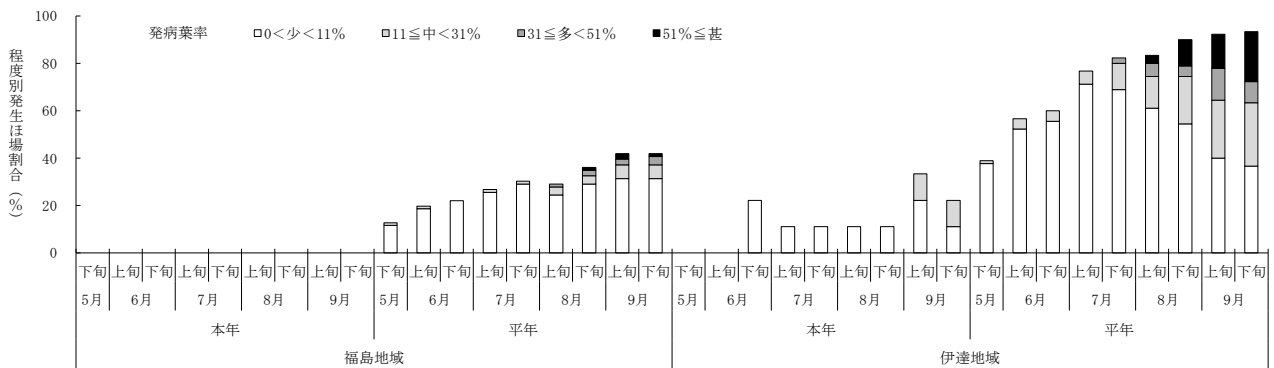


図 3- 76 セン孔細菌病の新梢葉での発生状況 (福島地域・伊達地域)

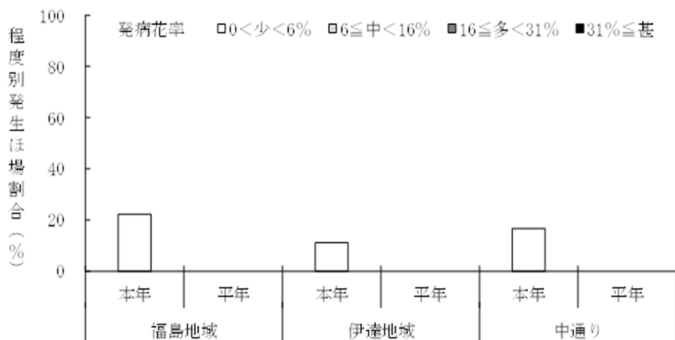


図 3- 78 モモ灰星病の花腐れの発生状況 (中通り)

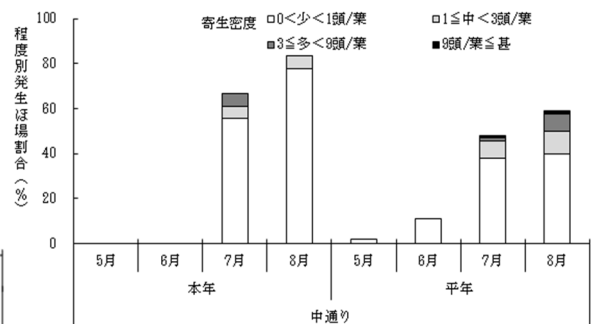


図 3- 79 ハダニ類による新梢葉の寄生状況 (中通り)

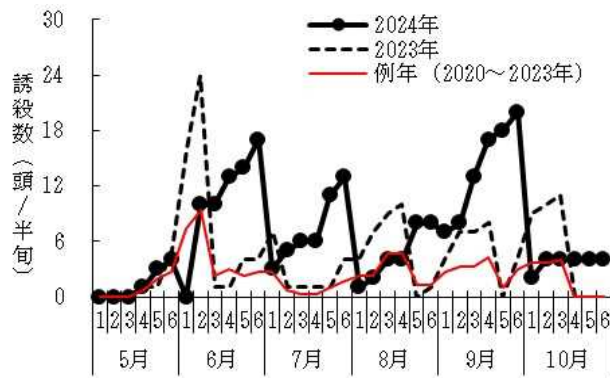


図 3- 80 フェロモントラップによるモノゴマダラノメイガの誘殺状況（福島市）

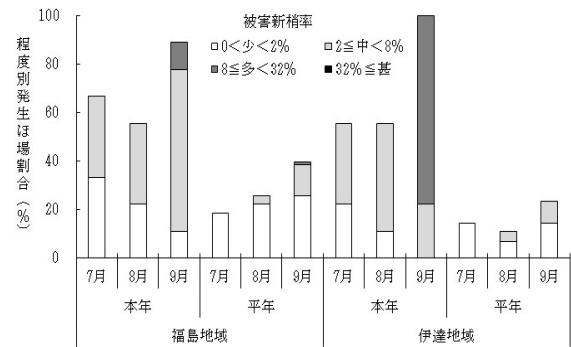


図 3- 81 ナシヒメシンクイによる新梢被害状況（福島地域・伊達地域）

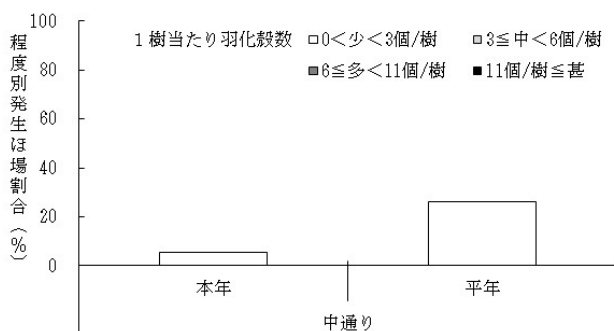


図 3- 82 コスカシバの寄生状況（中通り）

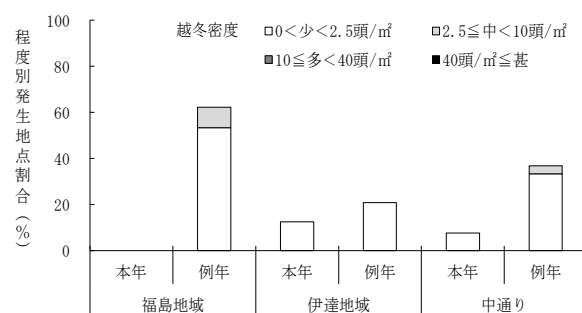


図 3- 83 モモハモグリガの越冬状況（2023 年 12 月調査、中通り）

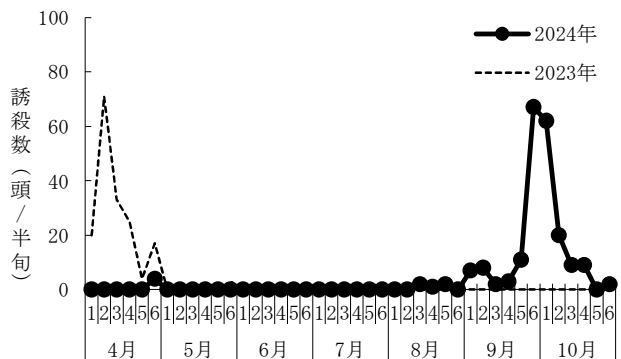


図 3- 84 フェロモントラップによるモモハモグリガの誘殺状況（伊達市）

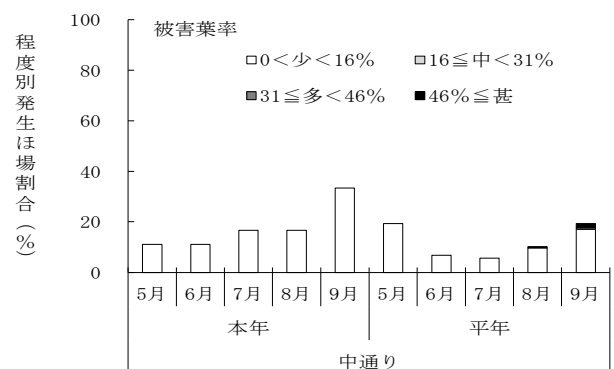


図 3- 85 モモハモグリガによる新梢葉の被害状況（中通り）

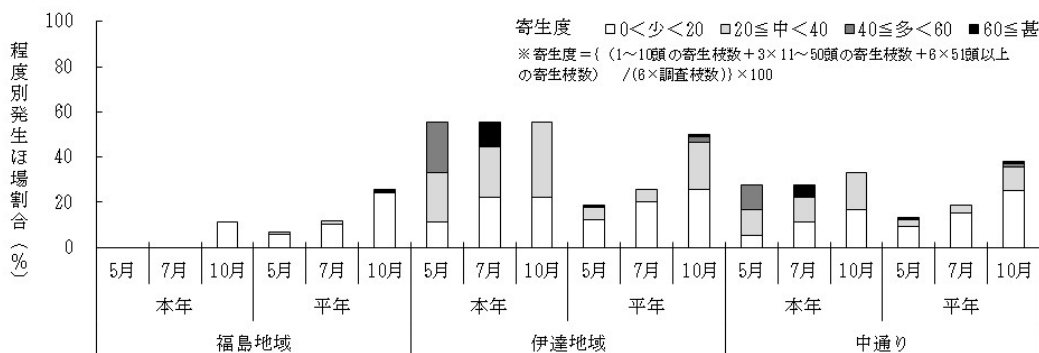


図 3- 86 シロカイガラムシ類の側枝の寄生状況（中通り）

ウ ナシ

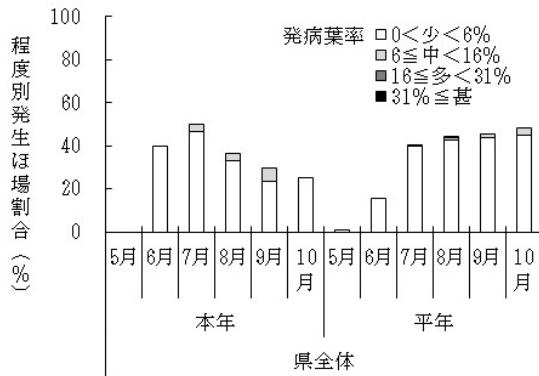


図 3-87 黒星病の果そうでの発生状況（県全体）

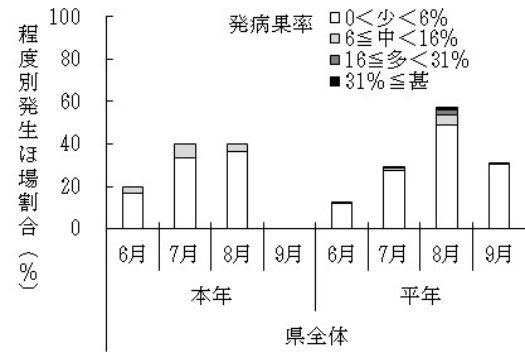


図 3- 88 黒星病の果実での発生状況（県全体）

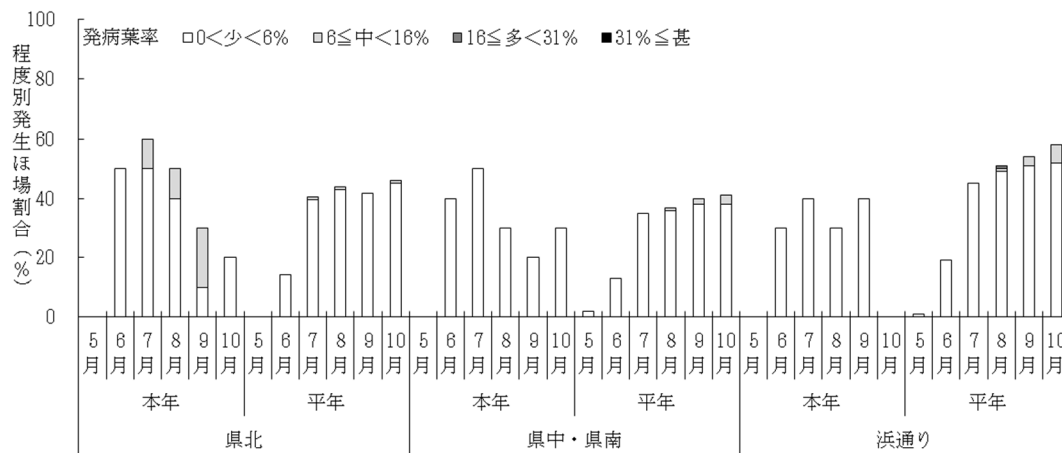


図 3- 89 黒星病の新梢葉での発生状況（県北・県中・県南・浜通り）

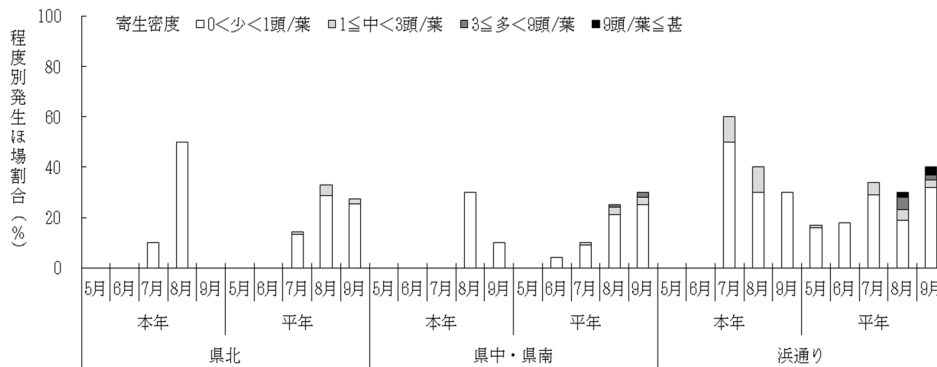


図 3- 90 ハダニ類の新梢葉の寄生状況（県北・県中・県南・浜通り）

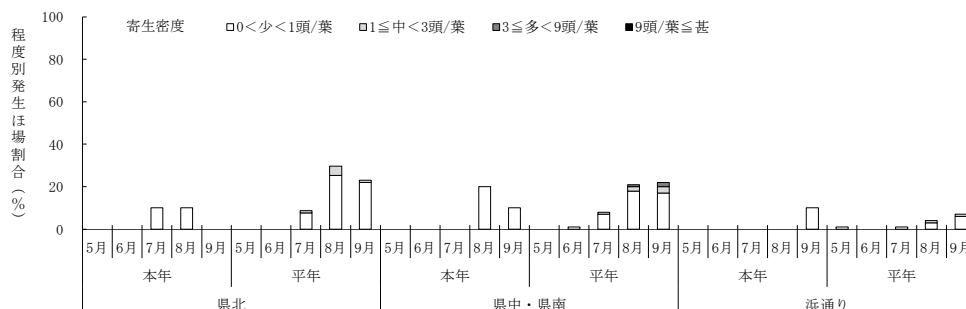


図 3- 91 ナミハダニの新梢葉の寄生状況（県北・県中・県南・浜通り）

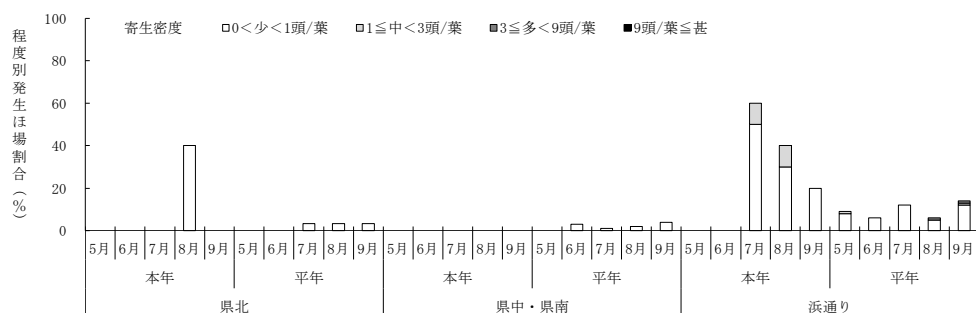


図 3- 92 クワオオハダニの新梢葉の寄生状況（県北・県中・県南・浜通り）

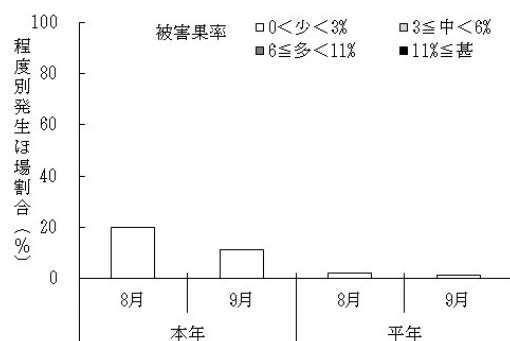


図 3-93 ナシヒメシンクイによる果実被害状況（県全体）

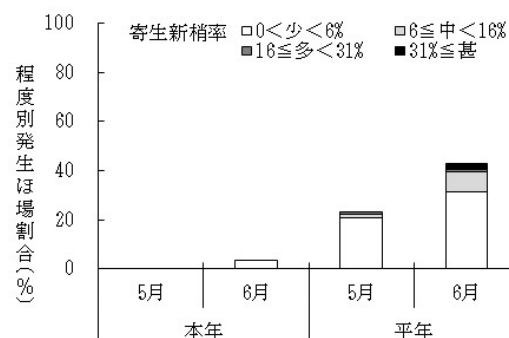


図 3-94 アブラムシ類による新梢寄生状況（県全体）

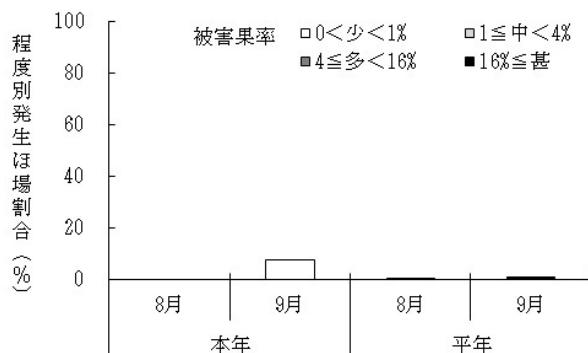


図 3- 95 ナシマルカイガラムシによる果実被害状況（県全体）



図 3-96 ニセナシサビダニによる新梢の被害状況（県全体）

エ カキ（調査時期：10月上旬）

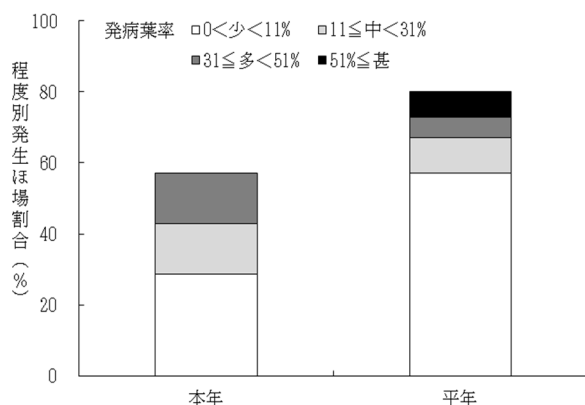


図 3- 97 円星落葉病の新梢葉での発生状況（会津地域）

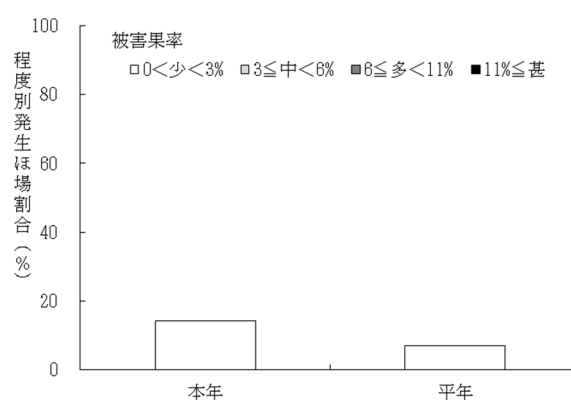


図 3- 98 チャノキイロアザミウマによる果実被害（会津地域）

オ 果樹共通

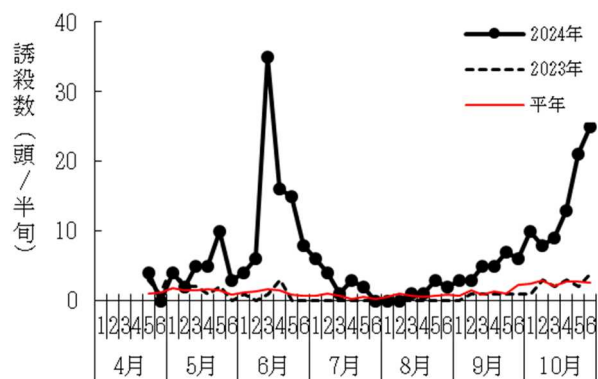


図 3- 99 フェロモントラップによる果樹
カメムシ類 の誘殺状況 (福島市大笹生)

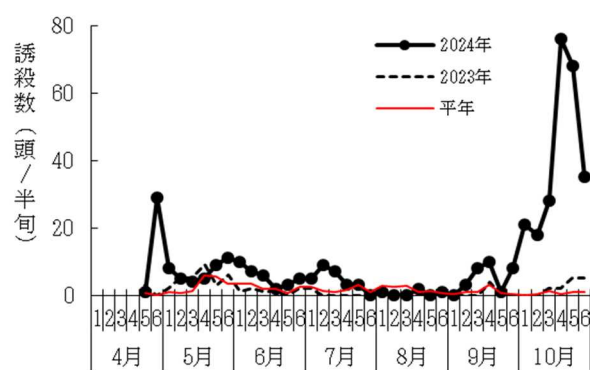


図 3- 100 フェロモントラップによる果樹
カメムシ類 の誘殺状況 (国見町)

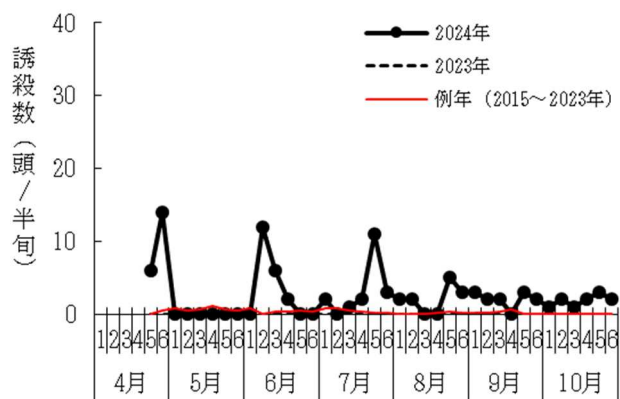


図 3- 101 フェロモントラップによる果樹
カメムシ類の誘殺状況 (郡山市)

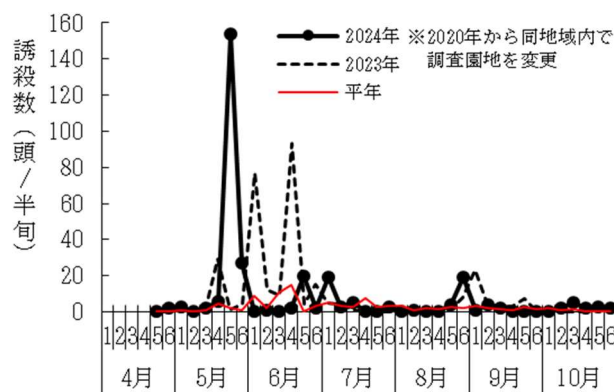


図 3- 102 フェロモントラップによる果樹
カメムシ類の誘殺状況 (相馬市)

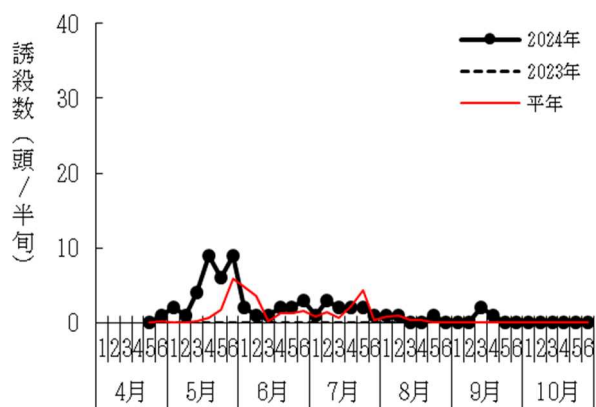


図 3- 103 フェロモントラップによる果樹
カメムシ類の誘殺状況 (会津坂下町)

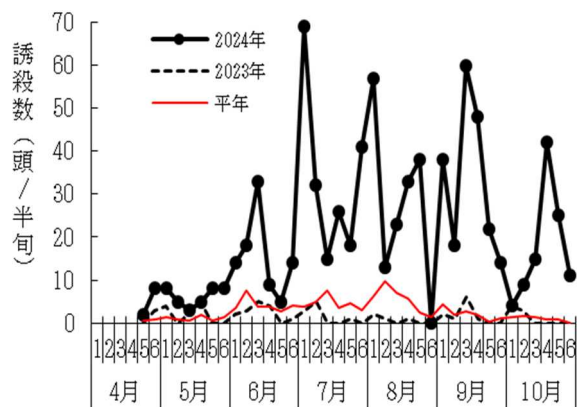


図 3- 104 フェロモントラップによる果樹
カメムシ類の誘殺状況 (鏡石町)

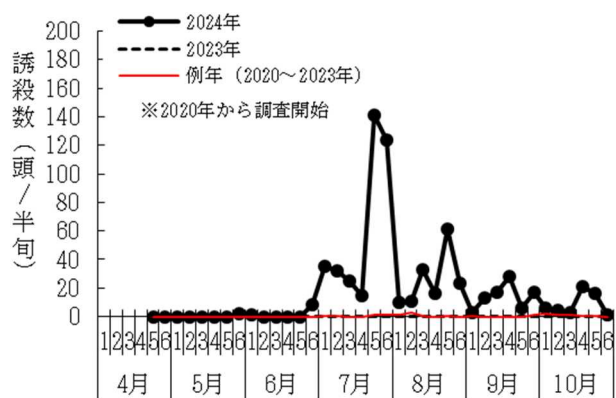


図 3- 105 フェロモントラップによる果樹カメムシ類の誘殺状況（いわき市）

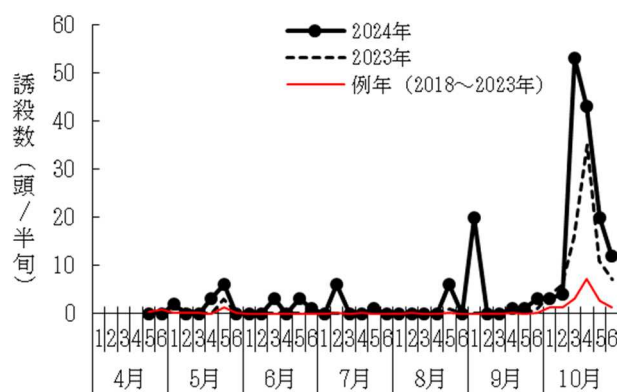


図 3- 106 フェロモントラップによる果樹カメムシ類の誘殺状況（福島市飯坂町）

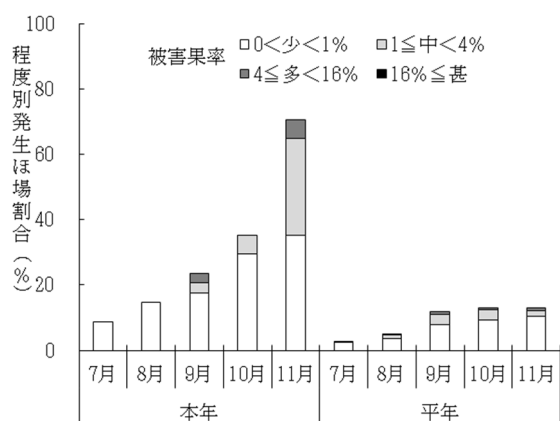


図 3-107 果樹カメムシ類による果実被害（リンゴ、県全体）

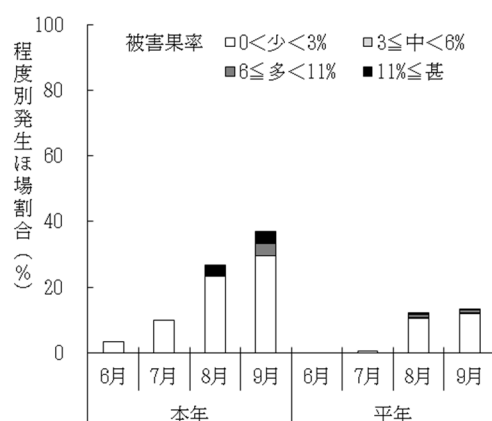


図 3-108 果樹カメムシ類による果実被害（ナシ、県全体）

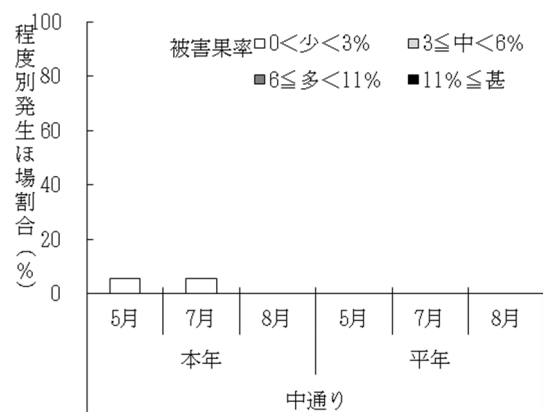


図 3-109 果樹カメムシ類による果実被害（モモ、県全体）

(3) 野菜・花き

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋 トマト	疫病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	発生は、確認されなかった。	本県では施設栽培の普及により発生が低く抑えられている。	発病前から薬剤防除が徹底されている。
	灰色かび病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	7月から発生が確認され、発生ほ場割合は、平年並に推移した。8月以降、発病程度の高いほ場が多かった(図 3-110)。	8月の降水量が多く、栽培期間を通して平均気温が高い日が続いたことが要因として考えられる。 また、一部地域では、目合いの細かい防虫ネットの導入もあり、高温障害による葉先枯れからの灰色かび病発生が助長された。	防除指針に採用されている薬剤を中心にローテーションで散布されている。
	葉かび病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	7月から発生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。9月に、発病程度の高いほ場が多かった(図 3-111)。	8月下旬の降水量が多く、栽培期間を通して平均気温が高い日が続いたことが要因として考えられる。 一部で、すすかび病との混発が確認された。	抵抗性品種が導入されている。発病前から定期的に薬剤が散布されている。
	すすかび病	平年：並 前年：やや早	平年：並 前年：やや多	7月から発生を確認が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した(図 3-112)。	梅雨期の降雨及び高温によって発病が助長されたと考えられる。	発病前から定期的に薬剤が散布されている。
	黄化えそ病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	発生は、確認されなかった。	アザミウマ類の防除が徹底され、被害は低く抑えられている。	薬剤防除の他、防虫ネットの設置など、アザミウマ類の防除が徹底されている。
	青枯病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	一部のほ場で発生が確認された。	抵抗性台木の導入により発生が抑えられている。	抵抗性台木が導入されている。
	かいよう病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	8月から常発ほ場を中心に発生が散見された。	常発ほ場で確認されており、不十分な残渣処理や資材消毒による前作からの持ち越しが考えられる。	抵抗性台木の導入や管理作業が徹底されている。
	萎凋病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	発生は、確認されなかった。	抵抗性台木の導入により発生が抑えられているが、一部で抵抗性を打破する系統が発生している。	抵抗性台木が導入されている。
	半身萎凋病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	発生は、確認されなかった。	抵抗性台木の導入により、本県での発生は低く抑えられている。	抵抗性台木が導入されている。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋 トマト	アブラムシ類	平年：早 前年：並	平年：並 前年：やや少	5月から寄生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した（図 3-113）。	春先の温暖な気候により、成虫の飛来が早まったが定植時の粒剤施用や適期薬剤散布によりその後の発生推移を抑えられたと考えられる。	定植時の粒剤施用及び発生時に薬剤散布が行われている。
	コナジラミ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	6月から寄生が確認され、発生ほ場割合は平年よりやや高く推移した。巡回調査ほ場の複数地点で、黄化葉巻病が確認された（図 3-114）。	調査ほ場における寄生種は、オンシツコナジラミ及びタバココナジラミの混発であった。栽培期間を通して、平均気温が高い日が続いたことが要因と考えられる。	発生初期から薬剤のローテーション散布が行われている。防虫ネットの設置、薬剤散布及びラノーテープの組み合わせで防除が行われている。
	ハモグリバエ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや多	7月から寄生が確認されたが、その後の発生ほ場割合は平年並に推移した（図 3-115）。	一部で発生程度が高いほ場が確認されたが、防除により発生は抑えられていた。周年栽培地帯で発生が多い傾向にある。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	アザミウマ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	7月から被害果（白ぶくれ果）の発生が確認され、発生ほ場割合は平年よりやや低く推移した。	適期防除の実施及び防虫ネットの設置が進んでいることから、発生が抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。防虫ネットの設置により成虫の侵入防止を実施する生産者が増えている。
	オオタバコガ	平年：並 前年：並	平年：多 前年：多	フェロモントラップの発生ピークは、平年より早い7月に確認された。7月の被害果の発生ほ場割合は平年より多かった（図 3-116）。	春先からの高温及び少雨による影響で多発したものと推察される。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。防虫ネットの設置により成虫の侵入防止を行っている。
	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：多 前年：やや多	寄生は、確認されなかった。フェロモントラップの発生ピークは、9月から10月にかけて確認され、誘殺頭数が平年を大きく上回った。	防虫ネットの設置が進んでいることから、被害は抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。防虫ネットの設置により成虫の侵入防止を行っている。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋 キュウリ	べと病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	6月から発生が確認された。発生ほ場割合は、平年並に推移した（図3-117）。	梅雨時期の多湿とゲリラ豪雨による跳ね返りの影響により発生が助長された。また、降雨により防除時期を逸した場合も発生が助長されている。	防除指針に採用されている薬剤を中心にローテーションで散布されている。
	うどんこ病	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	7月から発生が確認された。発生ほ場割合は、平年並に推移した（図3-118）。	複合耐病性品種への作付が多くなっていることが要因であると考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心にローテーションで散布されている。
	褐斑病	平年：やや早 前年：早	平年：やや少 前年：並	7月に発生が確認された。発生ほ場割合は、やや低く推移した（図3-119）。	うどんこ病と同様、複合耐病性品種の作付が多くなっていることが要因であると考えられる。	予防散布を基本に薬剤散布が行われている。また、罹病葉の摘葉も行われている。
	炭疽病	平年：並 前年：やや早	平年：並 前年：並	7月から発生が確認された。発生ほ場割合は、平年並に推移した（図3-120）。	梅雨時期の多湿とゲリラ豪雨による跳ね返りの影響により発生が助長された。また、降雨により防除時期を逸した場合も発生が助長されている。	予防散布を基本に薬剤散布が行われている。また、罹病葉の摘葉も行われている。
	斑点細菌病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	6月に発生が確認され、発生ほ場割合は平年より高かったが、その後は平年並に推移した。	適期防除が実施されたと考えられる。	予防散布を基本に防除が行われている。また、罹病葉の摘除も行われている。
	黒星病	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	6月に発生が確認されたが、その後の発生は確認されなかった。	初期防除により発生は平年並に抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心にローテーション散布が行われている。
	つる枯病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	7月から発生が確認された。7月下旬の降水量が多かったことから、発生ほ場割合は平年より高く推移した（図3-121）。	梅雨時期の多湿とゲリラ豪雨による跳ね返りの影響により発生が助長された。また、降雨により防除時期を逸した場合も発生が助長されている。	防除指針に採用されている薬剤を中心にローテーション散布が行われている。
	モザイク病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	6月から発生が確認され、発生ほ場割合は平年より高かったが、その後は平年並に推移した（図3-122）。	春先の温暖な気候により、成虫の飛来が早まったが、定植時の粒剤処理が徹底されており、媒介虫であるアブラムシ類の発生量が平年並に推移したため、本病の発生が抑制された。一部で弱毒ウイルス接種苗も利用されている。	防除指針に採用されている薬剤を中心に、アブラムシ類の防除が行われている。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋 キュウリ	アブラムシ類	平年：並 前年：やや遅	平年：並 前年：並	6月から寄生が確認された。発生ほ場割合は、平年並に推移した（図3-123）。	春先の温暖な気候により、成虫の飛来が早まったが、定植時の粒剤施用や適期薬剤散布により、その後の発生推移を抑えられたと考えられる。	育苗期の薬剤処理や定植時の粒剤施用が励行され、発生時には薬剤散布が行われている。
	アザミウマ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	6月から寄生が確認された。夏場猛暑日が続いたため、発生ほ場割合は、平年よりやや高く推移した。	春先の温暖な気候により、成虫の飛来が早まり、初期発生が多かった。アブラムシ類との同時防除が実施されている。ほ場周辺からの飛込が多い。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	コナジラミ類	平年：並 前年：やや遅	平年：並 前年：やや少	6月から寄生が確認された。発生ほ場割合は、平年並に推移した。	他害虫との同時防除が実施され、ウイルス病発生等の大きな被害には至っていないと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心にローテーション散布が行われている。
	ハダニ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	6月から寄生が確認された。7月の降水量が多かったことから、7月の発生ほ場割合は平年より低かった（図3-124）。	7月の降水量は多かったが、8月は気温が高い日が続いたため、発生が助長されたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心にローテーションで散布されている。
	ワタヘリクロノメイガ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	8月から寄生が確認された。発生ほ場割合は、平年並に推移した。	近年、露地ほ場では少発傾向が続いている。	本種を対象とした防除はほとんど行われていない。
イチゴ (2023 秋作～ 2024 春作)	土壌病害 (炭疽病、萎黄病、萎凋病)	平年：並 前年：並	平年：多 前年：やや多	育苗床からの持ち込み及び定植直後から発生が確認され、補植しているほ場が見受けられた。10月に一部発病程度の高いほ場も見られたが、その後の発生ほ場割合は平年並に推移した（図3-125）。	親株の高温条件下の管理、育苗中の灌水作業による水の跳ね上がりで発生が広がったと考えられる。しかし、罹病株の速やかな除去による適正な対応により、被害軽減につながった。	前年発生ほ場では土壌消毒や、育苗時の底面吸水等を実施している。発病株は随時抜き取り処分している。
	灰色かび病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	果実被害は、2月から確認された。発生ほ場割合は、平年並に推移した（図3-126）。	適期防除の実施により、被害発生が抑えられた。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。
	うどんこ病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	1月の発生ほ場割合は、平年よりやや少なかったものの、その後は平年並に推移した。果実被害は、1月から確認された。	育苗期からの持ち込みによる発病が見られたが、以降は適切に防除されたと考えられる。また、UV-Bランプの導入が進んでいる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。一部でUV-Bランプ導入による防除が行われている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
イチゴ (2022 秋作～ 2023 春作)	アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	定植直後から寄生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移したが、春先の温暖な気候もあり、3月は平年よりやや高かった（図 3-127）。	夏季、秋季の高温により、アブラムシ類の活動が活発化し、発生量が多くなったと考えられる。	定植時の粒剤施用及び発生時に薬剤散布が行われている。
	ハダニ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	主要寄生種は、ナミハダニだった。1月まで発生ほ場割合は平年並に推移したが、春先の温暖な気候もあり、2月以降は発生程度の高いほ場が見られた（図 3-128）。	苗からの持ち込みによる発生が見られた。適期防除により寄生密度を抑えられた。従来効果の高かった薬剤に対して感受性の低下した個体群が一部で確認されている。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。ミヤコカブリダニ、チリカブリダニによる生物的防除導入ほ場が多くなっている。
	アザミウマ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	主要寄生種は、ヒラズハナアザミウマとミカンキイロアザミウマだった。花での寄生は1月から確認され、発生ほ場割合は平年並に推移したが、春先の温暖な気候もあり、5月は発生程度の高いほ場が見られた（図 3-129）。	春季に発生量が増加しており、ハウス開放に伴い成虫が飛来しているものと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。
	コナジラミ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	定植直後から寄生が確認された。発生ほ場割合は、平年よりやや低く推移した（図 3-130）。	苗からの持ち込み、秋期の飛来により初期発生が確認されたが、その後は適切な防除により、発生は抑制されたと考えられる。一部ですす病が発生しているほ場が見られた。	調査ほ場の約7割でラノエテープが導入されており、薬剤防除も適切に行われた。
	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	10月から寄生が確認された。9月の誘殺数の急増に伴い、10月は発生程度の高いほ場が見られた（図 3-131）。	適期防除の実施及び防虫ネットの設置が進んでいることから、被害は抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
アスパラガス	褐斑病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：やや多	9月に発生が確認され、発生ほ場割合は前年より高かった。	7月以降の高温多湿によって、発病が助長されたと推察される。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	茎枯病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	9月に発生が確認された。（図 3-132）。	一部の雨よけ施設では、6月の豪雨により、施設内が冠水状態であった。そのため、土壌からの泥水の跳ね上がり等、水媒伝染により発生が助長されたものと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。また、施設化が進んでおり、調査ほ場（施設栽培）における発生は少ない。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
アスパラガス	斑点病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	9月に発生が確認され、発生ほ場割合は前年より高かった。	適期防除が実施されたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	アザミウマ類	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	6月から寄生が確認された（図 3-133）。	ほ場周辺からの飛込によるものと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	ハダニ類	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	8月からカンザワハダニの寄生が確認された。	適期防除が実施されたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
夏秋ナス	うどんこ病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：やや多	9月に発生が確認された（図 3-134）。一部ほ場で発病程度が高かった。	草勢が落ちた生育後半期に降水量が多かった時期があり、発生が助長されたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	すすかび病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	発生は、確認されなかった（図 3-135）。	適期防除が実施されたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	灰色かび病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：やや多	9月に発生が確認され、被害程度も高かった（図 3-136）。	草勢が落ちた生育後半期の高温乾燥条件により発生が助長されたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	半身萎凋病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	7月から発生が確認された（図 3-137）。	耐病性品種の作付けが多くなっているが、一部ほ場で発生を確認している。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	アザミウマ類	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	6月から寄生が確認された（図 3-138）。	適期防除の実施により発生が抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	アブラムシ類	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：やや少	6月の定植直後から寄生が確認され、発生ほ場割合は前年より低く推移した（図 3-139）。	春先からの高温により、成虫の飛来が早まったが定植時の粒剤施用や適期薬剤散布によりその後の発生推移を抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	タバコガ類	平年：－ 前年：やや早	平年：－ 前年：多	7月から被害が確認され、発生ほ場割合は前年より高く推移した。	春先からの高温による影響で多発したものと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。

夏秋ナス	ハダニ類	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	6 月から寄生が確認された（図 3-140）。	夏季の高温乾燥により、発生が助長されたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
夏秋ピーマン	うどんこ病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：やや少	発生は、確認されなかった（図 3-141）。	適期防除の実施により、発生が抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	疫病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	発生は、確認されなかった。	適期防除が実施されたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	炭疽病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	8 月から発生が確認された（図 3-142）。	適期防除の実施により、発生が抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	斑点病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	7 月から発生が確認された（図 3-143）。	梅雨期の降水量増加、夏季に気温がかなり高く推移したことで、草勢が低下し、発生が助長されたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	モザイク病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	6 月から発生が確認された（図 3-144）。	春先の温暖な気候により、成虫の飛来が早まったが、定植時の粒剤処理や適期薬剤散布により、その後の発生を抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	アブラムシ類	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：やや少	6 月から寄生が確認された（図 3-145）。	春先の温暖な気候により、成虫の飛来が早まったが、定植時の粒剤施用や適期薬剤散布により、その後の発生推移を抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	タバコガ類	平年：－ 前年：早	平年：－ 前年：やや多	7 月から被害が確認された。一部ほ場では、被害程度が高かった。	春先の高温による影響で多発したものと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	寄生は、確認されなかった。	適期防除の実施により、発生が抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
秋冬ネギ	黒斑病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：多	9 月から発生が確認され、発生ほ場割合は前年より高かった。	特に排水不良のほ場では、梅雨期の多湿及び高温によって発生が助長されたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	さび病	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	6 月から発生が確認された（図 3-146）。	適期防除の実施により、発生が抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。

秋冬 ネギ	葉枯病	平年：－ 前年：やや早	平年：－ 前年：やや多	6 月から発生が確認された（図 3-147）。	梅雨期に降雨が続いたことや、さび病病斑部に二次的に感染し、発生したと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	べと病	平年：－ 前年：やや早	平年：－ 前年：やや多	6 月から発生が確認された（図 3-148）。	降雨が続いたことで湿度が高くなり、排水不良のは場で発生を確認した。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	アザミウマ類	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：やや多	6 月から寄生が確認されており、ほぼ全てのほ場で被害程度は高く推移した（図 3-149）。	夏季の高温が続いたことが要因として考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	アブラムシ類	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	6 月から寄生が確認された（図 3-150）。	春先の温暖な気候により、成虫の飛来が早まったが、定植時の粒剤施用や適期薬剤散布によりその後の発生推移を抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	ネギコガ	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：やや少	発生は、確認されなかった（図 3-151）。	適期防除の実施により、発生が抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	ネギハモグリバエ	平年：－ 前年：やや早	平年：－ 前年：やや多	6 月から寄生が確認された（図 3-152）。	夏季の高温が続いたことが要因として考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
	ヨトウガ類	平年：－ 前年：やや早	平年：－ 前年：やや多	7 月から寄生が確認された（図 3-153）。	春先からの高温による影響で多発したものと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に防除が行われている。
キ ク	白さび病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	5 月から発生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した（図 3-154）。	定植直後の発生は、苗床からの持ち込みによると考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に予防主体で定期的に薬剤散布されている。
	アザミウマ類	平年：並 前年：やや遅	平年：並 前年：やや少	5 月から寄生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した（図 3-155）。	適期防除の実施により、被害発生が抑えられたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。
	アブラムシ類	平年：並 前年：やや遅	平年：並 前年：やや少	5 月から寄生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した（図 3-156）。	春先から高温が続き、有翅虫の飛来が早まった。育苗期の薬剤処理や定植時の粒剤施用が行われており、被害発生は抑えられた。	定植時の粒剤施用及び発生時に薬剤散布が行われている。
	オオタバコガ	平年：やや早 前年：やや早	平年：やや多 前年：やや多	6 月から被害が確認された。発生ほ場割合は7月に平年よりやや高かったが、8月は平年並であった（図 3-157）。フェロモントラップによる誘殺は、平年より早い7月に多く確認された。	適期防除の実施により、被害発生が抑えられた。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。

	ハダニ類	平年：やや遅 前年：並	平年：並 前年：並	主要寄生種はナミハダニで、6 月から寄生が確認された。発生ほ場割合は、平年並に推移した（図 3-158）。	適期防除により、甚大な被害を回避したと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心にローテーションで散布されている。
	ハモグリバエ類	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	5 月から寄生が確認され、発生ほ場割合は平年より低く推移した（図 3-159）。	適期防除の実施により、被害発生が抑えられた。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。
リンドウ	葉枯病	例年：やや早 前年：やや早	例年：やや多 前年：並	5 月から発生が確認され、発生ほ場割合は例年よりやや高く推移した（図 3-160）。	春季から夏季にかけての高温多湿により、発生が助長されたと考えられる。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。
	褐斑病	例年：やや早 前年：やや早	例年：多 前年：多	8 月に発生が確認され、発生ほ場割合は例年よりやや高く推移した（図 3-161）。	夏季の高温多湿により、発生が助長されたと考えられる。また、ほ場に残された罹病葉残渣から感染が広がったと推察される。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。
	花腐菌核病	例年：並 前年：並	例年：並 前年：並	発生ほ場割合は、例年並に推移した。	適期防除の実施により、被害発生が抑えられた。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。
	黒斑病	例年：並 前年：並	例年：並 前年：やや少	7 月から発生が確認された。発生ほ場割合は、例年よりやや高かったが、8 月は例年並であった（図 3-162）。	適期防除の実施により、被害発生が抑えられた。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。
	アザミウマ類	例年：並 前年：並	例年：並 前年：並	発生ほ場割合は、例年並に推移した。主要寄生種は、ヒラズハナアザミウマだった。	適期防除の実施により、被害発生が抑えられた。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。
	ハダニ類	例年：並 前年：並	例年：多 前年：やや少	主要寄生種はカンザワハダニで、7 月から寄生が確認された。発生ほ場割合は、例年並に推移した（図 3-163）。	高温で推移した 7、8 月を中心に発生ほ場割合が高く、寄生密度が高いほ場も確認された。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。
	リンドウホソハマキ	例年：やや早 前年：早	例年：やや多 前年：多	本種による芯折れ被害は、6 月から確認された。発生ほ場割合は例年並であったが、発生が確認されたほ場では被害度が高かった（図 3-164）。	適期防除の実施により、被害発生が抑えられた。	防除指針に採用されている薬剤を中心に散布されている。

※昨年度から調査を開始した品目の平年比を「-」とした。

※バレイショ、カンショ、ダイコン、ホウレンソウに関しては、病虫害防除員（農業者）による調査を実施した。

ア 夏秋トマト

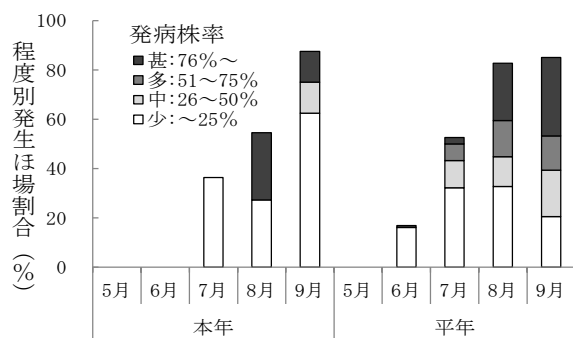


図 3-110 灰色かび病の発生状況

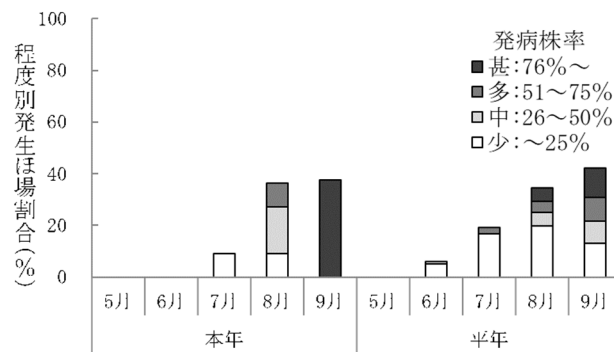


図 3-111 葉かび病の発生状況

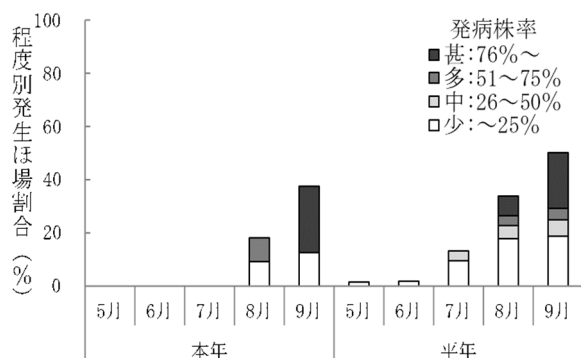


図 3-112 すすかび病の発生状況

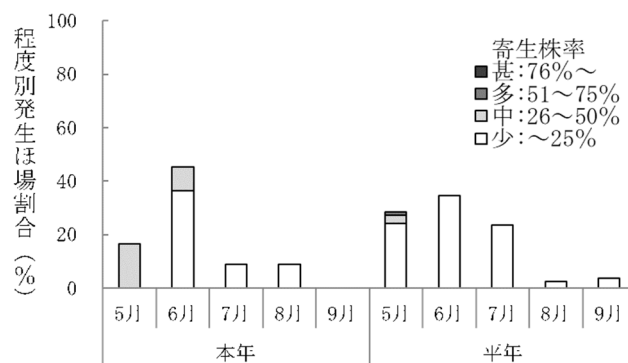


図 3-113 アブラムシ類の発生状況

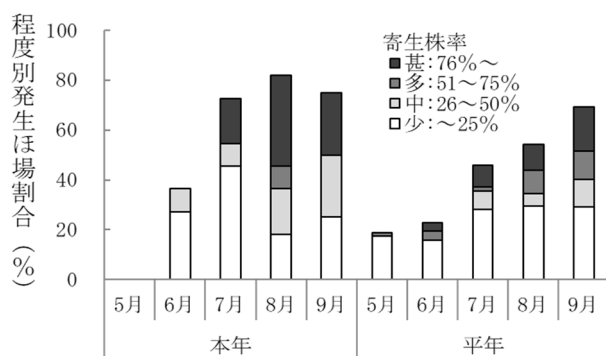


図 3-114 コナジラミ類の発生状況

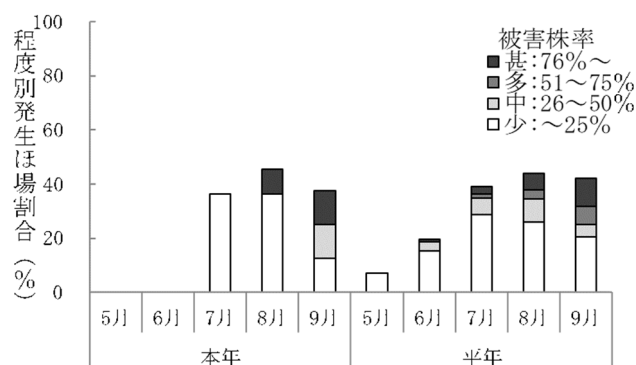


図 3-115 ハモグリバエ類の発生状況

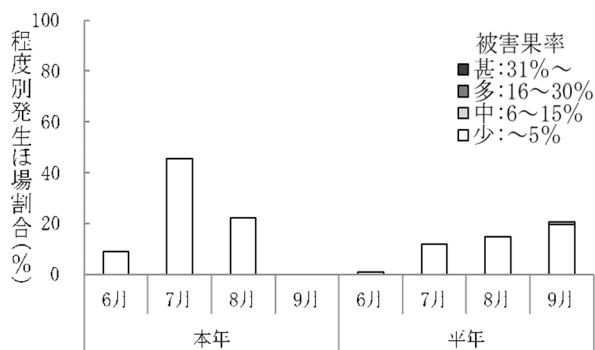


図 3-116 オオタバコガの発生状況

イ 夏秋キュウリ

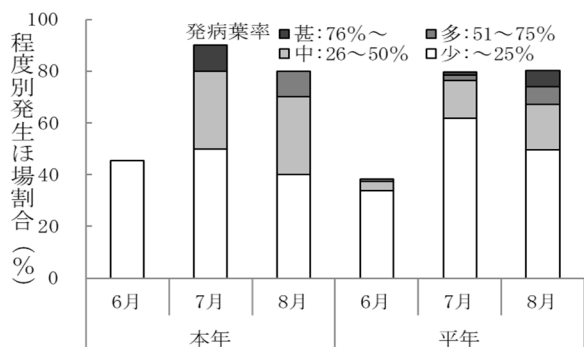


図 3-117 べと病の発生状況

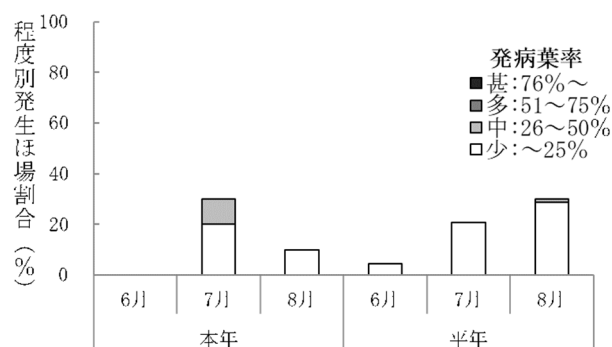


図 3-118 うどんこ病の発生状況

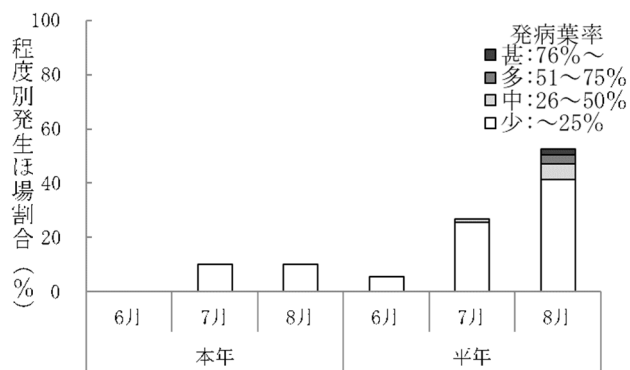


図 3-119 褐斑病の発生状況

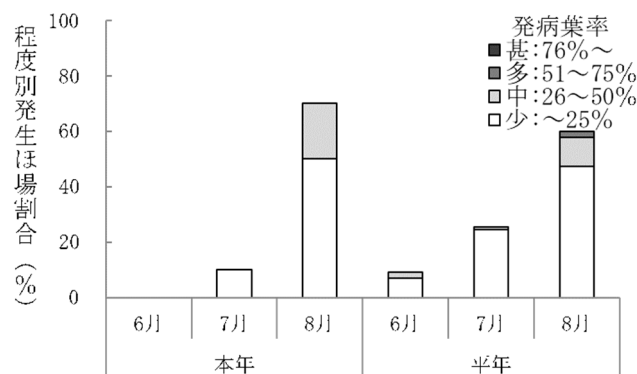


図 3-120 炭疽病の発生状況

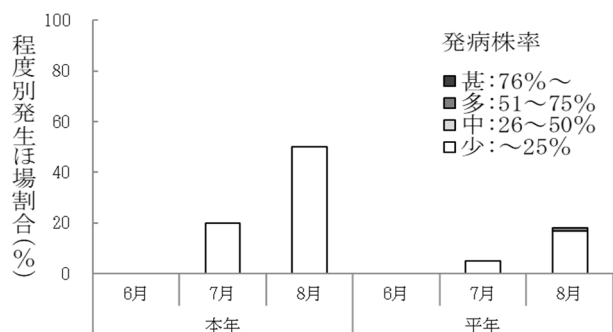


図 3-121 つる枯病の発生状況

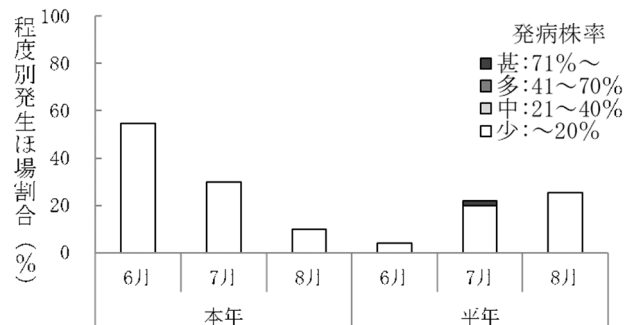


図 3-122 モザイク病の発生状況

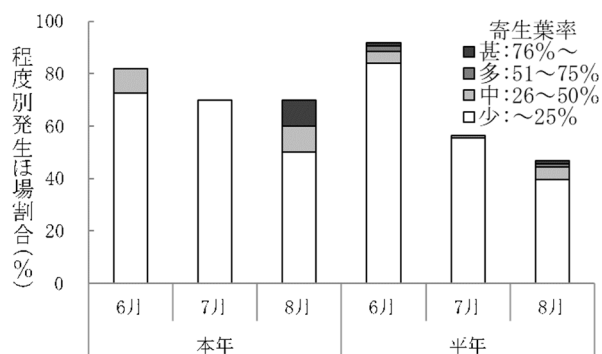


図 3-123 アブラムシ類の発生状況

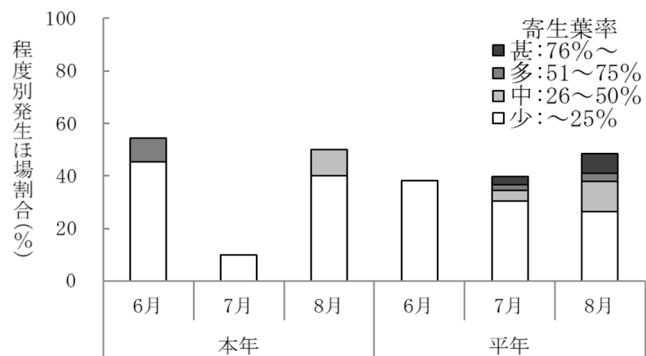


図 3-124 ハダニ類の発生状況

ウ イチゴ ※本年（2023年10月～2024年5月）

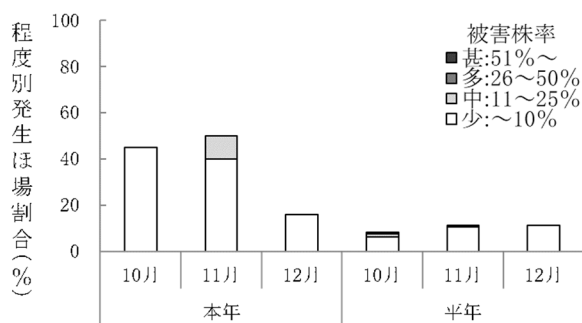


図 3-125 土壌病害（炭疽病、萎黄病、萎凋病）の発生状況

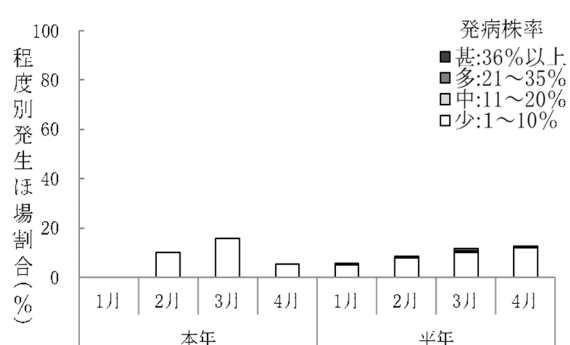


図 3-126 灰色かび病の発生状況

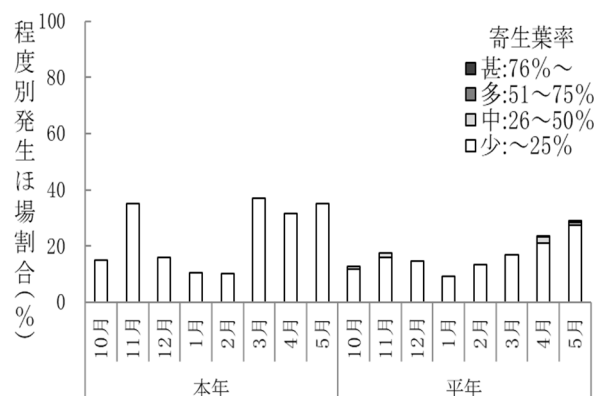


図 3-127 アブラムシ類の発生状況

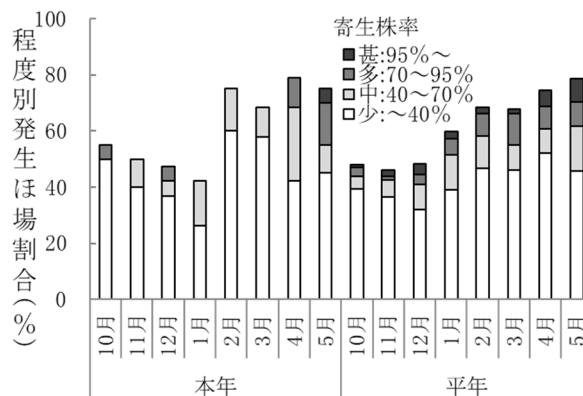


図 3-128 ハダニ類の発生状況

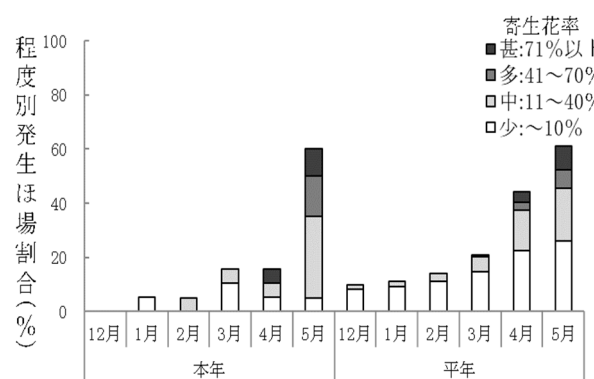


図 3-129 アザミウマ類の発生状況

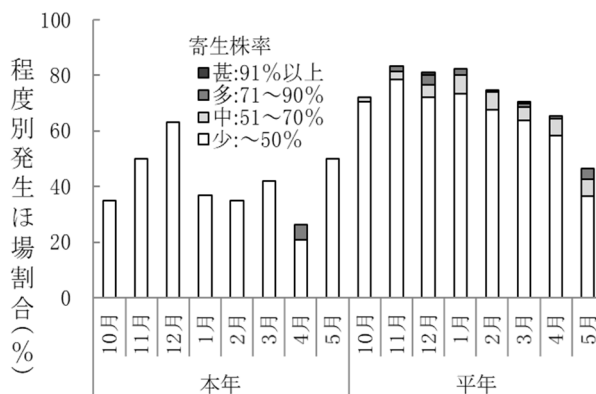


図 3-130 コナジラミ類の発生状況

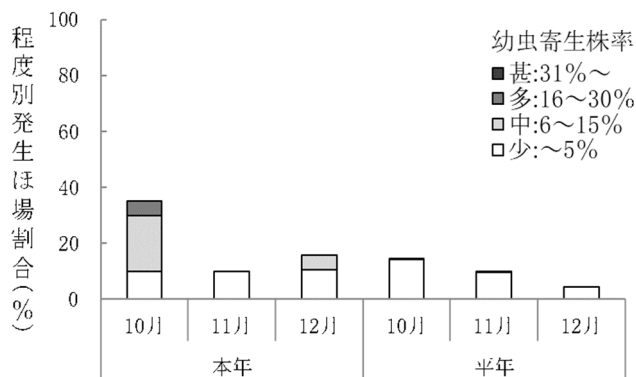


図 3-131 ハスモンヨトウの発生状況

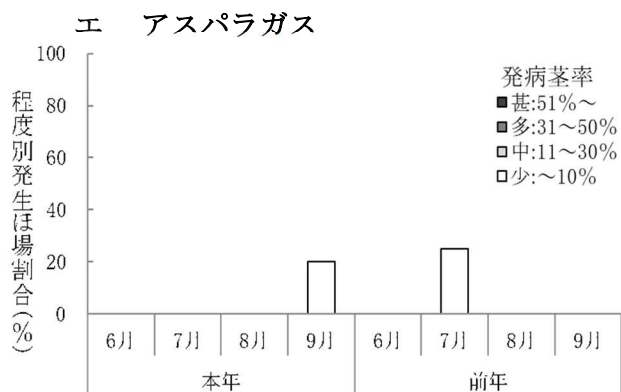


図 3-132 茎枯病の発生状況

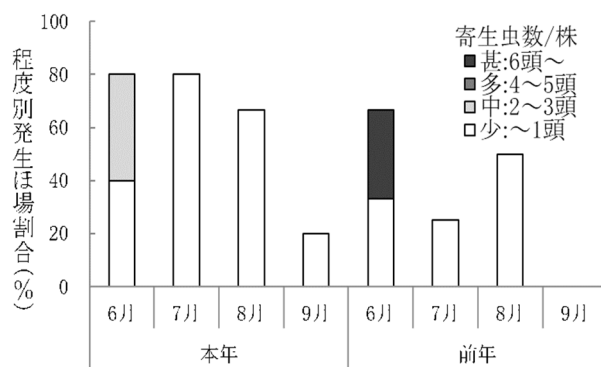


図 3-133 アザミウマ類の発生状況

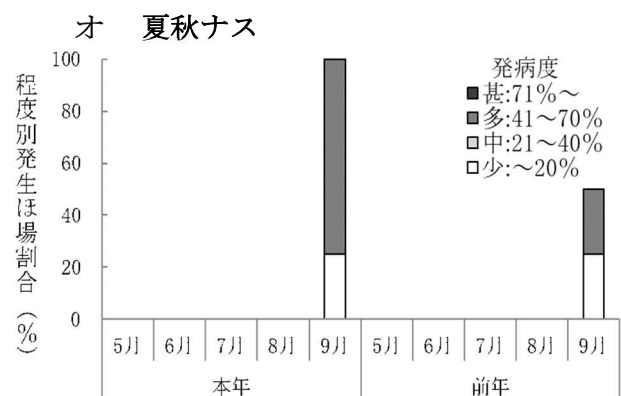


図 3-134 うどんこ病の発生状況

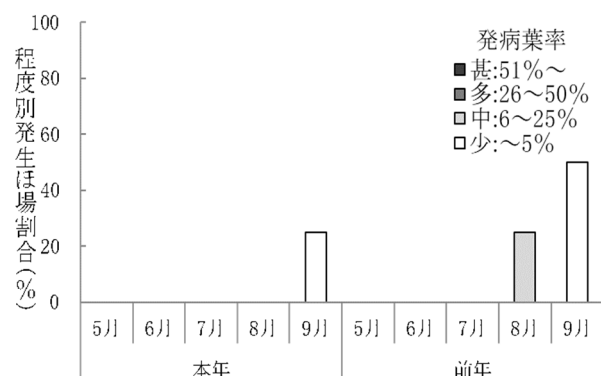


図 3-135 すすかび病の発生状況

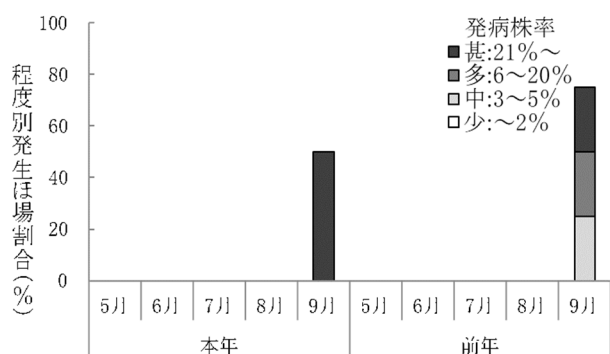


図 3-136 灰色かび病の発生状況

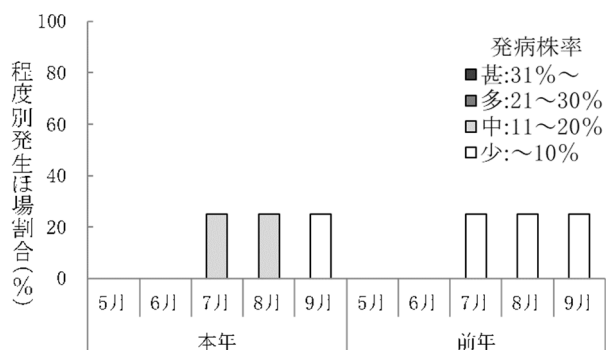


図 3-137 半身萎凋病の発生状況

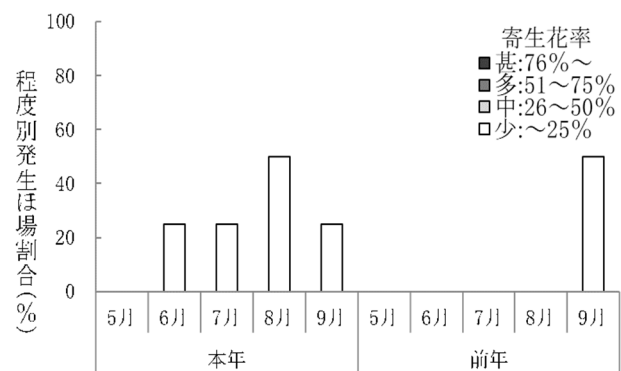


図 3-138 アザミウマ類の発生状況

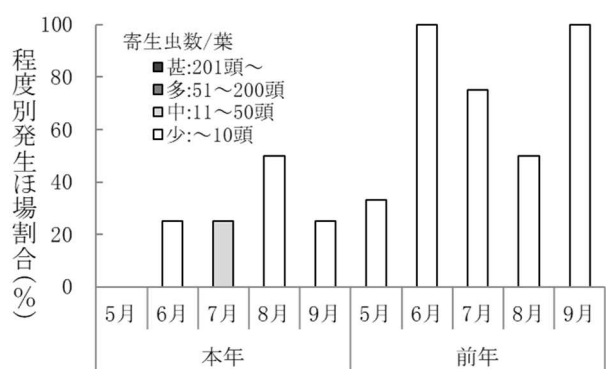


図 3-139 アブラムシ類の発生状況

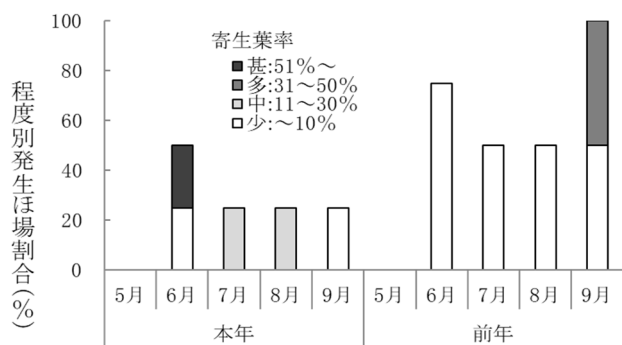


図 3-140 ハダニ類の発生状況

カ 夏秋ピーマン

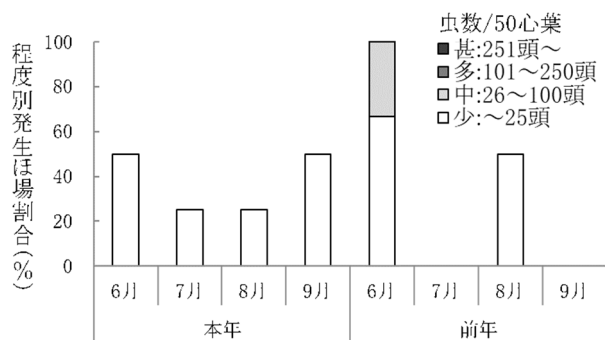


図 3-141 うどんこ病の発生状況

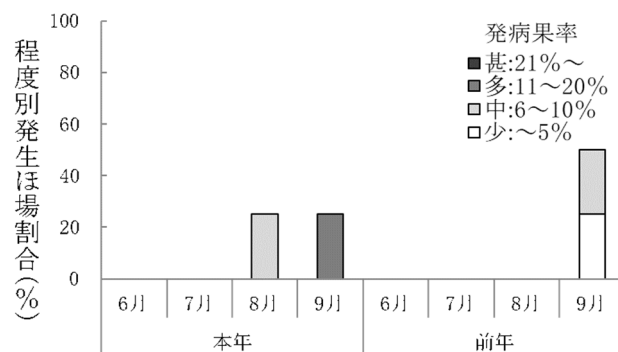


図 3-142 炭疽病の発生状況

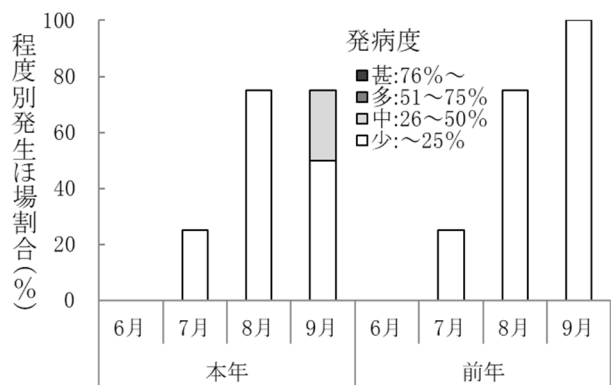


図 3-143 斑点病の発生状況

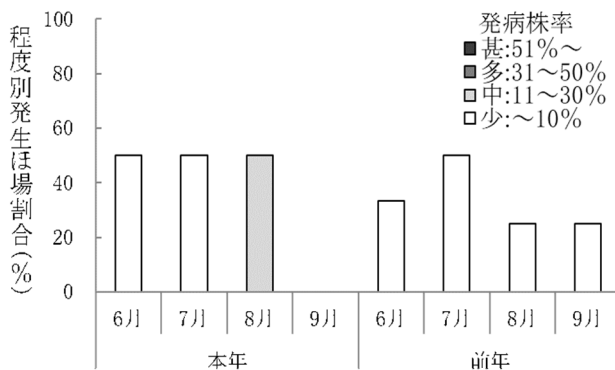


図 3-144 モザイク病の発生状況

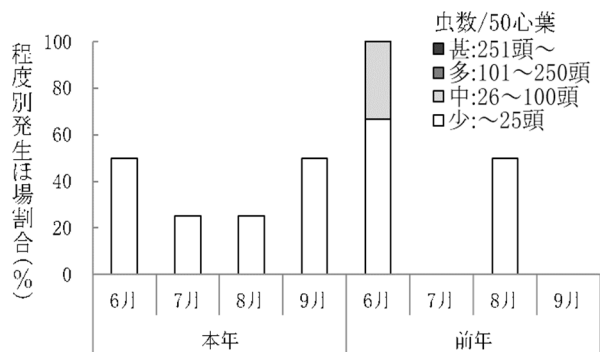


図 3-145 アブラムシ類の発生状況

キ 秋冬ネギ

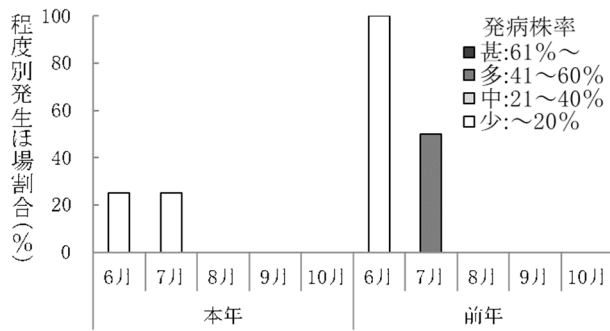


図 3-146 さび病の発生状況

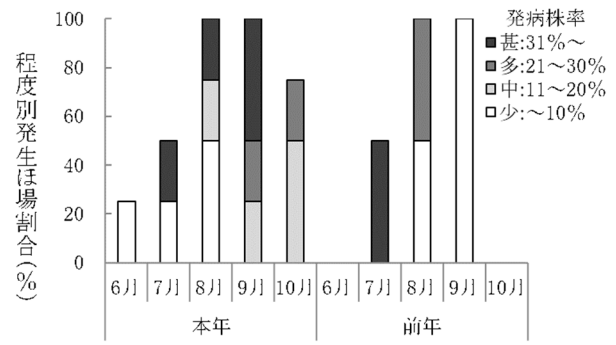


図 3-147 葉枯病の発生状況

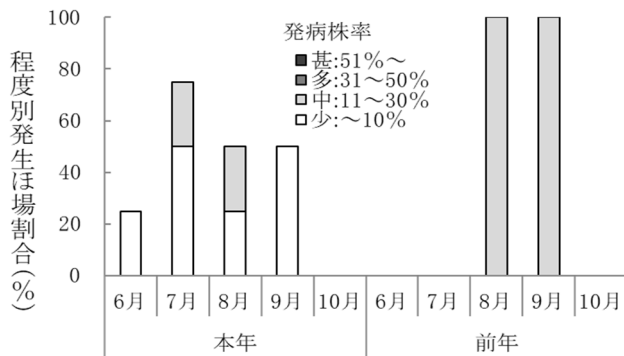


図 3-148 ベト病の発生状況

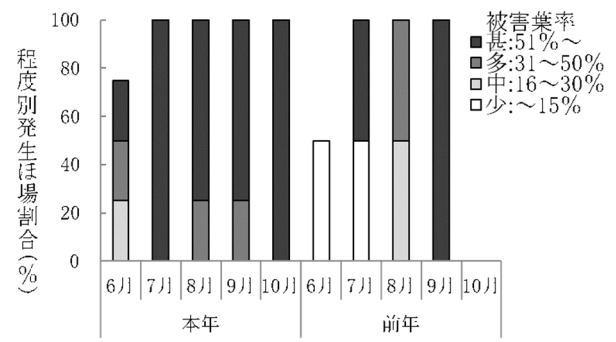


図 3-149 アザミウマ類の発生状況

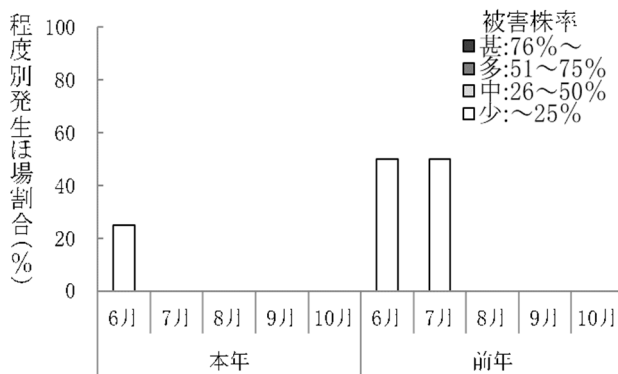


図 3-150 アブラムシ類の発生状況

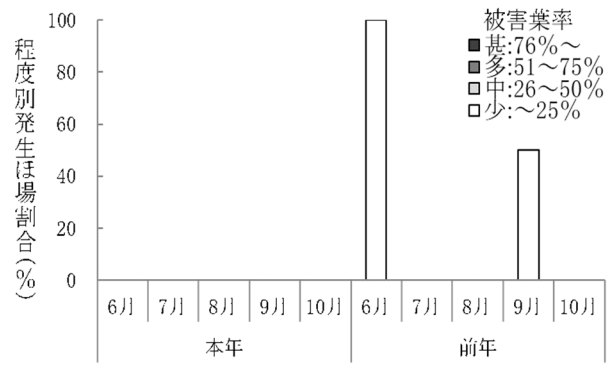


図 3-151 ネギコガの発生状況

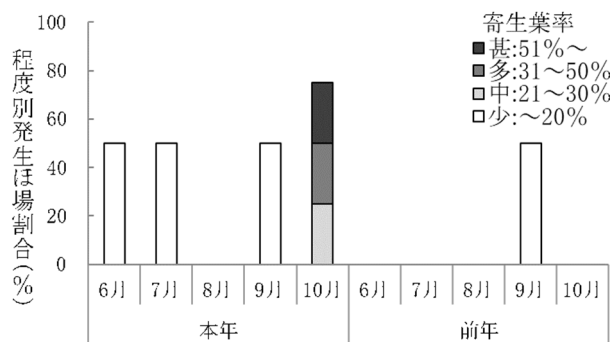


図 3-152 ネギハモグリバエの発生状況

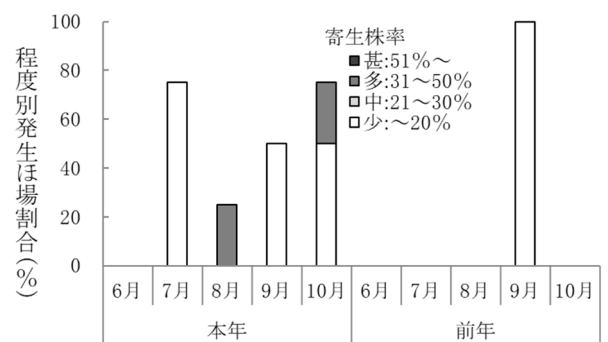


図 3-153 ヨトウガの発生状況

ク キク

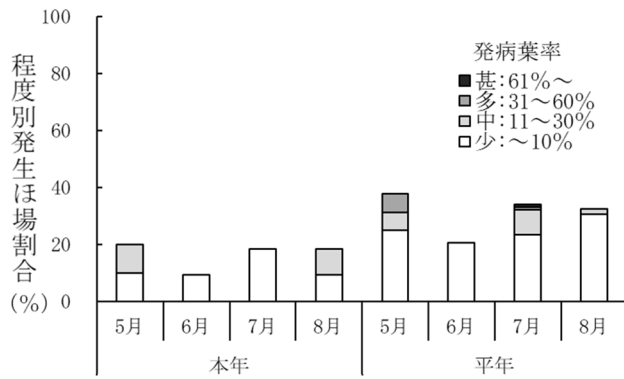


図 3-154 白さび病発生状況

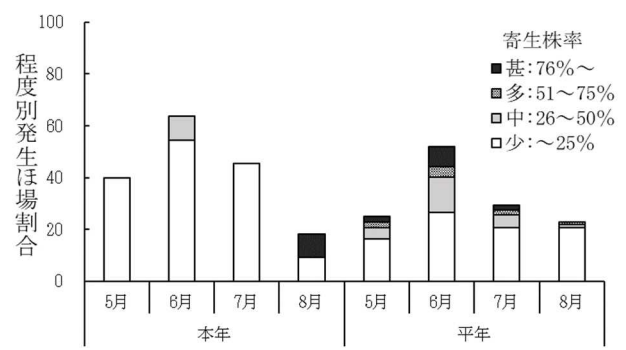


図 3-155 アザミウマ類の発生状況

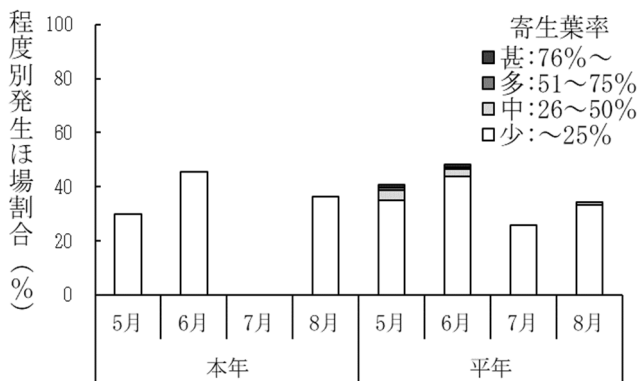


図 3-156 アブラムシ類の発生状況

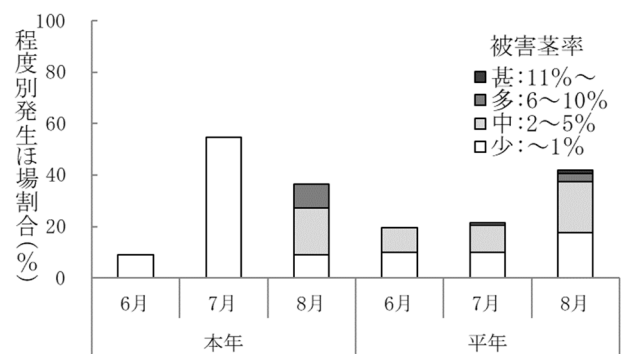


図 3-157 オオタバコガの発生状況

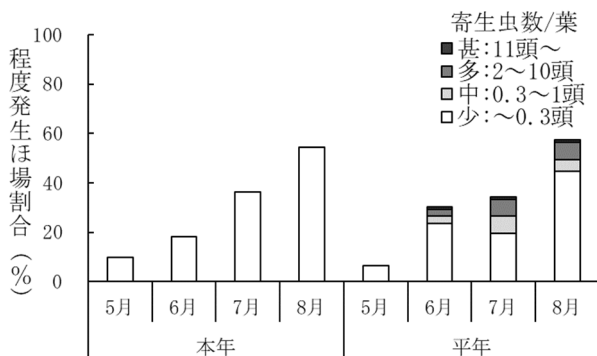


図 3-158 ハダニ類の発生状況

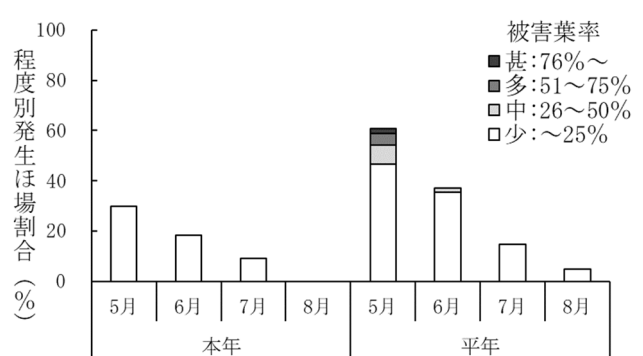


図 3-159 ハモグリバエ類の発生状況

ケ リンドウ

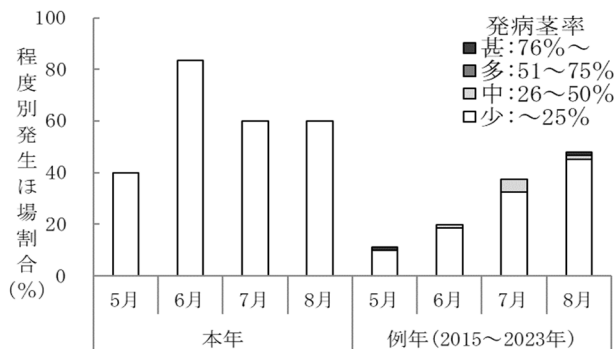


図 3-160 葉枯病の発生状況

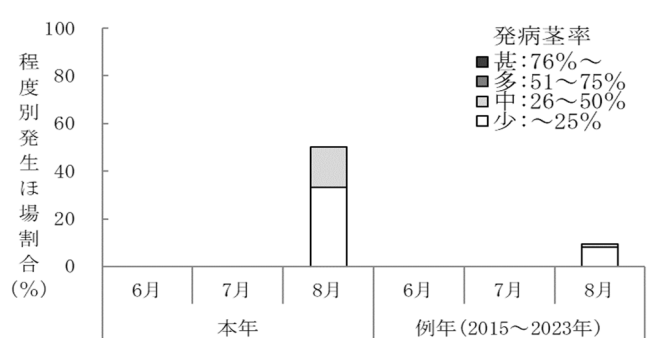


図 3-161 褐斑病の発生状況

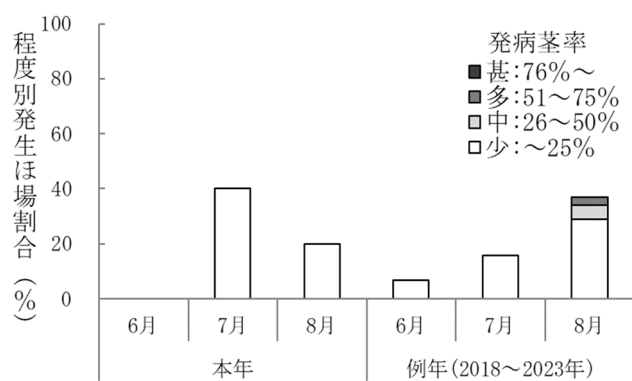


図 3-162 黒斑病の発生状況

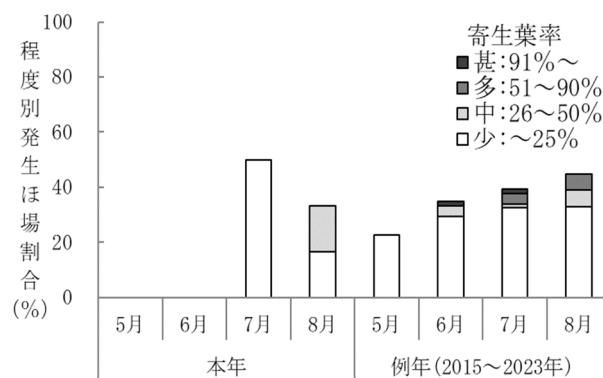


図 3-163 ハダニ類の発生状況

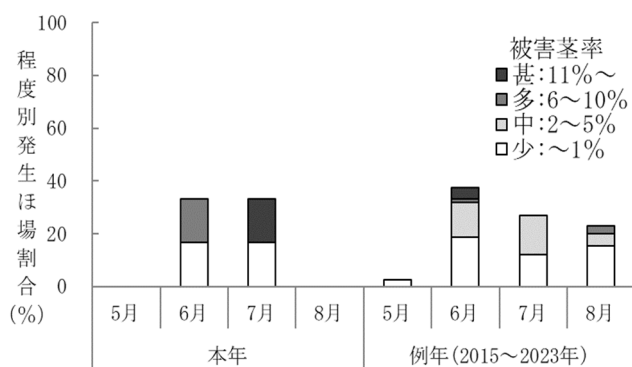


図 3-164 リンドウホソハマキの発生状況

5 発生面積及び防除面積

農作物名	栽培面積 (ha)	病害虫名	程度別発生面積 (ha)					防除面積 (ha)		発生量
			少	中	多	甚	計	実	延	
水稻	62,700	苗立枯病	37	0	0	0	37	30,034	35,157	やや少
		もみ枯細菌病	31	0	0	0	31	20,458	39,747	やや少
		苗立枯細菌病	18	0	0	0	18	20,226	31,416	やや少
		ばか苗病	186	20	5	0	211	19,179	19,179	多
		葉いもち	514	159	39	19	731	57,760	58,988	少
		穂いもち	1,188	234	83	19	1,524	13,020	15,990	やや少
		紋枯病	8,592	3,081	840	119	12,632	3,255	3,255	平年並
		白葉枯病	0	0	0	0	0	19,101	19,101	平年並
		稲こうじ病	46	0	0	0	46	5,811	5,811	少
		ごま葉枯病	988	148	64	0	1,200	18,335	22,008	やや少
		縞葉枯病	1	0	0	0	1	49,838	64,406	平年並
		黄化萎縮病	0	0	0	0	0	0	0	平年並
		イネミズゾウムシ	4,577	1,833	519	54	6,982	38,563	38,693	多
		イネドロオイムシ	283	84	29	7	403	38,563	38,695	少
		イネミギワバエ	111	9	0	0	120	28,546	28,546	やや少
		ニカメイガI	1	0	0	0	1	28,783	28,783	平年並
		ニカメイガII	30	0	0	0	30	2,597	2,597	平年並
		フタオビコヤガ	274	0	0	0	274	29,048	29,048	やや少
		イチモンジセセリ	302	0	0	0	302	22,272	22,272	やや少
		コブノメイガ	155	0	0	0	155	11,103	11,103	平年並
		ヒメトビウンカ	1,791	109	0	0	1,900	49,838	64,406	平年並
		セジロウンカ	1,017	0	0	0	1,017	33,510	48,077	やや多
		トビイロウンカ	0	0	0	0	0	33,161	47,728	平年並
		ツマグロヨコバイ	6,210	1,564	0	0	7,774	44,326	53,924	やや多
		イナゴ類	3,207	0	0	0	3,207	23,378	23,378	平年並
		斑点米カメムシ類	4,350	1,512	603	189	6,654	19,025	33,605	平年並
ムギ類	551	雪腐病類	7	0	0	0	7	12	12	少
		さび病類	0	0	0	0	0	195	270	平年並
		うどんこ病	0	0	0	0	0	257	362	平年並
		黒穂病類	0	0	0	0	0	195	196	平年並
		赤かび病	22	0	0	0	22	257	372	平年並
ダイズ	1,490	立枯性病害	16	7	0	0	23	1,240	1,240	やや多
		べと病	188	28	14	0	230	166	166	やや多
		紫斑病	209	0	0	0	209	814	1,459	平年並
		アブラムシ類	179	0	0	0	179	1,141	1,623	少
		吸実性カメムシ類	375	217	136	70	798	1,479	2,655	やや多
		フタスジヒメハムシ	352	28	48	0	428	1,413	2,281	平年並
		ウコンノメイガ	216	0	0	0	216	1,323	1,323	平年並
		ハスモンヨトウ	318	0	0	0	318	1,406	1,406	やや多
		シロイチモジマダラメイガ	90	0	0	0	90	559	559	平年並
		マメシンクイガ	223	70	18	0	311	1,366	2,043	少
		マメヒメサヤムシガ	32	0	0	0	32	214	214	平年並
リンゴ	1,210	ダイズサヤタマバエ	43	0	0	0	43	1,490	1,490	平年並
		斑点落葉病	999	49	0	0	1,048	1,186	14,861	平年並
		黒星病	22	0	0	0	22	1,186	8,785	平年並
		うどんこ病	96	0	0	0	96	1,186	2,493	平年並
		輪紋病	177	125	25	0	327	1,137	6,366	多
		褐斑病	398	317	145	48	908	1,215	14,022	やや多
		炭疽病	43	4	0	0	47	1,137	6,366	平年並
		すす点病	41	5	0	0	46	1,137	5,266	平年並
		すす斑病	28	1	0	0	29	1,137	5,226	平年並
		腐らん病	231	49	0	0	280	726	1,815	やや多

農作物名	栽培面積 (ha)	病害虫名	程度別発生面積 (ha)					防除面積 (ha)		発生量
			少	中	多	甚	計	実	延	
リンゴ	1,210	ハダニ類	835	179	49	26	1,089	1,186	3,688	平年並
		ナシヒメシンクイ	18	0	0	0	18	1,137	5,373	平年並
		モモシンクイガ	49	4	0	0	53	1,137	5,246	平年並
		スモモヒメシンクイ	39	7	0	0	46	1,137	4,236	平年並
		ハマキムシ類	86	0	0	0	86	1,186	5,813	やや少
		キンモンホソガ	494	0	0	0	494	1,186	4,990	平年並
		アブラムシ類	639	0	0	0	639	1,186	2,381	やや少
		ギンモンハモグリガ	151	0	0	0	151	1,186	1,423	やや少
モモ	1,760	ヒメボクトウ	174	75	5	2	256	182	726	平年並
		せん孔細菌病	865	166	14	5	1,050	1,725	18,750	平年並
		灰星病	94	4	0	0	98	1,473	11,654	やや少
		ホモブシス腐敗病	43	2	0	0	45	1,473	8,776	平年並
		ハダニ類	1,083	278	112	22	1,495	1,584	2,571	やや多
		ナシヒメシンクイ	30	0	0	0	30	1,473	7,094	平年並
		モモシンクイガ	23	0	0	0	23	1,473	6,291	平年並
		モモノゴマダラノメイガ	22	0	0	0	22	1,473	5,621	平年並
		ハマキムシ類	31	0	0	0	31	1,672	5,898	平年並
		コスカシバ	531	23	0	0	554	1,056	2,112	平年並
		モモハモグリガ	309	0	0	0	309	1,672	7,658	平年並
ナシ	825	カイガラムシ類	58	2	0	0	60	1,240	1,910	平年並
		アブラムシ類	223	14	0	0	237	1,672	4,357	平年並
		黒星病	439	66	6	0	511	772	12,009	平年並
		輪紋病	36	3	0	0	39	749	3,979	平年並
		赤星病	76	0	0	0	76	809	1,617	平年並
		ハダニ類	495	64	9	0	568	784	2,723	平年並
		ナシヒメシンクイ	47	5	0	0	52	772	4,890	やや多
		モモシンクイガ	14	0	0	0	14	772	4,975	平年並
		ハマキムシ類	61	1	0	0	62	772	2,645	平年並
		アブラムシ類	136	124	25	9	294	784	3,417	やや少
ブドウ	297	カイガラムシ類	76	5	3	0	84	394	2,758	平年並
		ヒメボクトウ	33	5	1	0	39	41	165	平年並
		ニセナシサビダニ	143	38	15	1	197	413	1,238	平年並
		晩腐病	60	7	2	0	69	282	1,975	—
		黒とう病	7	0	0	0	7	282	1,411	—
カキ	997	べと病	38	4	0	0	42	282	2,153	—
		灰色かび病	73	5	1	0	79	166	166	—
		チャノキイロアザミウマ	69	0	0	0	69	282	564	—
		炭そ病	4	0	0	0	4	329	329	平年並
		円星落葉病	430	146	77	55	708	349	1,080	平年並
		チャノキイロアザミウマ	141	10	3	2	156	329	724	平年並
		カキクダアザミウマ	209	43	6	0	258	329	940	平年並
		カイガラムシ類	6	0	0	0	6	282	611	平年並
果樹共通	4,792	ハマキムシ類	4	0	0	0	4	47	47	平年並
		カキノヘタムシガ	5	0	0	0	5	282	564	平年並
夏秋 トマト	307	果樹カメムシ類	392	48	14	2	456	794	888	平年並
		疫病	36	0	0	0	36	70	280	平年並
		灰色かび病	153	110	28	3	294	220	880	平年並
		葉かび病	102	32	8	4	146	250	1,500	平年並
		すすかび病	102	32	13	3	150	200	1,000	やや少
		かいよう病	32	3	1	0	36	50	100	平年並
		萎凋病	22	0	0	0	22	35	35	平年並
		半身萎凋病	13	0	0	0	13	35	35	平年並
		青枯病	34	9	1	1	45	35	35	平年並
		黄化えそ病(TSWV)	1	0	0	0	1	0	0	平年並
		アブラムシ類	219	44	0	0	263	300	600	やや多
		コナジラミ類	189	93	21	2	305	190	475	平年並
		アザミウマ類	131	21	0	0	152	150	450	平年並
		ハモグリバエ類	110	37	7	1	155	150	600	やや少
		オオタバコガ	138	7	0	0	145	150	600	多
		ハスモンヨトウ	20	0	0	0	20	25	25	やや多

農作物名	栽培 面積 (ha)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)		発生量
			少	中	多	甚	計	実	延	
夏秋ナス	255	うどんこ病	63	42	21	0	126	178	1,424	—
		灰色かび病	105	63	21	0	189	178	1,424	—
		すすかび病	127	0	0	0	127	178	1,424	—
		半身萎凋病	63	0	0	0	63	178	178	—
		アザミウマ類	127	0	0	0	127	178	356	—
		オオタバコガ	25	0	0	0	25	127	254	—
		アブラムシ類	255	0	0	0	255	178	1,424	—
		ハダニ類	127	84	42	0	253	178	1,424	—
		ハスモンヨトウ	25	0	0	0	25	127	254	—
夏秋 ピーマン	83	疫病	8	0	0	0	8	16	32	—
		斑点病	83	0	0	0	83	58	464	—
		うどんこ病	20	0	0	0	20	58	464	—
		モザイク病	41	0	0	0	41	0	0	—
		炭疽病	20	20	0	0	40	58	464	—
		アブラムシ類	55	27	0	0	82	58	464	—
		ハスモンヨトウ	20	0	0	0	20	16	32	—
		オオタバコガ	8	0	0	0	8	41	82	—
夏秋 キュウリ	583	べと病	400	159	14	1	574	300	2,700	やや多
		炭そ病	337	77	7	0	421	350	4,500	やや多
		うどんこ病	193	28	1	0	222	300	3,000	平年並
		斑点細菌病	32	0	0	0	32	120	240	平年並
		モザイク病	204	61	10	5	280	0	0	やや多
		黒星病	36	0	0	0	36	150	300	やや少
		褐斑病	193	72	38	8	311	350	3,500	やや少
		つる枯病	246	9	1	0	256	300	450	やや多
		アブラムシ類	525	48	7	1	581	490	2,450	やや多
		アザミウマ類	509	48	23	1	581	325	650	平年並
		コナジラミ類	300	1	0	0	301	300	600	やや多
		ワタヘリクロノメイガ	35	0	0	0	35	50	75	平年並
		ハダニ類	258	105	35	1	399	320	800	やや多
秋冬 ネギ	94	さび病	94	0	0	0	94	95	520	—
		黒斑病	9	0	0	0	9	47	376	—
		べと病	62	31	0	0	93	65	520	—
		葉枯病	47	31	15	0	93	65	520	—
		ヨトウムシ類	94	0	0	0	94	47	94	—
		アブラムシ類	47	0	0	0	47	65	520	—
		ネギハモグリバエ	47	0	0	0	47	65	520	—
		ネギアザミウマ	62	31	0	0	93	65	520	—
		ネギコガ	62	31	0	0	93	65	520	—
イチゴ	105	灰色かび病	22	0	0	0	22	105	315	平年並
		うどんこ病	30	11	3	0	44	105	945	平年並
		萎黄病	11	2	0	0	13	70	70	やや多
		炭そ病	24	2	0	0	26	70	70	やや多
		萎凋病	2	0	0	0	2	70	70	平年並
		アブラムシ類	37	1	0	0	38	105	315	平年並
		ハダニ類	71	31	10	2	114	105	840	やや多
		ハスモンヨトウ	31	2	0	0	33	70	140	平年並
		コナジラミ類	95	6	2	0	103	80	160	平年並
		アザミウマ類	76	21	5	1	103	50	150	平年並
キク	93	白さび病	35	8	2	0	45	93	560	平年並
		ハダニ類	43	9	0	0	52	93	747	平年並
		アザミウマ類	26	17	9	0	52	93	934	やや多
		アブラムシ類	35	9	0	0	44	93	747	やや多
		ハモグリバエ類	17	0	0	0	17	93	279	やや少
		オオタバコガ	26	17	0	9	52	93	651	平年並
リンドウ	28	花腐菌核病	1	0	0	0	1	16	32	平年並
		葉枯病	14	0	0	5	19	16	32	平年並
		黒斑病	14	0	0	0	14	16	32	やや多
		褐斑病	6	0	0	0	6	16	16	平年並
		リンドウホソハマキ	0	0	5	5	10	15	30	やや少
		ハダニ類	9	9	5	0	23	27	54	やや多
		アザミウマ類	14	0	0	0	14	16	32	平年並

6 病虫害診断同定

(1) 依頼元及び依頼作物

2024年度の依頼件数は49件であった。依頼元は農林事務所農業振興普及部・農業普及所が26件で、農家等からの直接依頼が19件、センター内、その他が各2件であった（表3-19）。

依頼された作物は、野菜が41件、花きが4件、果樹が1件、作物が3件であった（図3-165）。主に、診断依頼の多い品目別ではトマト11件、キュウリ9件、キクが5件、ホウレンソウ5件、イチゴ3件、その他が7件であった。

(2) 診断同定の結果

診断同定の結果、病害23件、虫害13件、その他13件であった（表3-20）。病害では、ウイルス病の診断依頼が多く、主に、トマトにおけるTYLCVや、キュウリのCMV、CCYV、CABYVが多かった。また、ウイロイドによるキクわい化病も昨年に引き続き診断依頼がなされている。糸状菌では、土壌病害（イチゴ萎黄病・炭疽病）やホウレンソウ萎凋病等が多かった。虫害では、トマトキバガ成虫の診断依頼が多かった。

表3-19 病虫害診断同定依頼元別依頼件数

依頼元	件数
農業振興普及部・農業普及所	26
農業協同組合	0
農業者	19
センター内	2
その他	2
合計	49

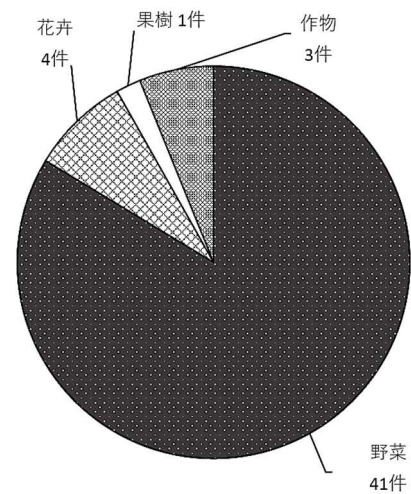


図3-165 診断同定依頼作物内訳

表3-20 病虫害診断同定結果

原因	件数	主な種類（カッコ内は件数）
病害	23	
ウイルス病（ウイロイド）	(14)	トマト黄化葉巻病(5)、キュウリ退緑黄化病(4) 他(5)
糸状菌	(9)	レタス菌核病(1)、キュウリ疫病(1)、他(7)
細菌	(0)	
虫害	13	
昆虫類	(13)	トマトキバガ(4)、カメムシ類(2)、他(7)
その他	13	
原因不明	(13)	病虫害が原因ではないと思われるもの(13)
計	49	

7 鳥獣類による農作物の被害状況

福島県における 2023 年度の野生鳥獣による農作物の被害金額は、前年度と比べ約 2,075 万円増の 1 億 3,959 万円（前年度比 117.5%）となった（調査対象期間：2023 年 4 月～2024 年 3 月）。

（1）鳥類による被害

種 類	農作物名	被害面積 (ha)	被害量 (t)	被害金額 (万円)
スズメ	稲	0.01	0.04	0.8
	野菜	1.00	0.50	100.0
	計	1.01	0.54	100.8
カラス	稲	0.26	1.39	29.8
	豆類	0.52	0.63	10.3
	果樹	2.99	51.51	1,837.0
	飼料作物	0.13	5.81	8.1
	野菜	0.46	7.34	216.8
	いも類	0.01	0.09	0.7
	その他	0.05	0.00	25.0
	計	4.42	66.76	2,127.7
カモ	稲	0.32	1.75	36.1
	計	0.32	1.75	36.1
ムクドリ	果樹	1.20	21.86	579.4
	野菜	0.07	0.63	24.1
	計	1.27	22.49	603.5
ヒヨドリ	果樹	1.02	19.15	471.1
	野菜	0.20	0.52	16.4
	計	1.22	19.68	487.5
キジ	野菜	0.22	0.53	16.5
	計	0.22	0.53	16.5
サギ	稲	0.22	1.19	24.5
	計	0.22	1.19	24.5
その他 鳥類	稲	0.03	0.15	3.3
	果樹	0.35	6.37	201.5
	計	0.38	6.53	204.8
鳥類計		9.06	119.46	3,601.4

注：「被害量」は四捨五入しているため合計が一致しない場合がある。

(2) 獣類による被害

種 類	農作物名	被害面積 (ha)	被害量 (t)	被害金額 (万円)
ネズミ	野菜	0.21	0.60	14.3
	いも類	0.00	0.04	0.4
	その他	0.18	0.03	80.5
	計	0.39	0.67	95.2
ウサギ	野菜	0.10	0.26	8.2
	その他	0.13	0.00	26.3
	計	0.23	0.26	34.5
クマ	稲	0.69	3.82	81.5
	雑穀	3.28	1.62	42.9
	果樹	0.72	8.54	260.6
	飼料作物	0.05	2.43	4.9
	野菜	1.00	15.20	277.9
	いも類	0.01	0.23	2.7
	その他	0.01	0.00	8.2
	計	5.76	31.84	678.7
イノシシ	稲	23.90	131.01	2,772.7
	麦類	1.00	2.31	12.3
	豆類	0.78	0.95	17.2
	雑穀	9.71	4.79	126.1
	果樹	0.51	7.52	279.8
	飼料作物	1.37	42.81	53.2
	野菜	7.60	55.64	1,173.2
	いも類	4.29	75.03	799.2
	その他	0.69	0.00	383.5
	計	49.85	320.06	5,617.2
サル	稲	1.05	4.92	104.5
	豆類	0.28	0.34	6.2
	雑穀	0.14	0.07	1.9
	果樹	1.64	24.61	1,022.8
	飼料作物	0.25	11.45	17.6
	野菜	2.58	36.38	865.5
	いも類	0.52	7.69	79.5
	その他	0.17	0.00	104.7
	計	6.63	85.46	2,202.7
シカ	稲	1.66	9.26	197.9
	豆類	0.19	0.26	2.3
	雑穀	7.19	3.74	98.9
	果樹	0.00	0.00	0.1
	野菜	0.30	9.48	75.7
	いも類	0.00	0.03	0.3
	その他	0.32	0.00	134.2
	計	9.66	22.78	509.4

注：「被害量」は四捨五入しているため合計が一致しない場合がある。

種 類	農作物名	被害面積 (ha)	被害量 (t)	被害金額 (万円)
カモシカ	稲	0.15	0.82	17.6
	野菜	0.01	0.09	1.4
	いも類	0.00	0.04	0.4
	その他	0.17	0.00	104.7
	計	0.33	0.96	124.1
タヌキ	果樹	0.01	0.15	4.7
	野菜	0.15	1.57	38.4
	計	0.16	1.72	43.1
ハクビシン	稲	0.05	0.26	5.6
	豆類	0.22	0.26	4.3
	雑穀	0.01	0.00	0.1
	果樹	0.48	6.81	346.6
	飼料作物	0.57	15.53	22.3
	野菜	2.78	21.15	547.2
	いも類	0.00	0.09	1.0
	計	4.11	44.11	927.1
アライグマ	稲	0.01	0.03	0.6
	果樹	0.10	0.05	1.5
	野菜	0.01	0.09	1.8
	計	0.12	0.17	3.9
その他 獣類	稲	0.05	0.28	6.0
	果樹	0.06	0.58	53.1
	飼料作物	0.13	4.24	6.0
	野菜	0.11	1.94	56.3
	いも類	0.00	0.04	0.6
	計	0.35	7.08	122.0
獣類計		77.59	515.10	10,357.9

注：「被害量」は四捨五入しているため合計が一致しない場合がある。

(3) 鳥獣類による被害合計

種 類	農作物名	被害面積 (ha)	被害量 (t)	被害金額 (万円)
鳥獣計	稲	28.40	154.92	3,280.9
	麦類	1.00	2.31	12.3
	豆類	1.99	2.44	40.3
	雑穀	20.33	10.22	269.9
	果樹	9.08	147.17	5,058.2
	飼料作物	2.50	82.26	112.1
	野菜	16.80	151.92	3,433.7
	いも類	4.83	83.28	884.8
	その他	1.72	0.03	867.1
	鳥獣合計	86.65	634.55	13,959.3

注：「被害量」は四捨五入しているため合計が一致しない場合がある。

第4 病虫害防除指導の実施状況

1 農薬取締業務及び農薬安全使用指導

(1) 農薬中毒事故の発生

2024年度、医療機関から県に報告があった農薬中毒事故は0件であった。

(2) 農薬危被害防止指導

農薬危被害防止月間（2024年6月10日～9月10日）を中心に、農薬販売者への立入検査を230件実施し、適正な販売管理の指導と危被害防止の啓発を行った。

(3) 農薬管理指導士の育成

農薬の安全な取扱い及び使用について農薬使用者への確かな助言を行う「農薬管理指導士」を育成するために、農薬販売者（試験日現在、満20歳以上であり、毒物劇物取扱責任者の資格を有し、販売経験が概ね2年以上の者）に対して、農薬取締法等関係法令と農薬の安全かつ適正な使用等について指導した（担当した研修及び試験問題の内容は、農薬関係法令、農薬の安全使用及び危被害防止について）。

農薬管理指導士認定研修・試験の実績については下記のとおり

時 期 2024年11月19日（火）～20日（水）

場 所 福島県環境創造センター

新規受講者 3名

合格者数 3名（合格率100%）

農薬管理指導士総数 308名（2025年3月31日現在）

(4) 農薬適正使用アドバイザーの育成

農薬使用者等に対し適正な農薬使用について助言する「農薬適正使用アドバイザー」を育成するために、農薬適正使用の指導的立場にある農業者等（試験日現在、満18歳以上であり、県内に在住または在勤の者）に対して、農薬取締法と農薬の安全かつ適正な使用等について指導した（担当した研修及び試験問題の内容は、農薬一般及び農薬の安全、適正使用について）。

農薬適正使用アドバイザー認定・試験の実績については下記のとおり

時 期 2024年11月19日（火）（中通り会場）

2024年11月28日（木）（会津会場）

場 所 福島県環境創造センター（中通り会場）

福島県ハイテクプラザ会津若松技術支援センター（会津会場）

新規受講者 44名

合格者数 42名（合格率95%）

農薬適正使用アドバイザー総数 730名（2025年3月31日現在）

(5) 農薬適正・安全使用指導

ア 有害動植物防除及び農薬安全使用等の支援・指導状況

各種会議への出席、ホームページへの掲載、講習会等での講義や立入検査等により、農薬の安全使用・危被害防止等について指導・助言を行った。具体的活動内容は表4-1のとおり。

表 4- 1 農薬安全使用等に関する活動

項目	時期	内容	対象者
農薬の適正使用及び農薬飛散防止対策の推進	6月～8月	各地方農薬適正使用推進会議（県北、県中、会津、南会津、相双、いわき）における助言指導	農林事務所、市町村、農業協同組合等
農薬販売者立入検査による指導	4月～3月	農薬販売者立入検査時に、農薬の基礎知識や法令、農薬の適正管理と使用等について指導	農薬販売者
無人航空機の危被害防止及び病虫害等の防除対策	4月～3月	無人航空機の農薬適正使用確認、危被害・事故等防止に関する指導、散布実施計画・実績報告とりまとめ	農林事務所、実施主体、市町村、農業協同組合、農業共済組合、農業者、散布業者
農作物病虫害防除指針変更情報の提供	4月～3月	安全使用情報（使用制限のかかるもの）、毎月の登録変更、失効情報の確認	病虫害防除所ホームページに掲載
農薬適正使用、危被害防止等に関する情報提供	4月～3月 6月～9月 5月～3月	農薬安全・適正使用について 農薬危被害防止運動月間の周知 無人航空機の安全対策の徹底と事故情報（2024年度）について	病虫害防除所ホームページに掲載
地方版病虫害防除暦作成指導	12月	果樹病虫害防除暦検討会（会津）	農薬使用者、市町村、関係機関職員、農薬販売者
会議・研修会等における講師対応等	7月8, 10日 11月19, 20日 11月19, 20日 11月28日 11月28日	農薬危害防止講習会 農薬管理指導士認定・更新研修 農薬適正使用アドバイザー認定・更新研修 農薬管理指導士更新研修（会津） 農薬適正使用アドバイザー認定・更新研修（会津）	受講者 291名 受講者 16名（更新含む） 受講者 69名（更新含む） 受講者 4名（更新） 受講者 42名（更新含む）

（6）農薬販売者の届出及び指導

ア 農薬販売者の届出

（ア）届出の状況

2024年度の届出状況は表4-2のとおりであった。内訳は新規が63件（届出件数63件）、廃止が95件（届出件数41件）、変更が76件（届出件数29件）で、農薬販売者総数は1205件であった。届出理由で多かったのは、新規届では薬店の増設、廃止届では業務見直しに伴う販売中止や廃業、変更届では販売所名称や届出者氏名の変更であった。

（イ）販売者台帳の整備

届出に基づき、販売者台帳を更新し、関連する電子ファイルや台帳を整備した。併せて、立入検査で確認した指導状況・毒劇物販売業登録状況等の情報を更新した。

表 4- 2 2024 年度農薬販売届

	農薬卸商	農薬卸・小売商	農薬小売商	内訳						計
				農業協同組合	薬局・薬店	種苗店	肥料店	ホームセンター	他	
販売者総数＊1	40	74	1,091	149	338	41	118	130	379	1,205
新規届		7	56		9	1	4	5	44	63
変更届	7	5	64	33	2		6	6	29	76
変更内容 ＊2	届出者住所	1	3						4	4
	届出者氏名	6	18	4			5	3	16	28
	販売所住所		12	3	2		1	2	5	13
	販売所名称 法人名		31	26				1	4	31
	卸・小売の別									0
廃止届	2	2	91	10	9	5	7	7	57	95

※販売者総数は年度末(3月31日)の件数

※※1つの変更届・廃止届で複数の変更・廃止内容有り

イ 農薬販売者の立入検査

(ア) 立入検査の状況

農薬取締法第 29 条に基づき県内の農薬販売者（店舗）の立入検査を実施した。実施件数は販売者総数の 2 割に当たる 230 件で、このうち県保健福祉事務所・保健所との合同が 39 件、当所単独が 191 件であった（表 4- 3）。検査においては、帳簿の記載・備付や農薬の陳列・保管等を重点的に確認するとともに、「農薬販売の手引き」を配付して農薬取締法及び関連法令を遵守した適正な販売・管理を指導した。

(イ) 問題点及び指導状況

検査において是正を求めた事項で多かったのは、注意指導票の交付では帳簿の記載・備付・保管と届出に関すること（表 4- 3）、口頭指導では農薬登録のない除草剤の表示の不備、農薬と衛生害虫剤や農薬でない除草剤等の混置に関することであった。

表 4- 3 2024 年度農薬販売者立入検査と指導結果(注意指導票の交付)

年度	立入検査 延べ数	違反者 実数	違反事項別件数					
			販売の制限、禁止 法第 18 条 の 1 項 (ア)	虚偽宣伝 等の禁止 法第 21 条 の 2 項 (イ)	販売所の 届出 法第 17 条 (ウ)	帳簿の備 付、記載、 保管 法第 20 条 (エ)	違反件数合 計(延べ) (ア+イ+ウ+エ)	左のうち 改善確認 済件数
2024 年	230	15	0	0	3	27	30	30

(7) 農薬流通量調査

福島県農作物病害虫防除指針に掲載された農薬を中心に、農薬卸売業者（全国農業協同組合福島県本部を含む）、卸小売業者及びホームセンター計 35 事業者からの報告（2024 農薬年度（2023 年 10 月 1 日～2024 年 9 月 30 日）の販売数量）に基づいて取りまとめた（表 4- 4）。

表 4- 4 流通品目数と流通量

分 類	流通品目数		流通量(t, kl)	
	2024 農薬年度	2023 農薬年度	2024 農薬年度	2023 農薬年度
殺菌剤	282	293	647	773
殺虫剤	326	330	1, 297	1, 270
殺虫殺菌剤	173	180	814	902
除草剤	538	562	2, 390	2, 371
その他	137	139	4, 693	4, 417
合 計	1, 456	1, 504	9, 841	9, 733

※一般社団法人日本植物防疫協会が運営しているホームページ「J P P - N E T」に基づき、「殺菌植調剤」や「殺虫殺菌除草剤」等を「その他」に分類した。

※小数点第一位を四捨五入しているため合計が合わない場合がある。

(8) ゴルフ場の農薬安全使用指導

福島県ゴルフ場農薬安全使用指導要綱に基づき、ゴルフ場における農薬適正使用及び環境保全等を目的として農薬使用実績調査と立入検査を実施した。2025 年 3 月 3 日のゴルフ場農薬安全使用管理者講習会では、ゴルフ場での農薬安全使用に関する各報告について説明した。

ア 農薬使用実績調査

2023 年度の農薬使用実績について県内 35 か所のゴルフ場から報告を求めて取りまとめた。これに基づき農薬成分ごとの投下量を算出し、薬剤耐性菌、抵抗性害虫等の発生抑制や排水等の水質測定の参考とするため、上位 30 成分について示した（表 4- 5）。

表 4- 5 ゴルフ場で投下量の多い農薬成分

(単位：kg)

農薬成分名	種類	投下量	農薬成分名	種類	投下量
アシュラム	除草剤	1, 769	MC P A	除草剤	175
T P N	殺菌剤	1, 228	クロチアニジン	殺虫剤	172
トルクロホスメチル	殺菌剤	742	グリホサート	除草剤	152
S - メトラクロール	除草剤	602	ピロキサスルホン	除草剤	145
ペンシクロン	殺菌剤	499	トリクロピル	除草剤	140
チウラム	殺菌剤	471	フルキサピロキサド	殺菌剤	139
ポリオキシエチレンドデ	展着剤	336	チフルザミド	殺菌剤	138
シルエーテル			プロジアミン	除草剤	135
アゾキシストロビン	殺菌剤	315	ポリオキシエチレンメチル	展着剤	131
プロピネブ	殺菌剤	312	ポリシロキサン		
プロピザミド	除草剤	286	チオファネートメチル	殺菌剤	126
MC P P	除草剤	279	有機銅	殺菌剤	118
メコプロップ P	除草剤	271	チオジカルブ	殺虫剤	117
ジラム	殺菌剤	219	エトベンザニド	除草剤	107
ヘキサコナゾール	殺菌剤	198	A C N	除草剤	102
フェノキサスルホン	除草剤	195	ペンディメタリン	除草剤	102

イ ゴルフ場の農薬使用状況に関する立入検査

ゴルフ場から報告のあった農薬使用実績を参考にして、2024 年 10 月、11 月に 9 か所のゴルフ場へ立入検査を行い、農薬の使用状況、保管・管理状況等について指導した。

2 農林水産航空事業

(1) 無人ヘリコプターによる空中散布

ア 全体の実施面積

「農薬の空中散布における福島県無人航空機安全ガイドライン（令和２年４月１日施行）」に基づき、実施主体に対して、無人ヘリコプターによる農薬の空中散布の実績報告を求めた。2024年の県内の実施面積は延べ7,409.5haとなり、前年比86.9%となった(表4-6)。

イ 水稻における実施面積

2024年の水稻における実施面積は、6,810.7haとなり、前年比87.3%となった（表4-7）。

ウ 大豆における実施面積

2024年の大豆における実施面積は、451.9haとなり、前年比81.3%となった（表4-8）。

表4-6 農林事務所別作物別実施面積（単位：ha）

農林事務所	水稻	大豆	小麦	その他	合計	市町村数
県北	534.9	20.0			554.9	3
県中	833.0			10.0	843.0	3
県南	2,358.8	112.4			2,471.2	7
会津	1,899.3	93.4			1,992.7	10
南会津	311.7				311.7	3
相双	256.9	186.1	137.0		580.0	5
いわき	616.0	40.0			656.0	1
全体	6,810.7	451.9	137.0	10.0	7,409.5	32

※空欄は本年度の散布実績がない項目である。

※その他は松くい虫防除である。

※小数第２位を四捨五入しているため、合計が合わない場合がある。

表4-7 水稻における散布面積の内訳（単位：ha）

農林事務所	殺菌剤	殺虫剤	殺虫殺菌剤	除草剤	市町村数
県北		376.0	111.1		3
県中	23.5	62.0	747.5		3
県南		370.0	1,960.8		7
会津	108.0	876.7	404.6		10
南会津	11.7		300.1		3
相双		234.2		22.7	4
いわき	42.0	249.0	325.0		1
全体	185.2	2,168.0	3,849.0	22.7	31

※空欄は本年度の散布実績がない項目である。

※小数第２位を四捨五入しているため、合計が合わない場合がある。

表 4-8 大豆における散布面積の内訳（単位：ha）

農林事務所	殺菌剤	殺虫剤	殺虫殺菌剤	全体
県北		10.0	10.0	20.0
県中				
県南		56.1		112.4
会津		2.0	86.4	93.4
南会津				
相双			93.0	186.1
いわき				40.0
全体		68.1	189.4	451.9

※空欄は本年度の散布実績がない項目である。

※小数第 2 位を四捨五入しているため、合計が合わない場合がある。

（２）マルチローターによる空中散布（殺虫剤の計画のみ）

ア 全体の散布計画面積

2024 年に提出のあった散布計画（殺虫剤・殺虫殺菌剤のみ）の延べ面積は 6,281.6ha となり、前年比 129.1%となった（表 4-9）。

表 4-9 農林事務所別作物別計画面積（単位：ha）

農林事務所	水稻	大豆	野菜	全体	市町村数
県北	606.7		0.1	606.8	4
県中	1,552.4	55.6		1608.0	10
県南	1,002.3			1002.3	9
会津	1,233.7	40.7		1274.4	11
南会津	500.8	20.0		520.8	3
相双	560.9	254.7	5.8	821.4	9
いわき	447.9			447.9	1
全体	5,904.7	371.0	5.9	6,281.6	47

※空欄は本年度の散布計画の提出がなかった項目である。

※小数第 2 位を四捨五入しているため、合計が合わない場合がある。

イ 水稻における散布計画面積

2024 年の水稻における散布計画面積は、5,904.7ha となり、前年比 132.8%となった（表 4-9）。

ウ 大豆における散布計画面積

2024 年の大豆における散布計画面積は、371.0ha となり、前年比 94.2%となった（表 4-9）。

(3) 指導事項の概要

ア 農薬適正使用について

「農薬の空中散布における福島県無人航空機安全ガイドライン（令和２年４月１日施行）」に基づき、実施主体への空中散布実施計画・実績報告提出を求める際に農薬適正使用等を周知した。また、各マルチローターのスクールや販売店に、同ガイドラインに基づく殺虫剤散布計画提出の依頼文書及び農薬適正使用等の周知文書を送付した。

イ 事故防止について

「産業用無人ヘリコプターマニュアル」や「産業用マルチローターマニュアル」、「無人航空機による農薬等の空中散布における安全対策について」等へのリンクをホームページに掲載して、事故への注意喚起・事故情報の周知を行った。また、航空法に基づく事故対応についても実施主体へ通知した。これらのこともあり、2024年は農薬事故の発生はなかった。

第5 研究成果等

1 調査研究

(1) イネカメムシの発生地域の把握

ア 目的

2023 年 8 月 21 日にいわき市平地区で本種がすくい取りにより捕獲され、本県への侵入が約 40 年ぶりに再確認された。そこで、分布状況を把握するため、いわき市を中心に発生地域を調査した。

イ 方法

(ア) 発生地域の調査

巡回調査によるすくい取り調査に加え、新たにいわき市内全域の水田を対象に、すくい取り調査を実施した。時期は7月23日、8月26日の2回、20回振りで実施した。また、白色粘着板による誘殺調査を実施した（クモヘリカメムシフェロモントラップを兼ねる）。

(イ) 越冬調査

4月16日に前年度発生があったいわき市のほ場において、畦畔の枯れ草中の成虫を調査した。

ウ 結果と考察

(ア) いわき市内の発生地域

いわき市内の水田ほ場 33 地点をすくい取り調査し、平片寄地区のほ場で8月21日に本種成虫8頭を捕獲した（図5-1）。また、平下大越地区で7月20日に白色粘着板に、1頭の誘殺が確認された。本年は侵入確認2年目で、いわき市内では、まだ一部の地域での発生であった。

(イ) 越冬調査について

成虫は、発見できなかった。1カ所の調査であり、次年度以降、時期と場所を拡大し調査したい。

(ウ) いわき市を除く、県内全域の発生地域

いわき市を除く、県内の水田ほ場 27 地点で水田内すくい取り調査（8月上旬、8月下旬）を実施した結果、本種成虫を確認できなかった（図5-2）。

関係者から本種の疑いのある個体を発見したとの通報が2件あり、採取した個体、ほ場内撮影の画像から、本種成虫と断定した。対象ほ場は矢祭町石井、大熊町熊だった。なお通報後に現地ほ場ですくい取り調査を行ったが成虫は確認できなかった。



図5-1 いわき市内におけるイネカメムシの発生状況

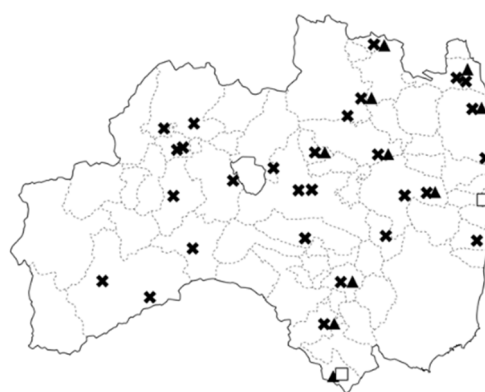


図5-2 福島県内（いわき市を除く）におけるイネカメムシ発生状況

- すくい取り調査により確認した地点
- × すくい取り調査により確認できなかった地点
- △ 白色粘着板に誘殺された地点
- ▲ 粘着板で捕獲されなかった地点

- すくい取り調査により確認した地点
- × すくい取り調査により確認できなかった地点
- △ 白色粘着板に誘殺された地点
- ▲ 粘着板で捕獲されなかった地点
- 関係者からの通報により確認した地点

(2) クモヘリカメムシにする各種薬剤の斑点米抑制効果試験

ア 目 的

斑点米カメムシに登録のあるシラフルオフェンが販売中止となったことから、既存の農薬の効果を評価するため、系統の異なる4種類の薬剤について薬剤ごとの斑点米抑制効果を検討した。

イ 方 法

穂数を10本に揃えたポットイネに対し、出穂期を起点として当日、7日後、14日後にそれぞれハンドスプレーを用いて各薬剤を散布し、14日後の散布直後にクモヘリカメムシ雌成虫2頭を放飼した。放飼個体は、2024年8月20日に相馬市今田の水田ほ場ですくい取りにより採取し、飼育したものを使用した。

イネ株は8月14日に網目1mmの防虫ネット袋で穂を覆い、9月2日の放飼後から収穫期までそのまま管理した。ポットは農業センター内の水田土壌を使用し、イネは5月27日播種、6月24日移植、6月25日と8月5日に追肥、出穂期は8月26日で放飼時は乳熟期頃となった。

供試薬剤はジノテフラン（商品名スタークル）水和剤、エチプロール乳剤（商品名キラップフロアブル）、スルホキサロル（商品名エクシード）水和剤、フルピリミン（商品名エミリア）フロアブル、無防除は水道水とし、各区3反復で実施した。放飼期間は72時間とし、成熟期に刈取、乾燥、調製し斑点米混入率を算出した。なお、試験は2022年から2024年まで3か年実施し、2022年の放飼頭数は株あたり成虫2頭＋幼虫3頭、2022年および2023年の放飼期間は収穫期までである。

ウ 結 果

(ア) 殺虫効果

ジノテフラン、エチプロールは当日区で72時間後生存率がゼロとなり、殺虫効果を示した。スルホキサロル水和剤、フルピリミンフロアブルは、72時間後生存率は100%で殺虫効果は認められなかった(表5-1)。

(イ) 斑点米混入率の抑制

2022年の斑点米混入率は、ジノテフラン、エチプロール、スルホキサロルの当日区が対無防除区と比較してそれぞれ斑点米混入率が3%、29%、12%と低かった(表5-2)。2023年は、ジノテフラン、エチプロール、スルホキサロルの当日区が対無防除区と比較してそれぞれ36%、36%、27%と低かった(表5-2)。2024年は、ジノテフラン、エチプロール、スルホキサロル、フルピリミンの当日区が対無防除区と比較してそれぞれ37%、61%、24%、26%と低かった。同様に7日前放飼区は対無防除区と比較してそれぞれ87%、96%、61%、24%となった(表5-2)。

以上の結果から、斑点米形成抑制の効果は供試したすべての薬剤で認められ、スルホキサロル水和剤は、2022、2023年の結果から7日間は効果があると考えられた。フルピリミンフロアブルは、2024年のみの結果であるが同様に7日間の効果はあると考えられた。

表5-1 生存率の推移（2024年）

供試薬剤 ×希釈倍率	48時間後生存率%			72時間後生存率%		
	薬剤散布後成虫放飼までの期間					
	当日	7日	14日	当日	7日	14日
ジノテフラン 水和剤×1000	83.3	100	100	0	100	100
エチプロール 乳剤×1000	16.7	100	100	0	100	100
スルホキサロル 水和剤×2000	100	100	100	100	83.3	100
フルピリミン フロアブル×1000	100	100*	83.3	100	100*	66.7
無防除	100	100	100	100	100	100

各区雌2頭放飼した。数値は3反復の平均値 *は2反復の平均値

表 5- 2 斑点米の発生状況

供試薬剤 ×希釈倍率		2022年			2023年			2024年		
		薬剤散布後成虫放飼までの期間								
		当日	7日	14日	当日	7日	14日	当日	7日	14日
ジノテフラン 水和剤×1000	斑点米混入率%	0.13	0	0.10	0.96	1.36	2.52	0.17	0.40	0.42
	対無防除比%	3	0	3	36	51	95	37	87	91
エチプロール 乳剤×1000	斑点米混入率%	1.13	2.86	2.05	1.00	0.56	2.02	0.28	0.44	0.71
	対無防除比%	29	74	53	38	21	76	61	96	154
スルホキサロル 水和剤×2000	斑点米混入率%	0.47	1.47	0.47	0.71	0.89	—	0.11	0.28	0.34
	対無防除比%	12	38	12	27	33	—	24	61	74
フルピリミン フロアブル× 1000	斑点米混入率%	—	—	—	—	—	—	0.12	0.11	0.34
	対無防除比%	—	—	—	—	—	—	26	24	74
無防除	斑点米混入率%	3.87	3.87	3.87	2.66	2.66	2.66	0.46	0.46	0.46

2022年、2023年の放飼期間は収穫まで、2024年は72時間

2022年の放飼頭数は成虫2頭、幼虫3頭 2023年、2024年は成虫2頭

数値は3反復の平均値

(3) モモにおけるウメシロカイガラムシの発生活長の把握

ア 目的

近年、モモにおけるシロカイガラムシ（ウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ）の被害が問題となっている。近年、春期の温暖化により、発生ピークが従来より前進している可能性や、秋期の温暖化により世代数が増加している可能性があり、発生活長の把握や有効積算温度を用いた発生ピークの予測が重要となっている。そこで、農業総合センター内のサクラに発生しているウメシロカイガラムシについて、発生活長を調査するとともに、センターの気象観測データに基づく発生ピークの推定値との比較検証を行い、今後の発生予測情報の作成に資する。

イ 方法

センター内の発生活長の調査については、5月～10月まで、ウメシロカイガラムシが発生しているサクラとウメの各2樹を供試し、1樹当たり枝10か所に両面テープを巻き、1週間おきに交換し、回収したテープに付いた歩行幼虫数を計測する。

ウ 結果及び考察

サクラ2樹における第1世代幼虫は、ふ化開始が4月30～5月8日、発生ピーク（第一世代の累積の歩行幼虫数に対して50%誘殺された日）が5月8～16日であった（図5-3）。ウメ2樹における第1世代幼虫の発生は、最初に設置した4月19～30日から確認されたため、ふ化開始は不明であった。発生ピークは、5月6～14日であった（図5-4）。

農業総合センターの日平均気温を用いた有効積算温度による予測値(5/5)と、第1世代ふ化盛期の実測値(5/6～5/14)はほぼ一致していたことから（表5-3）、有効積算温度による予測の適合性があると考えられた。アメダスデータを用いた各地点の有効積算温度による予測値は、福島(4/28)から玉川(5/8)まで10日程度差が認められたため（表5-4）、今後は、関係機関と検討の上、県北・県中・会津地方ごとの防除時期の予測について、定期予測情報等での情報発信を行う予定である。

なお、本県病害虫防除指針では、ウメシロカイガラムシの第1世代幼虫の防除時期は5月25日頃（満開後36日）としている。本年の当センターのモモの満開後36日は5月20日頃であり、生育の前進に伴った防除を行っても、上述の幼虫の発生ピークを過ぎていたことから、防除時期の再検討が必要と考えられた。また、梁川アメダスの過去30年の日平均気温データ(2005～2024年)を用い、上述の有効積算温度による予測日を推定すると、過去20年の平均(5月17日)に対し、2024年は4月30日と2週間以上早期化し、年々早くなる傾向が見られた（図5-5）。

ウメ1 樹については、10 月 1 日まで発生消長を調査した結果、第 2 世代幼虫のふ化盛期は、7 月 16 ～24 日であり、「あかつき」の収穫前であった。県北地方の 7 月 16 日、7 月 18 日の巡回調査において、ウメシロカイガラムシの発生は割合は 11.1%と平年(0.6%)より高かったが、第 2 世代幼虫による加害と考えられた。さらに、従来、本県では 5 月と 8 月の 2 回発生と考えられていたが、9 月に入り第 3 世代幼虫の発生が確認され、越冬量が増加する恐れがあると考えられた(図 5- 6)。

本結果は単年度の調査結果であるため、次年度も継続して調査を行う必要があると考えられた。

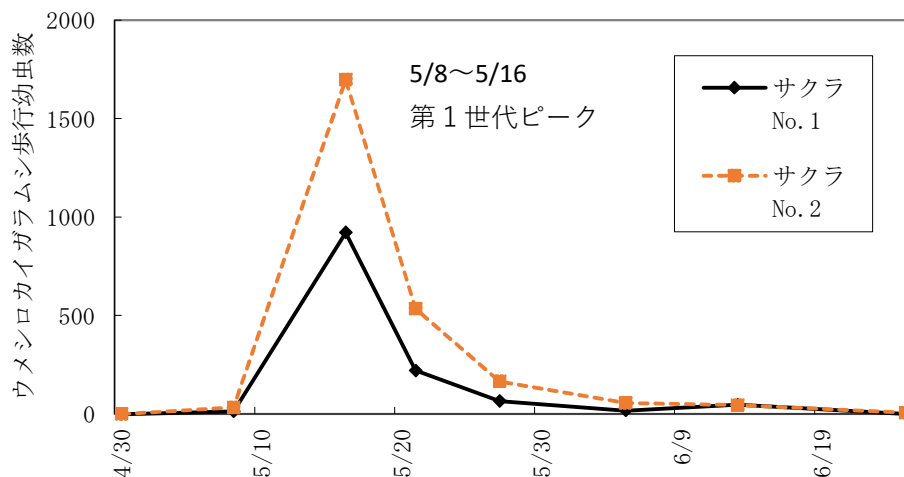


図 5- 3 サクラ 2 樹におけるウメシロカイガラムシの発生消長

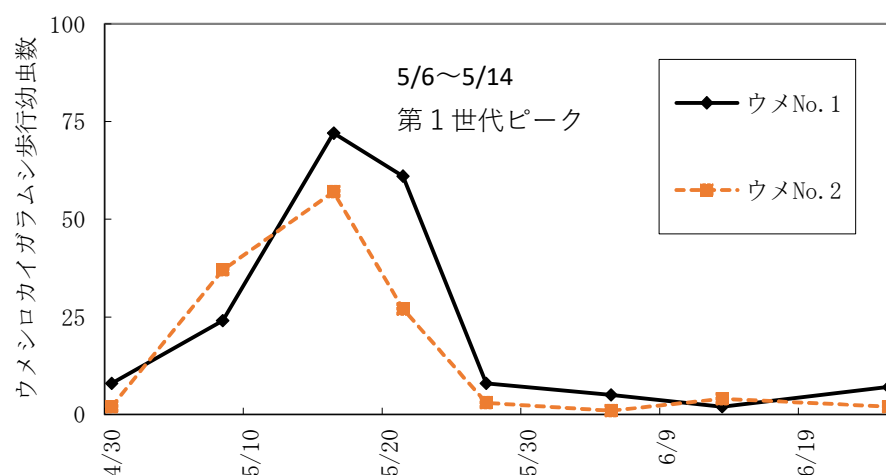


図 5- 4 ウメ 2 樹におけるウメシロカイガラムシの発生消長

表 5- 3 ウメシロカイガラムシの発生予測（郡山市、2024 年）

起算日	発生零度	第1世代（有効積算温度）		計算法	発育零度有効積算温度の引用元
		ふ化開始	ふ化盛期		
1月1日	10℃	5 / 3 (140日度)	5 / 5 (161.1日度)	平均法	福島県（2006）
粘着テープ調査による発生ピーク		5 / 6 ～5 / 14 (178～220日度)			

- 1) 予測の計算は農業総合センター内（郡山市高倉）観測の温度データを使用した。
- 2) 福島県（2007）有効積算温度によるウメシロカイガラムシ第 1 世代幼虫のふ化時期の予測：平成 17 年度普及に移す技術。
- 3) （ ）内は有効積算温度を示す。起算日は 1/1、計算法は平均法を用いた。

表 5- 4 各地点のウメシロカイガラムシの発生予測

	福島 (アメダス)	梁川 (アメダス)	郡山 (アメダス)	玉川 (アメダス)	白河 (アメダス)	若松 (アメダス)
本年	4月28日	4月30日	5月5日	5月8日	5月6日	5月4日

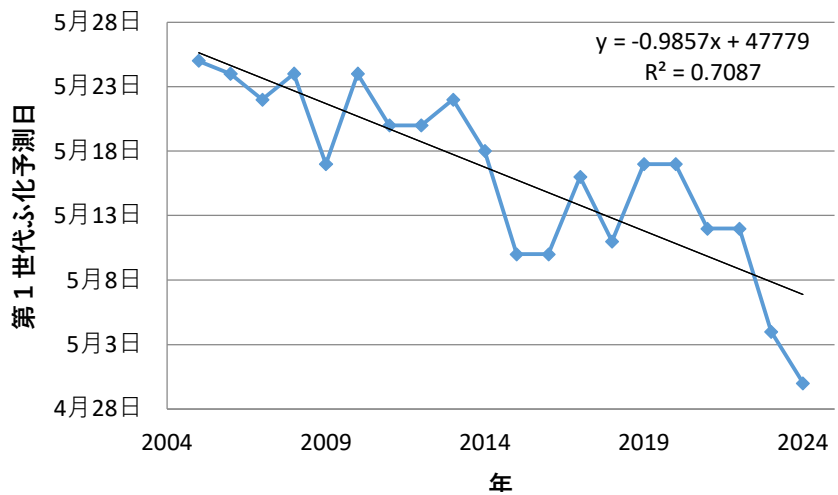


図 5- 5 福島県梁川町におけるウメシロカイガラムシ第 1 世代ふ化予測日（年別）

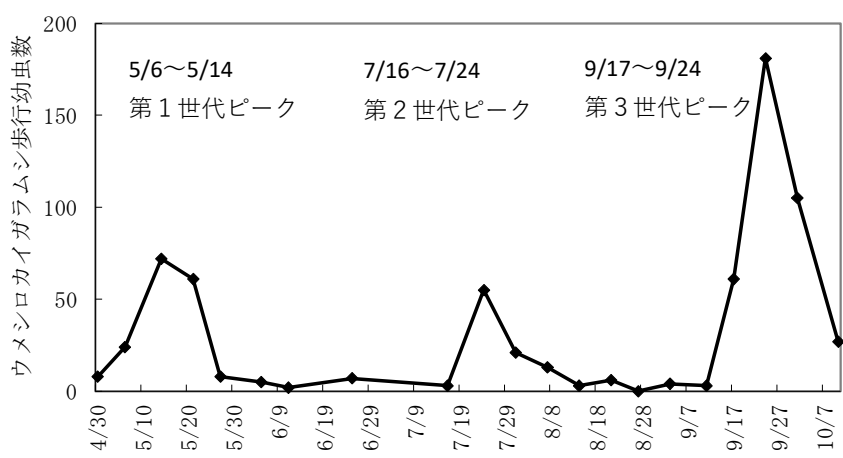


図 5- 6 ウメ 1 樹におけるウメシロカイガラムシの発消消長（郡山市）

(4) 果樹カメムシ類の多発生について

ア 目的

2024 年（令和 6 年）は、2020 年以來に果樹カメムシ類が多発生したため、この要因について調査データから要因を解析する。

イ 方法

フェロモントラップ調査：県内 8 地点において、4 月 5 半旬から 10 月まで半旬ごとに果樹カメムシ類の誘殺状況を調査した。

ウ 結果及び考察

フェロモントラップ調査の結果、全8地点で越冬世代成虫、第1世代成虫の誘殺がともに確認された。誘殺量は、平年の約5～9倍であった(図5-7、図5-8)。なお、例年誘殺の主体となっている種類はチャバネアオカメムシであるが、トラップに使用するルアーはチャバネアオカメムシ用であるため、そのままチャバネアオカメムシが主であると言い切れないことには注意が必要である。

越冬世代が多かった要因としては、県北地方では2023年のスギ・ヒノキ花粉の飛散量(観測地点:福島市)が、17,273個/cm³(環境省ホームページ)と直近10年平均の6,261個/cm³を大きく上回り、果樹カメムシ類の餌となるスギ・ヒノキの球果量が多くなったことと考えられた。餌量が多くなれば果樹カメムシ類が増殖し、第1世代成虫が増え(2023年のフェロモントラップ調査から、8地点中4地点で9～10月に平年より多く誘殺あり)、2024年の越冬世代の発生につながったと思われる(図5-9)。これについては、病虫害防除所で解析した結果、県北地方のスギ・ヒノキ花粉飛散量と翌年のチャバネアオカメムシの越冬世代の発生量の間に相関があることを確認された。これにより、県北地方においてチャバネアオカメムシ越冬世代の発生量の予測(特に多発生となるか)を可能としている。

越冬世代の活動が早まったのは、2024年の4月の平均気温(アメダス福島)が15.6℃と平年より3.9℃高かったためであり、フェロモントラップでは4月下旬から越冬世代の誘殺が確認された(図5-7、図5-8)。

第1世代については、会津坂下町、相馬市以外の地点では誘殺が多かった。なお、この2地点はほ場で調査を行っていたが、被害回避のためトラップを移動したことも影響している可能性が考えられた。

県北地方では、スギ・ヒノキ花粉の飛散量が4,463個/cm³(環境省ホームページ)と直近10年平均の7,209個/cm³より少なくなり、スギ・ヒノキの球果量が少なく、餌不足となった第1世代が果樹園に飛来したと考えられた(図5-7、図5-8)。病虫害防除所では2010年の解析において、福島市及びいわき市のスギ花粉飛散量と果樹カメムシ類の発生量の間に相関があることを確認しており、花粉飛散が多かった翌年に花粉飛散が少なくなるとカメムシが多発生となるとしている。2024年の発生は、これと同様の経過となった。なお、このことについて、福島県全域においてもこのような現象がみられるのか、データを積み重ね解析していくことが必要と考えられる。

また、2024年9～10月にこれまで浜通りで発生が確認されていたツヤアオカメムシが、中通りや会津でも確認された(表5-5)。東北各地でも同様にツヤアオカメムシの発生がみられていたが、その要因は不明である。ただし、気象の温暖化によりツヤアオカメムシが生息域を拡大させていることも考えられるので、今後の調査研究が待たれる。

第1世代の発生と関連して、リンゴ、ナシで果実被害がみられ、特にリンゴではツヤアオカメムシの飛来があったためか、10月～11月に被害が増加した(図5-10)。

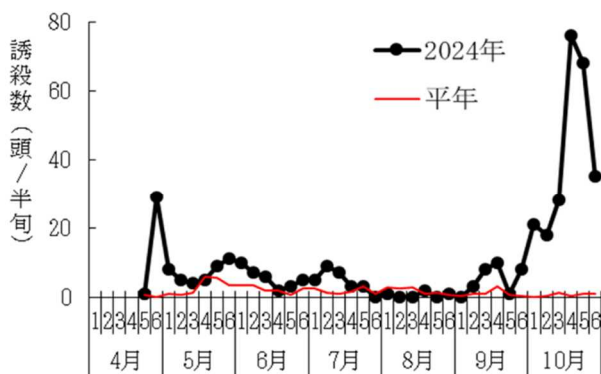


図5-7 果樹カメムシ類の誘殺状況(国見町)



図5-8 果樹カメムシ類の誘殺状況(鏡石町)

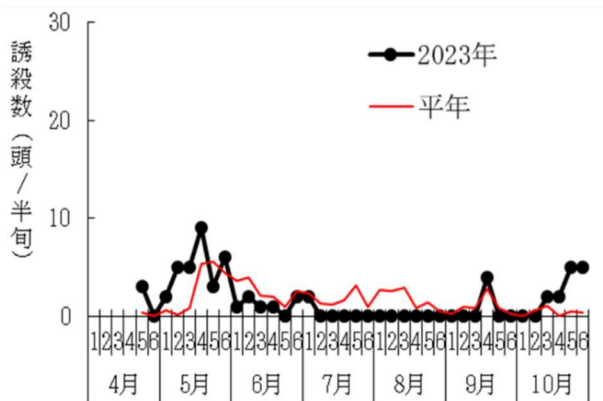


図 5- 9 果樹カメムシ類の誘殺状況（2023 年、国見町）

表 5- 5 果樹カメムシ類の種別誘殺状況（％）

地域	種類		月 別 誘 殺 比 率（％）							年間誘殺数 （頭）
			4・5月	6月	7月	8月	9月	10月	年間	
県北 （国見町）	チャバネ	2024年	100.0	97.0	100.0	100.0	86.7	9.8	44.9	185
		例年	100.0	97.8	100.0	100.0	85.7	84.4	96.8	77.8
	クサギ	2024年	0.0	3.0	0.0	0.0	13.3	3.7	3.4	14
		例年	0.0	2.2	0.0	0.0	14.3	15.6	3.2	2.6
	ツヤアオ	2024年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	86.6	51.7	213
		例年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0
県中・県南 （鏡石町）	チャバネ	2024年	100.0	82.8	96.5	98.9	56.0	7.5	74.4	612
		例年	100.0	89.8	95.2	96.4	81.3	80.0	92.1	127.8
	クサギ	2024年	0.0	17.2	3.0	1.1	37.0	8.5	13.0	107
		例年	0.0	10.2	4.0	3.6	18.8	20.0	7.8	10.8
	ツヤアオ	2024年	0.0	0.0	0.5	0.0	7.0	84.0	12.6	104
		例年	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2
会津 （会津坂下町）	チャバネ	2024年	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	0.0	93.2	55
		例年	100.0	95.7	100.0	100.0	誘殺なし		98.4	36.2
	クサギ	2024年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0
		例年	0.0	4.3	0.0	0.0	誘殺なし		1.6	0.6
	ツヤアオ	2024年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	6.8	4
		例年	0.0	0.0	0.0	0.0	誘殺なし		0.0	0.0
浜 （相馬市）	チャバネ	2024年	88.0	94.0	89.7	100.0	100.0	0.0	86.4	255
		例年	52.9	95.6	99.5	97.6	85.2	71.4	91.2	174.8
	クサギ	2024年	2.4	0.0	10.3	0.0	0.0	7.1	2.7	8
		例年	10.0	2.1	0.5	2.4	12.0	12.2	4.0	7.6
	ツヤアオ	2024年	9.6	6.0	0.0	0.0	0.0	92.9	10.8	32
		例年	37.1	2.3	0.0	0.0	2.8	16.3	4.8	9.2

※ チャバネ：チャバネアオカメムシ、クサギ：クサギカメムシ、ツヤアオ：ツヤアオカメムシ

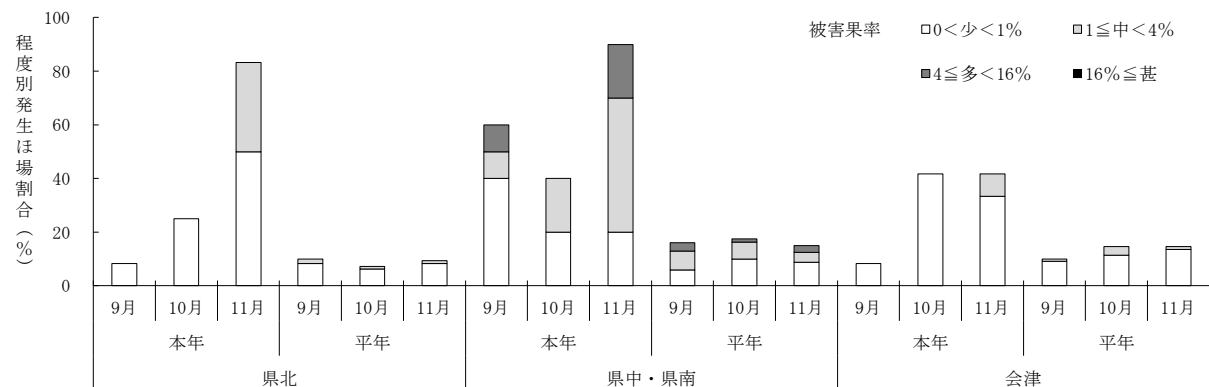


図 5- 10 リンゴ果実における果樹カメムシ類の被害発生状況（2024 年）

(5) ナシヒメシンクイの発生活長について

ア 目的

本県におけるナシヒメシンクイの発生は、越冬世代から第3世代までの年4回とされているが、2023年は高温で経過したため、第4世代が発生し、ナシ「あきづき」などに被害が発生した。

そこで、2024年も引き続きフェロモントラップにより発生活長を調査し、発生回数を確認する。また、アメダスの気象データを用いた発生予測との適合を確認する。

イ 方法

鏡石町の農家防除員（リンゴ）のほ場に設置したフェロモントラップにより、発生活長を調査（4～10月の半月ごと）した。

発生予測は、有効積算温度プログラムを用い、アメダスデータは「玉川」、「郡山」の2地点のものを使用した。

ウ 結果及び考察

鏡石町における2024年のナシヒメシンクイの発生は、誘殺状況から越冬～第4世代の5回であったと考えられた（図5-11）。また、20024年の誘殺量は、過去2年と比較して多い傾向であった。フェロモントラップの誘殺量は、生息密度を表すものではないとされるが、2024年はモモの芯折れ被害がかなり多く、ナシの果実被害が「幸水」から確認されるなど、高温による発生の前進化とあわせ密度も高かったと考えられた。

2024年の発生予測は、第1世代誘殺盛期が玉川、郡山とも実測から1半月の遅れ、第2世代誘殺盛期が玉川で1半月、郡山が2半月の早まり、第3世代誘殺盛期は、玉川が3半月、郡山が4半月の早まり、第4世代誘殺盛期は玉川が2半月、郡山が3半月早まった。（図5-11、表5-6）

2023年の発生予測は、第1世代誘殺盛期が玉川1半月遅れ、郡山が実測と同、第2世代は玉川が1半月、郡山で実測と同、第3世代は、玉川が実測と同、郡山が2半月の早まり、第4世代は玉川が1半月、郡山が3半月早まった。（図5-12、表5-6）

2022年の発生予測は、第1世代誘殺盛期が玉川で1半月遅れ、郡山で実測と同、第2世代誘殺盛期は玉川で実測と同、郡山で1半月の早まり、第3世代誘殺盛期が、ともに8月4半月と予測されたが、誘殺ピークは不明であった。第4世代誘殺盛期が玉川、郡山とも2半月の遅れであった。（図5-13、表5-6）

予測の精度は、第1、第2世代は比較的精度が高いと思われ、第3、第4世代はあまり適合していなかった。また、郡山より玉川のデータの方がより実測に近い傾向であったと考えられた。

ナシ果実の防除のため、第3世代以降の予測は重要であるので、より精度が高くなるよう工夫が必要と考えられた。

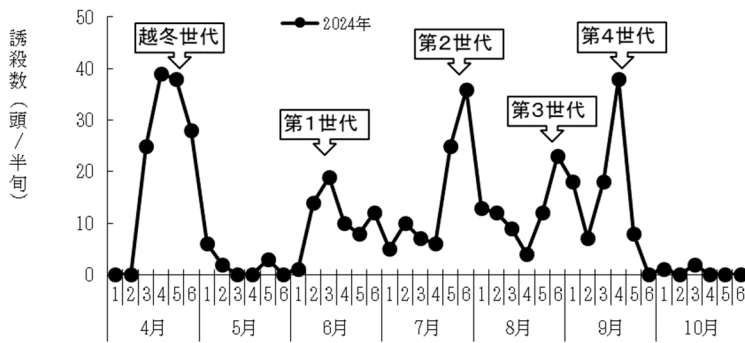


図 5- 11 フェロモントラップにおけるナシヒメシクイの誘殺状況（2024 年、鏡石町）

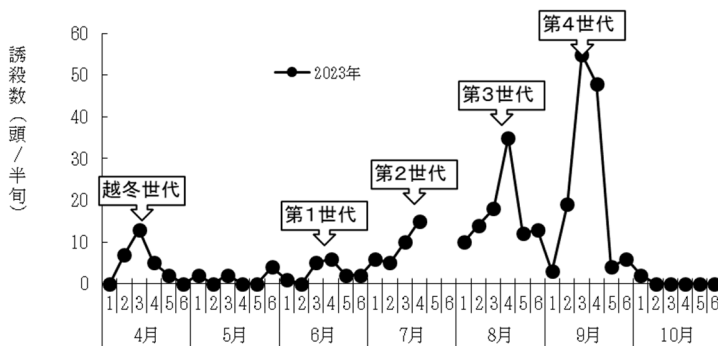


図 5- 12 フェロモントラップにおけるナシヒメシクイの誘殺状況（2023 年、鏡石町）

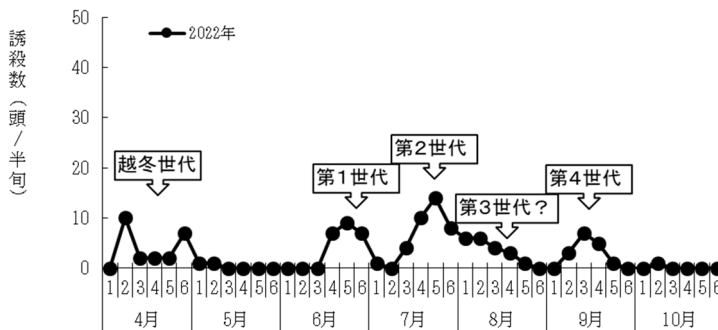


図 5- 13 フェロモントラップにおけるナシヒメシクイの誘殺状況（2022 年、鏡石町）

表 5- 6 ナシヒメシクイの誘殺ピークの実測とアメダスデータ（玉川及び郡山）による予測の状況

年	地点	越冬世代 誘殺盛期	第1世代 誘殺盛期	第2世代 ふ化ピーク	第2世代 誘殺盛期	第3世代 ふ化ピーク	第3世代 誘殺盛期	第4世代 ふ化ピーク	第4世代 誘殺盛期	第5世代 ふ化ピーク
2024	実測（鏡石町）	4月5半旬	6月3半旬		7月6半旬		8月6半旬		9月4半旬	
	玉川		6月4半旬	6月6半旬	7月5半旬	7月6半旬	8月3半旬	8月4半旬	9月2半旬	9月3半旬
	郡山		6月4半旬	6月5半旬	7月4半旬	7月5半旬	8月2半旬	8月3半旬	9月1半旬	9月2半旬
2023	実測（鏡石町）	4月3半旬	6月4半旬		7月4半旬		8月4半旬		9月3半旬	
	玉川		6月5半旬	7月1半旬	7月5半旬	7月6半旬	8月4半旬	8月5半旬	9月2半旬	9月4半旬
	郡山		6月4半旬	6月6半旬	7月4半旬	7月5半旬	8月2半旬	8月3半旬	8月6半旬	9月2半旬
2022	実測（鏡石町）	4月4半旬	6月5半旬		7月5半旬		ピークなし		9月3半旬	
	玉川		6月6半旬	7月1半旬	7月5半旬	8月1半旬	8月4半旬	8月6半旬	9月5半旬	10月3半旬
	郡山		6月5半旬	6月6半旬	7月4半旬	7月6半旬	8月4半旬	8月6半旬	9月5半旬	10月1半旬

2 成果の公表

(1) 研究会等発表

氏 名	題 名	研究会名等	発表年月
藤田剛輝・瀧田誠一郎	福島県県北地方における 2024 年のモモ灰星病花腐れ症状の多発要因	令和 6 年度日本植物病理学会東北部会	2024 年 9 月
藤田剛輝	福島県県中地方のリンゴ園におけるリンゴモンハマキの発生消長	第 28 回農林害虫防除研究会	2024 年 10 月
藤田剛輝・瀧田誠一郎	福島県中通り地方における 2024 年の果樹カメムシ類の多発生とスギ・ヒノキ花粉飛散数を用いた越冬世代の発生量予測	第 78 回北日本病虫害研究発表会（ポスター発表）	2025 年 2 月
藤田剛輝・瀧田誠一郎 ・平塚智咲	2024 年の高温条件下におけるウメシロカイガラムシの発生回数の増加と発生時期の早期化	関東東山病虫害研究会 第 17 回研究発表会	2025 年 2 月

(2) 研究会誌等投稿

著 者	題 名	発表誌名等	発表年月
藤田剛輝	ナシ黒星病の「幸水」果実感染に対する SDHI 剤および DHODHI 剤の防除効果	北日本病虫害研究会報	2024 年 12 月

2025 年 10 月発行

発行者 福島県病虫害防除所

〒963-0531

福島県郡山市日和田町高倉字下中道 116 番地
(福島県農業総合センター安全農業推進部)

電 話	024-958-1707～1709
F A X	024-958-1727
e-mail	boujyo@pref.fukushima.lg.jp yosatsu@pref.fukushima.lg.jp nougyou.anzen@pref.fukushima.lg.jp
ホームページ	https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/